こんな明日はいかが？

1

繭（まゆ）に照明ダイオード光がみち、目覚める。静かな音楽が一気に激しいリズム、寝ボケが吹っ飛んだ。気分もいい、酸素濃度が高いからか。

壁のサブディスプレイを見ると……〇五四〇？　急がないと。

〝わがままま、バカじゃ生きていけない、自由でなきゃ生きる価値はない〟と、あのあと書いた繭の壁を空ける。

風呂で中水で泡だてて海水で洗い、最後に中水で流して更衣室にいくと、もうみんな着替え終わっていた。着替えとかは個室のほうがいいかもしれないけど、ここ――食糧・エネルギー生産メガフロート居住区に、そんなスペースはないのもわかってる。

本土でも繭が普及してるようだし。

あ、二十一世紀初頭の読者がわかるように説明するんだ、面倒だな。繭、というのは一

部持ち上がって安楽椅子のようにもなるベッドを中心にした、地上の――そう、昔のテレビで見たカプセルホテルのような個人のスペースだ。

右手側の壁が全部棚。壁に折りたためる机板もあり、それを倒してベッドの背を起こすとちょっと懐古趣味のコタツに座椅子のようになる。左手の壁が開いて出入り口になる。

右手側、棚の下にある長く大きなスペースに、昔はパソコン、ゲーム機、テレビ、ビデオ、ラジオ、有線、レコードプレイヤー、電話、時計などと分かれていたらしい総合端末が入ってる。

それに全体で音響を計算されて7・1サラウンドと、最近は三次元ハイビジョン多目的接眼ディスプレイがついてる。昔は映画でいい映像を楽しんでいたらしいけど、今はいい繭を借りるのがいちばんだ。ライブが最高だけど、もちろん。

天井は、背は大人並みのオレが背もたれを起こし、手を普通に挙げたら届く程度。

容積が小さいから空調効率もよく、酸素濃度を高めれば勉強などの効率もいい、とのことだ。停電になったら自動的に窓が開き、外気が通るらしい。

コンピュータも昔のパソコンより容積が大きいから安い。いくつも繭がある家や寮なら、まとめて一つの大型コンピュータで処理することもできる。

問題は、上級生によれば女の子と寝るには不便だってこと。船や倉庫など色々苦労しているらしい。

朝食はかわりばえしない七分づきご飯、蒸し魚、地元製ラクダベーコンと豆とトマトとチーズのスープ、ぬか漬けのヤシの新芽やビート、大根。

もう飽きてるけど、本土の人にはおいしくて健康だ、ということらしい。

明日は本土からインスタントラーメンが届いてるはずで、楽しみ。またハワイまで航海したら、あのおいしい料理が食べたい。

朝ネットの暇は――まあ、学校に着いたらゆっくりやるか。

家族区域から出ても、この居住、軽工業メガフロートは半透明の太陽電池で覆われて薄暗い。でも、港に出れば朝とはいえ強烈な回帰線の日光が刺さる。波の照り返しで海面がまぶしい。

埠頭には、子供たちが集まっていた。

見上げる大風車は相変わらず力強く回り、遠くには海鳥の群れが立ちのぼっている。昔は風車が鳥を殺すと問題になったが、レーダーで一定空域を見張り、動くものには自動的に死なない程度のレーザーを当てる防鳥器が解決した。

「今行くよ！」

「くるよ！」

これって何か意味があるんだろうか。物心つく前からみんないうけど。
「由、今日は掌帆長（ボースン）お願い」
「ん」
と答え、昔は大きく感じたブリッグに飛び乗った。
「ん、じゃないでしょ、今日はあたしが船長よ！」
「はい、わかりました！　っ……」
くそ、明日はオレが船長だから、そのとき何かミスったら覚えてろよ――
ぐっと揺れが来る。いきなり外洋うねりがもろ――といっても、内陸の波なんて数回しか知らない。
ここ、太平洋のど真ん中、硫黄島と南鳥島の間にある日本第七メガフロート群の４番、通称新緑ヶ丘が故郷だから。
少し動力を借りてしっかり畳まれた、強化蜘蛛蛋白・炭素複合繊維の帆を広げると、ぐっともやい綱が張り、水が滴る。
「全員そろった？　出港（アヘッド）！」
「ほら、しっかり持って。とも放（レッコ）します、サー」
と、小さい妹の美香にもやい綱をちょっといじらせ、離させた。ぐっと吐き気がくるけど、抑えこんで遠くを見て――酔うのは恥じゃない、仕事ができないのが恥なんだ――といっても恥ずかしいものは恥ずかしい。

埠頭を離れて、美香がほっとしたように吐き、こっちもほっとする。困ったところが似たよ。
「酔うのは恥じゃない、仕事ができないのが恥なんだ」
「お兄ちゃんこそ、ちゃんとやってる？」
「通学船２２０―４４３―１４、０６２３、硫黄島学園人工島に向けて、出港しまーす！」
船長室から、葉波のよく通る、少しかすれた声が聞こえてどきっとした。吐いているのを見られたか――？
「気をつけて！」
おっと、
「みっち、三番帆脚索（シート）を右に引いて。ハリー、もっとやさしく（ハンサムリィ）――うん」
裏帆を打とうとした帆が、うまく風をはらんでぱんと張り、ぐっと船が動き出す。
船酔いはいやだけど、この感覚はたまらない。陸で生まれるか海で生まれるか選べるとしたら――って、吐いてるときは迷わず陸を選ぶけど。
波と磨かれた甲板が、かっと照りつけてくる日光を照りかえす。今日は学校島に行けるので張り切ってる基礎準備校の子供たちが、鼻をつまみながら船底の水（ビルジ・ウォーター）をポンプで排水―

—するはずが水遊びを始めている。
甲板を、洗うそばから湯気がたつ。
基礎準備校も新しい学制だったな。四歳から十歳ぐらいまで、週六日で午前は読み書きそろばんと新素読と科学の初歩、午後は運動や音楽、色々な遊びを大体年齢別にやっている。落第したら合格まで補習学校。ストレートで卒業できるのは半分くらいで、オレも半年遅れた。葉波と峰はストレートなのが悔しい。
地域が運営するからいつもはメガフロート内だけど、週に一度は学校と船に慣れるためこうして出かけている。
「こら！」
また、葉波の声にどきっとして、裏帆を打ちかけた。

行きは順風だから、まあ苦労はそんなにしない。
海鳥が、まるで入道雲のように集まる人工マングローブ林メガフロートに近づく。その海鳥もあちこちに肥料分を散布してバランスよく広い海域の魚を増やしてくれる、大切な要素だ——けど——
鳥たちが帆桁（ヤード）で休もうと、ざっと寄ってくる。航跡がなんともいえない緑褐色に染まり、独特のにおいがする。

いい眺め？　とんでもない。
「わあっ、ついた」
「やーい、ふん、ふん、えんがぎゃっ！」
「みぃもやられた！　ふってくる！」
「甲板洗いなさい！」
「刺された、虫がくる！」
「勝手に海に入るな！」
特に基礎準備の子供たちがいると収拾がつかないもんだけど、葉波の一喝はきくな。
海鳥が糞の雨を降らし、いろいろ汚れるし人を刺す虫も飛んでくる。
まして、ここに汚水汚物を運ぶ生存公役は、二週間に一度だけどいやになる。
食糧生産メガフロートの風呂やトイレ、それに農業や家畜、水産加工の排水を処理しているだけでこんなら、大都市の近くにあるという汚泥処理専門人工干潟メガフロートに汚水汚物を運んでいる大型タンカーなんて、どんなに大変だろう——間違ってもやりたくない仕事だ。誰かがやらなきゃいけないが。
あと、ここは漁礁として珊瑚も含め水面下にいろいろ延びてきているから、注意しないと大変なことになる。まあ葉波は信頼できるし、いざというときはちゃんと大人がみていてくれてるから、大丈夫だろうけど。

それにしても、今朝はなぜここに近づいたのだろう？　なんか最近隠しごと多いな。
「エンジン始動します。出力――」
「了解！」
音もなく、最近スクリューに本格的に取って代わった水素燃料電池の常温超伝導電磁推進機関が水を吐く。航跡に力強く押し出され、塩素臭がかすかに漂う澄んだ線ができ、微妙に帆の感じが変わる。
といっても多くの船には安全のため、従来型のディーゼルエンジンとスクリューもついている。ディーゼルといっても、昔のように石油精製燃料なんて非常識なことはない。そんなことをしたらとんでもない再生不能産業税をとられる。再生可能な精製植物油だ。
ぐっと船が加速され、また帆の感覚が変わる。燃料を節約できるよう、また予定外の方向変換を起こしたり、帆やマストを破損したりしないよう、推進と帆走を併用する際にはこっちも注意しなければならない。
ローテで任されるようになって半年、最近やっとコツがつかめてきた――と思う。
次は東で別の農場メガフロートに寄って、そこは子供が少ないから十人ほど乗せて――おっと、帆がばたついた。
「帆脚索（シート）引いて！」
ちなみに水素燃料電池も実用化されたのは二〇一五年前後だったらしい。そのころにや

っと、貴金属を使わず鉄とナトリウム、アルミニウムなど安価な元素素材を原子単位で制御して作る触媒と、同様に原子の網で水素を効率よく安全、安価に貯蔵するシステムができた、ということだ。
「予備スクリューも錆止め運転するから、ちょっと帆を絞って！」
はいはい――きた！
やはりオレも、このドドドドっていうディーゼルエンジンの音が好きだ。ガソリン車がいいという大人の気持ちもわかる。

四十五分ぐらいで着いた学校も洋上のメガフロート。硫黄島周辺の生徒数六万を数え、三分の一程度が我々通学生、残りが寮生だ。
通えないほど離れたメガフロートの子供も寮に入るし、本土からわざわざ入る子もいる。
帆をたたんで、エンジンで港に滑りこむ。オレはもやい綱をつかんで埠頭に飛び移った、拍子に誰かにぶつかり、押し倒した。
むにゅ、と頬に柔らかな感触――これは、このあったかくてやわらかくて――
「ヘンタイっ!!」
叫び声と同時に、海に叩き込まれた。
ちょ、ちょっと待て！　繋留されそこなって波に揺れる船と埠頭のサンドイッチ――な

ぜか、ケチャップいっぱいのハンバーガーにかぶりつくイメージ――

迫る船が弾むようにずれ、オレのすぐ右手で埠頭にぶちあたった。

「もやい綱とって！」

「もやい綱ってなに？」

もがくオレの上で、そんな言葉が――それどころじゃない、水が巨大な腕のように――引きずり込まれ――うわ――

我に帰ると、なんとか、もやい綱が足に絡んでいたのが幸いして引き上げられたようだ。

「ちょっと、なに考えてるのよ！　海に冗談はないの、命に関わるのよ！」

「乙女を押し倒して、触ったヘンタイに、制裁を加えて、なにが悪いの！」

ぐぇ、げほ、ぺっぺっ。うーっ――

「あ、生きてた……死んでればよかったのに」

「ヘンタイ！　死んでればよかったのに」

二人の女の声がハモる。

大柄で堂々とした印象の葉波とは対照的に、すごく華奢な女の子。

真っ黒な髪と白い肌も、アメリカ人とのクオーターでブロンド、濃く潮焼けした葉波と対照的だ。

こんな、日本人形みたいな女の子があんな極悪なことを？

まあいいや、とにかく――間一髪助かった――

あらためて震えがくる。もし今日の船長が葉波じゃなかったら――あ、結局悪いのは、安全確認せず飛び移って、大切な繋留作業をし損ねたオレか――

「……すまん、助かった」

「謝るのはわたしにでしょ！」

――海の危険をわかっていない、全身でおかものです！　と叫んでるやつなんか知るか。多少可愛くても。やわらかかったけど。

学校で、朝礼前にケーコ――ケーコも説明するか、まず腕時計、音楽を聴くウオークマンやラジオ、そして二十世紀末に携帯電話、ゲーム機、ＰＤＡ、ノートパソコンと別々に発達したものが、二〇一〇年ごろ米軍と企業の共同研究から接眼ディスプレイ中心に革新されて統合、標準化された。

３Ｄのヘルメット型、ヘッドホン＋マイク＋サングラス型、ゴーグル型、２Ｄのスカウター型、腕時計型、懐古的なノート型など色々はやりすたりがあって結構面白い。

オレのは第二次大戦飛行帽型でグローブ入力。ちょっと古いしディスプレイを下ろさないと操作できないのが不便だけど、飽きのこないデザインで、ヘッドホンがかなりいいし３Ｄ映像もＯＫ。本体も小さいの、大きいけど高性能なのと使い分けられる。

それでネットをちょっと回っていると、朝礼が始まった。
メールで転校生の噂が飛びかっている。
もうすぐ夏休みなのに、いやそれより女か男か……げ、さっきのおかもの！
「埼玉から来た転校生の、岡野えまです。緑海寮に入ります。よろしくおねがいします」
同じクラスかよ。といっても、オレたち十八歳までの高等義務教育では、クラスなんて行事と掃除と給食と朝礼、それにいくつかの生存公役ぐらいしか関係はない。必修は徹底して習得してはじめて上に行ける積み重ね式だし、選択は十一歳から四十過ぎの生涯教育受講生までなんでもあり、もちろん習得度別の単位制だ。
昔は全部の授業を同い年だけの学級でやっていたそうだけど、それはめちゃくちゃだよ——先に行ける奴は時間と才能の浪費だし、ついていけない奴は必要な知識を習得できずに卒業することになる。
それに、どうしても嫌な奴がいたらどうなるんだ？　最近読まされた『ソロモンの指環』という本によると、狼は降参ポーズをした仲間をかみ殺さないよう本能にプログラムされているけど、牙がないハトはそれがないからひとつの檻に入れると残酷につつき殺す。人間もハト同様、素手じゃ仲間を殺すのが難しいから抑制本能がないそうだ。
その人間を一日中同じ教室に閉じこめるってのは、ハトたちを逃げ場のない檻に入れるのと同じことじゃないか。船と違って年齢も同じ、伝統やノウハウもないのに。

ひそひそ、とまたおかものか、という会話が交わされる。ここもまあ、逃げ場がないというほどじゃないけど狭いしな。
しかも、すぐ後ろの席ときている。
「よろしくね、あたしは相原葉波」
さっき怒鳴り合ったのも忘れたのか、葉波がもう仲良く話しかけている。
「それで、第三次石油危機をきっかけに日本の年金と財政、アメリカのドル、中国の人口と共産党支配が破綻したとき、互いに争って世界を戦乱と飢餓と混乱に陥れ、文明の衰亡を招くか、それとも文明国が手を携えて本当の共通の敵、貧困と無知と環境破壊と抑圧と専制と戦うか、〝人類文明の幸福な存続への総力戦〟を旗印にした日本の——」
退屈な講義に、ふと最近ネットで読んだりネット配信映画で見た、『北斗の拳』や《ウォーターワールド》の未来像を思い出す。本当に戦乱があったら、たしかに週に一日半と月一度の三連休は自由だけど、大人も子供も義務と面倒が多い世界ではなかったのだろう。
「——失業者や各国の余剰人口を吸収するため、大植林運動が起きました。さて、大植林運動の主な舞台はどこでしょう——長谷川くん、長谷川由くん！」
「由」
隣の葉波の声に、びくっとした。

「は、ええと」
「中国」
「それだけじゃ不十分よ、皇太子が花粉症だったからその対策として、首都圏近郊の杉林を植え替えたのがきっかけでしょ」
なぜか転校生が文句をいう。
「規模は中国、それにアフリカや南アジアでの世界的な運動のほうが大きいじゃない！グリーン・バイ・フード・トウ・ホープ運動で指導的な役割を果たしたのは、サー・ゲイレスとアフガニスタン出身の――」
「相原さん、岡野さん、討論は自由討論の授業でしてくださいね。長谷川くん、罰点1。これで現代史は罰点10、宿題としてチャーチルの『第二次世界大戦』を原文手で書き写し、自分なりに訳しなさい。できるまで現代史三の単位は認められません」
ぷいっと、葉波と転校生の視線が頭上で切り結ぶのを感じる。
「復習に原くん、グリーン・バイ・フード・トウ・ホープ運動、ＧＦＨＭとは？」
「あ、ええと――はい、先進国の再生不能産業税を財源に、植林と引きかえに最低限の食料と水、そして初等教育と医療を保障する運動です」
「よろしい。でもとっさにケーコで調べるのもいいですが、ちゃんと本で読んでおきなさい。みなさんもいいですね、その情報は本の目次程度でしかないですし、全文プラス動画

があってもウェブでは本の十分の一も頭に入りませんよ」
もちろんディスプレイで本のようにテキストを表示することもできるのだが、やはり紙のほうが便利だ。だが今世紀初めまで横行した原生林伐採のような狂気の沙汰はもうない――再生可能林業かケナフ、遺伝子改良麻・竹を原料にしている。
「さて、経済危機を解決するために各国と円卓は、まったく新しい分野で、しかも環境を破壊しない大きな公共事業の必要に迫られました。全地球規模の植林、食料増産の中心を耕地開発から海洋開発に移すこと、絶対的貧困の解消、石油から太陽・水素への第四次エネルギー革命、そして遅れていますが本格的宇宙開発です」
その言葉に、オレは一気に目がさめた。
軌道エレベーター計画がやっと再来年から始まるらしい。
エネルギーも、軌道エレベーターと宇宙太陽発電が動き出せば事実上無限になる。うちのような食糧生産メガフロートも、海水淡水化のための太陽光発電に多くの面積をとられることなく、全面積を耕地に使えるかもしれない。
そうだ、水素は単なるエネルギーを運ぶ電池でしかない。本当に新文明と言えるのはエネルギーが事実上無限になったらだ。いや、核融合も、でもまだ無理だってことは……ええと、エネルギーは今世界ではどうなってるんだっけ。来週の自由選択はそれにするか。
「そこで社会主義と新自由主義、福祉国家と開発独裁すべてのシステムが破綻した――」

「さて、これを見てごらん」
「これ、発泡コンクリート？」
「そう。今ここも支えている、メガフロートを本格的に始動させた革命的建築素材ですよ。
　みんなちょっとづつ手に取ってみなさい」
「なんか、やわらかい泥みたい」
「べたべたして、変」
「あったかい」
「うり」
　と、峰がオレの頬にそれをかぶせてきた。
「やったな！」
　と、仕返し。
「こぉら、基礎準備校生じゃないんだから。よく洗ってきなさい」
　実技室の水道で顔を洗って戻ると、先生がシャーレと顕微鏡を用意した。
「これは、発泡コンクリートの泡を出す、遺伝子改良真菌よ。
　嫌気性、酸素がないところで増え、生の特殊なコンクリートに含まれた特別な栄養を分解してガスを出すの。ちょうどパンと同じように、混ぜられた炭素繊維や結晶をうまくな

らべて、木材によく似た、無数の部屋のような――ほら、こっちの顕微鏡ものぞいてごらんなさい、こっちが薄く切った木材で、こっちが発泡コンクリートよ――」
「どうなってるんだろ」
「似てるけど、こっちは三角形だね」
「へんなの」
「うわ、ぶつぶついってる」
「ちょっと、割り込まないでよ！」
「由、いつまでも泡コンをいじってないで並ぼうよ」
　でもこれ、なんか気持ちいいんだ。ちょうど水田の泥みたいで。
「普通のコンクリートは骨材として砂利や砂を使うの。要するに、コンクリートは接着剤のようなもので、本当に建物を支えるのは骨材なんだけど」
「でも、発泡コンクリートの表面に、小さなぶつぶつが無数にあるんですけど、砂利や砂じゃないんですか？」
「砂利や砂を入れたら、いくらガスで泡構造ができても沈んじゃうわよ。
　それは別のところで作った密度の低い結晶を骨材として入れているのです。
　本質的には普通にある石と同じ酸素、ケイ素、アルミニウムなどの結晶だけど、軽く化学的に安定していてとても丈夫。それがセメントの結晶と絡んだ炭素繊維とうまくなじみ、

泡を正四面体を集めた構造にして、全体を木材みたいに軽くて丈夫な構造にしているの。砂は炭素繊維やコンクリートの泡になじまなくて、うまくいかなかったのよ」

ん？

「じゃあ、その結晶を自由に加工できれば、鉄のように強くて軽く、さびない素材になるんじゃないですか？」

「それはさすがに無理ね、単結晶の大きさは三ミリが限度で、しかも形も限られてるから。でもできたらすごいわ、将来やってみなさいな。

あとこの実験もしてみましょう。これを配って」

と、全員に何本か鉛筆ぐらいの木の棒と瞬間接着剤が配られた。

「正方形と正三角形を作って潰してごらんなさい」

ナイフを出して角になる部分をちょっと削り、接着する。少し待って乾いたのを確認し、潰してみた。

「四角形は潰れやすいけど三角形はなかなか潰れないでしょ。四角形は、角（かど）の角度を変えれば潰れるけど、三角形は角自体が壊れるまで潰れないから。

同じように正四面体は潰れにくいから、発泡コンクリートは比重〇・六八で鉄筋コンクリートに匹敵する強度があるのよ」

あれ、なんか変だ……なんだろう。

昼休み、学校の本屋で『第二次世界大戦』を手にして、オレは真っ白に崩れ落ちた。ただでさえ英語は苦手なのに――七カ月しかない――昔あったというゆとり教育とやらが羨ましい――

何なんだこの分厚い本は、これ全部英語かよ――それを書き写して訳すのか――日本語訳もこの分厚さ、こっちを丸写ししろといわれてもきついんじゃないか？　テキストを手で書き写したり暗誦したりは基礎準備校からやってるが、これは桁が違うだろ。

「うわ、海も結構きついのね。でも本土じゃもっとすごいこともあるわよ」

と、なぜか転校生が話しかけてきた。葉波と意気投合しているようだが。

「るせ――」

「でも、これでもう英語も得意になるね。いやでも。それとも現代史捨てる？」

「じゃかあしい」

葉波って、オレより九カ月先に生まれてストレートで基礎準を出たからって、やたら年上ぶるんだよな。

月曜の午後は食糧生産メガフロートの立ち上げを学び手伝うため、八丈島沖まで行く。これで生存公役と授業単位の両方になるから便利だ。ついでに運動の義務も果たせる。

オレの世代には当然だが義務が多い。生存公役、全世界と国の義務教育だけでなく、毎日最低十分の瞑想、最低週五日三十分の運動、要約を書かされる映画や読書などいろいろ。

バス飛行艇で早速『第二次世界大戦』を機械的に手写ししはじめるが、もちろん同時にこっそりケーコで音楽を入れる。

で、結局ゲームを始めてしまって、ほとんど手写しは進まなかった――『それが君の本当にやりたいことか』と、ケーコの文字。うるさいな、常駐ソクラテスは――それに大人にもまた言われるか、週三日の生存公役だけで配給、福祉に頼る側になるのか、嫌なら学べ、人生に背を向けるな、と。

八丈島が見えるところまでくると、微妙に海の色が違う。

ぼうぼうに草が生えた、緑のマットのようなメガフロートが大きな帆をつけていくつか漂っている。

その横には白く輝く太陽電池メガフロートもいくつか並んでいる。

風力でゆっくり自走しながら、一年近くかけて北回帰線にたどりつくのだ。真水さえあれば、回帰線前後の日射しでとても農業効率がいい。

着水――このときのショックと、いきなり襲ってくる強烈な船酔いはいやだが、飛行艇のほうが気楽は気楽だ。

小船でメガフロートに降り、着替えや道具を積んだ箱を引き上げて、早速作業服に着替

える。

といってもやることは実に単調だ。伸びた草を刈って土に混ぜるだけ。

まあ、トラクターを扱ったりするのは楽しい。

主にマメ科の雑草が、先週より緯度が低くなり、夏が近づいて強まった日差しの中、身長より高く茂っている。

先週刈ったばかりのところも、もう膝まで伸びている。

トラクターでは歯が立たないところは、手で刈るほかない。かなりの重労働だ。

波風も強いからだいぶ塩しぶきが入っている。草の汁をなめたら辛い。

「だいぶ塩分が増えているから、全体を刈ったら水を増やして塩抜きをするぞ！　刈り終わったら集まれ」

先生の声が遠くで聞こえる。とにかく広い。

「うりゃあああああっ！」

と、晴樹が大きな鎌を二刀流で振り回している――相変わらず元気な奴だ。

「今日は長谷川の番だな」

と、トラクターの補助席に乗った先生が招いた。このときを待っていた！

授業の初めに簡単な講習は受けたけど、本気で動かすのは今回が初めて。

ぐるぐる回る、バネかある種のパスタのような鋼の歯を確認する。のどが鳴る――人間

が簡単にミンチになるし、うっかり点滴灌漑パイプを傷つけたらえらいことになる。
　スタートボタンを押すと、ディーゼルエンジンが精製植物油を食って力強く回り始める。ディスプレイに、エンジンからバッテリーに電力が流れ込んでいるのが表示される。
「離れて！」
「前方、右、左、後ろ、安全確認！　はじめます」
「ストップ、ちゃんと指差し確認しろ」
「はい、」
　力強く、だいぶ刈り倒された草が切り刻まれ、土とかき混ぜられていく。むらがないよう何度も往復して――
　ものすごい力に、酔う――
「終わったぞ」
「は、はい」
「お疲れ」
　信じられないほど、草を刈っているとき以上に疲れてる。
「こら、暑いのはわかるがケーコを外すな。事故があったとき頼れるのは七つ道具だけなんだからな、去年のあれを思い出せ」
　かっと、オレと葉波の顔が熱くなり、みんなが注目する。

　ケーコだけじゃなく、海上生活者の海難七つ道具の常時着用は日本、アメリカ、ＥＵ、ベトナムでは義務だし、最低限の端末は世界全員に配られてる……はず。
　七つ道具も説明するのか、防水耐塩のケーコか非常用発信機、手鏡、浮きベルト、サメよけ剤、簡易釣具、蒸留器、氷砂糖、防水ライト、ロープ、チタン合金製ＭＰＴ（マルチ・パーパス・ツール。ナイフやドライバーなど工具がついたペンチ。折りたためるものが多い）など、海に落ちたり流されたりしたときの命綱だ。太い、ズボンとは別のごついベルトに、いくつかポウチがついた形が普通だ。
「さて、前も言ったとおり、特に西アフリカ沖や西太平洋、中国では、砂漠の不毛な土がまずメガフロートに入れられる。だが、マメ科の植物は窒素を固定できるから、窒素以外の燐酸カリ、微量の鉄硫黄を中心にした肥料をやっては草を茂らせ、それを土に混ぜていけば土の中の小さな生き物がそれを分解し、いい土に変えてくれる。
　だが、注意すべきなのは――山中」
「はい、土のpH（ペーハー）と、塩です」
「そう、特に化学肥料を大量に与えていると、どうしても土が酸性になる。だからといって石灰で中和すると、土が固くなって土壌生物に害がある。だから農業をはじめる前に一年はかけて草を育てては混ぜて腐らせ、有機質の多い土にしなければならない。
　刈った草を処理して土を肥やしてくれる土壌生物は、長谷川」
「はい、ミミズと――」

「特に重要なのはほら、ここにもこんなにいるミミズだが、他にも多くいる。みんな、特にその温度、水分、pH、塩分濃度の限界を含めて調べてくるように。まとめてテストに出るぞ。

さてキャラウェイ、pHというのは何のことだ？」

「え、ええと……ぼく、ケミカルはまだ、アシッド、酸とかアルカリ――」

「ウェブで調べるように、皆もだ」

みなケーコで、少し遅い衛星回線でだけど学生にはフリーで開放されている大英百科事典日本語版（アメリカ出身のジャン＝キャラウェイは英語で）調べ出し、メモした。

「さて、そして塩は真水で抜く。といっても再来年ぐらいにやるか、土と塩はイオン関係でいろいろある、興味があれば今送ったのから予習すること。このようなメガフロートは、無限に地下がある大地の農場と違って、本質的には海に浮いたたらいでしかない――ここの底にも大きな排水スペースがあり、そこに排水を流し込む。

だから今日は、これから真水を、土表面から多めに与える。普段の給水は地中のパイプからだがな。明後日には大雨が降るから、そんなにやる必要はないんだが。まあ、ホースとスプリンクラーを用意！　同時にやることは何かないか？」

「ええと、排水をくみ出す準備は必要ないでしょうか？」

「よし清水、正解だ。塩と肥料が混じった排水はどうする？」

「排水タンカーに汲み出して、栄養がない海に少しずつ流します」

「そう、実はもう呼んである。一時間後には着くはずだ、それまでに水をちゃんとまくぞ、班ごとに競争だ！　ほら、ちゃんと自分でもう一歩進んで！　ここで集めた排水は、どこの海にまくのが一番いい？」

終わってからしばらく海で泳いで、余計疲れて帰ってくると、

「ただいま――」

なぜか例の転校生と葉波がいた。

「……」

「おかえり」

「え？」

なんでここにいるんだよ、寮だろ、というのを葉波が制し、オフクロと二人で説明をはじめた。

要するに、寮がいっぱいで、こいつの親とオフクロが親しかったから、それで当分うちに住むことになった、ということらしい。

「男の子もいていやだと思うけど、変なことしないようわたしと葉波ちゃんで十分監視しますから、ごめんなさいね」

「いえ、どうも――」
「勘弁してくれ、オレは今朝こいつに殺されかけたんだぞ！」
きっと転校生が目をむき、何か言おうとしたが、
「じゃあ去年のあれ、これで貸し借りなしにしたげる」
と葉波が言ってきた。かっと頬が赤くなる――あの漂流はどっちも悪いけど、オレがミスしたせいで彼女も死ぬところだったんだ――
ふと思う。あれ以前と今の一番の違いは、みなが安全のために子供に何もさせないのではなく、なんでもやって学ぶのが中心になったことだ、と。まあ七つ道具のおかげで、死者はそれほど出ていないが。
「じゃあ仲直り！」
と、強引に葉波がオレと彼女の手をとり、握手させた。
向こうも嫌そうだが、こっちも嫌だ――手はあったかくて柔らかだけど、葉波みたいにロープと海水で固まっていないってことだから――

食事中、オフクロは努めて親しくしようとしていたのは、得意の合鴨のローストと潮汁、貝とパイナップルのココナッツミルクカレースパゲッティ＋牛ラクダ合挽ハンバーグ、自家製ぬか漬けというメニューでわかる。

彼女も、オフクロや美香には親しく話そうとしている。
「これ、なんですか？」
「敬語なんていいのよ、家族なんだから。これはバナナとヤシの成長点のぬか漬けで、ここではよく食べてる野菜なの」
「メガフロート農場でね、あちこちの食べ物と日本の知恵がうまく、ええと、おいしい食べ物がたくさんあるんだよ。
それにね、昔日本軍が南洋で戦ったときも、色々な知恵があってね、それが」
美香が彼女に夢中で話しかけている。
「本土ではお肉も高いんですって？　魚だけじゃなく、海藻を牛に食べさせたりマングローブの葉をラクダに食べさせたりしてるからお肉も安いのよ。たくさんおあがりなさい」
「特に内臓はね」
「こら由」
どうせおかものだ、誰が百億に肉やメタンを、海水から作ってるのかも忘れてるに決まってる。自分で家畜の腹にナイフを入れたこともないだろう。
「ごちそうさま」
「こら由、まだ――」
もういい――と、繭に飛びこんだ。音楽をつけた。海底光ファイバーとグローバル・サ

テライト・ブロードマルチネットで、映像も音楽も情報も……昔の言い方をすればテレビ、ラジオ、有線、インターネットすべて本土の都市と変わらない環境はある。

ボリュームを思い切り上げる。繭は防音、断熱も完全だから、ボリュームを上げても誰の迷惑にもならない。それも発泡コンクリートとかのおかげか。

「由」

突然3Dディスプレイが点滅すると、峰の面がキスしそうな至近距離に浮かんだ。

「バカヤロウ、心臓に悪いぞ」

「で、あの転校生がお前んちに同居だって？」

この横五〇〇メートル、縦二キロの狭い居住メガフロートじゃ、なんでも即知れ渡るのは当然のことだ。

「喜んでかわってやるよ」

「すっごい可愛かったよなあの子！　うらやましいぞこ」

問答無用で切って、繭を出て風呂場に向かうと、何か声がする。

「塩水が、なんで」

「ここでは……真水は、限られた雨水をためたり、海水から太陽光発電の電力で作ったりする貴重品なの。水道は、ほら青で三角の雨水にミネラルや酸素を加えたおいしい飲料水、赤で十字の海水から作った中水と赤丸のそのお湯、黄色い四角が海水、長四角の海水の熱

湯の五つに分かれてるの。しばらく何が出るか確かめて。

海水は熱湯も含めて使い放題だから、お風呂はそれで入って、最後に中水のお湯で体を流すだけなのよ。ごめんなさいね、でも海での暮らしに慣れてもらわないと」

「そんな」

むっ、

「いやならさっさと陸に帰れよ！」

「由！」

「……帰れるものなら帰るわよ！」

と、何かをきょろきょろ探している。

「あ、ごめんなさい、もう遅いわね。今、空繭はあるんだけど、中身がないの。由、貸してあげなさい」

「ちょ、ちょっと待って」

「ケーコがあるでしょ？」

家を買うとき、子供を見越して繭を余計に作ることもある。

それは子供が育つまではいい収納になる。そこにコンピュータ――テレビや電話の機能も――を入れても、使われるようになるまでのバージョンアップを考えると無駄になるので、エアコンとシートコントロール、照明だけしかない。

確かにケーコをホムコンにつなげば大抵のことはできるが、やはり繭のほうがいい。
「ちょっと待っててくれよ、いきなり言われても」
「あ、エッチなのがあるんだ！」
妹の言葉に、背筋に冷たいものが流れる。
「由」
だいじょうぶ、やばいのはパスワードをかけてある――
「でもいやです……匂いとか……」
と、ものすごく小さい声で――
「ったく！　ちょっと待ってろ」
と、繭に戻ってパスワードを確認し、リビングでケーコとホムコンをつないで３Ｄ放送を見始めた。
それで、全く意識していなかったのだが――
「最低」
ん？
「由、レディの前でしょ」
「お兄ちゃん、レディの前で失礼でしょ」
「由、レディの前でなにしてんのよ」

おい、ちょっと待て。いつの間に葉波も、じゃなくて、
「あのなあ、家族なんだろ？　だったら家の中でも屁ぐらい普通にさせてくれよ。学校だったらトイレまで我慢してるんだから」
「でも、今はよ、女の子がいるんだから」
「そんなに邪魔なんだったら、わたし」
転校生が、突然泣き出した。
「由！」
と、いきなり葉波がオレの頬を張る。
――オレがわるいのかよ――
「じゃあオレは、今夜は船で寝るから」
「こら、七つ道具はもっていきなさい！」
美香がロッカーに飛んでいく。
「あ、私もついていきます」
「大丈夫？　こんなスケベと夜の船なんて」
美香の言葉に葉波は笑い、
「大丈夫ですよ、あたしは。この子が落ち着いたらすぐ帰りますから」
とオフクロに笑いかけた。

「気をつけてね」
微笑みうなずく葉波の横顔が、なんだかいつもと違った。でも、誰がこの子だよ――
振り返ると、岡野はまだ泣いている。

「明日、ちゃんと謝りなさいよ」
船の簡易ベッドを整え、明日の朝食にと持ってきた非常食を枕元におき、ケーコを船上無線ＬＡＮにして充電器につなぐと、軽く葉波がオレの頭に手を乗せた。
「子供扱いするなよ」
「すねてるのは子供よ、ちゃんと謝れる？」
「何でオレが！　何から何までオレが被害者だぞ！」
ふう、と葉波は深くため息をつき、じっとオレの目を見ると――時間が止まったように、呼吸が詰まる――
いきなり、目の前が覆われる。いっぱいになった葉波の顔――そして、歯に硬いものがあたる感覚。
次の瞬間、唇を包む熱さ。
え、と思うと、唇を離した葉波が、さっと埠頭に飛び乗る後ろ姿――月明かりにポニーテールが跳ねた。

2

気がつくと繭だけが、見渡す限りの海に浮かんでいる。
なぜか下が見通せる。水深三〇〇〇メートルの、深い深い深い海。
そして、音もなく沈んでいく。闇に、そしてもっと深く。
暮らしていた街ごと沈んでいき、いつしか光のない海底の街になる。
そこでは、オフクロも自分も葉波も――みんな不気味な海の怪物になっている――

はっ、と目が覚めた。小さい頃からよく見る夢だ。まだ夜は明けていない――
昨日――そう、転校生――家を飛び出して船で――葉波と、キス？
そんなはずはない。葉波には好きな人が……
でも、あれは夢ではなかった。
「こら、そろそろ船の支度しなさい！」
いきなりケーコが鳴ると、耳に葉波の声が飛び込んでくる。

いつもどおりだ。
そうだな、今日はオレが船長なんだから、ちゃんと船の点検をしておかないと。
今日の掃除当番は花音と真とリックと——名簿をケーコで開いて確認し、ながら乾パンとカンヅメを腹に詰め込んだ。くそ、家に帰っていればご馳走の残りがあったかもしれないのに。
でもあいつとは顔を合わせたくない。
あいつ——あの、おかもの転校生とは。
ふと気がつくと——ハンモックに寝ていて慣れていたが——横揺れ（ローリング）が非常に大きく、雨の音がとても強い。
甲板に出てみると、顔がゆがむような強烈な風と、痛い雨が吹きつけて目をあけていられない。空がやばい色だ。
キャビンに戻って気圧計を見ると九六四、ケーコで天気図を調べると、かなり強い熱帯低気圧が発生して——うっ、ちょうど学校への航路。
「どうするの？」と、葉波の声が聞こえた。「さっきはごめん」
そうだ、葉波にも昨日の借りがあった——こき使われ、怒鳴られた恨みが葉波以外にも——人数も多いし上級生優先だから、次オレに学校船の船長が回ってくるのは十月、台風シーズンがすぎて夏休みが終わってからだ。今日がチャンスなんだ。

「長谷川、よく考えて決断しなさい」船を見てくれている大人の、萩原さんが来てくれた。大声なのに音にかき消される。「緊急事態にならない限り、決めるのは君だ」
『久々に荒天訓練か、楽しくなりそうだな。今日オレが船長だったらな』
『正気だったら行かないぞ』
『おねがい』
『やり、休みだ。行くな』
『〝嵐の長谷川〟なら、あの時だって、行こう』
『行くなら頑張るけど、まあ由なら大丈夫、よね』
手袋型コントローラーを動かすとボイスメールやテキストメールが、気象情報と並んでケーコのディスプレイに浮かぶ。ちょっとした手術と練習で、普通使わない神経を利用して直接入力できる上級モデルも最近出たらしい。
うーっ——天気図に航路図を重ねると、大きく迂回すれば——でも低気圧がもしついてきたら、そして低気圧から来る強風と波、第一迂回したりしたら午前中には着かない、マストを下ろして動力全開で突っ切るの——も危険だ。
低気圧が通り過ぎるのを待つか？　だがそれでも着くのは夕方、それにもし低気圧が留まったら帰れなくなる。
第一危険だ。低気圧からはかなり離れていても強風と強烈なスコール、そして大波があ

る。それより、オレの肌が無理だと言っている。
「あのね、わたしは学校で色々な手続きがあるの。だから行かなきゃいけないんだけど」
岡野が、あの怒った目でオレを見ている。赤い、眠れなかったようだ――当然か。
『おねがい――今日、大切な約束があるの』
とメールが飛び込んできた。李の必死の目、そういえば彼女、今日寮の楊さんに告白すると決めてたっけ。
「ちょっと待ってくれ」
と、今埠頭にいる他の船や飛行艇と連絡を取ってみる。
『やめとけ、今日外洋に出るのは無理だ』
『今日はうちも飛べないな』
『いかだを見にいかにゃならんのに……ジャマだから出んな』
『バカか、行くな』
『助ける身にもなってみろ』
『わしが君ならいかんね』
『臆病者！　嵐が怖いの？　あ、酔うのがいやなんだ』
え？　岡野――っ!!
「てめえ……だれが臆病だって？　いって――」

と言いながら甲板に出ると、もう日は出ているのに暗い空――遠くにいくつか青い筋は見えるけど――
ありがたいマストはたたんである、でも、船は埠頭に固定されていても激しく揺れている。埠頭ののぼりが、ちぎれそうにうめいている。
あの時も意地を張ったせいで、葉波も危険にさらしてしまった――海に出る時は、感情のままはいけない――
「――今日は出港できない、自宅でネット学習。整備するから花音、真、リックは残ってください……解散……」
くそ、くそくそくそくそっ！　だれが卑怯者、臆病者だって？　こんな嵐ぐらい切り抜ける腕はある！
オレは臆病者なのか？　吐くのも、船が沈むのも――死ぬのも怖いのか？
ぽん、と肩を叩かれた。
『真の勇気よ』
葉波のメールが浮かぶ。
『ごめん』
そう、李に送った――
彼女は顔を覆い、泣き出している。

「卑怯者、どうするのよ」
言い捨てた岡野を、皆が――李も――軽蔑した目で見ている。
『安全最優先よね、ごめんなさい……命さえあれば。あんなのは気にしないで』と、李。
『気にするな、本当に出港していたら、どんな目にあっていたかわからないんだおかものは』
『出てたら裏表ひっくり返るまで吐いてたろうよ』
『海を知らないおかものの言葉なんて気にしなくていいよ』
みんなのメールに少し救われたが、やはり悔しい。
「ケッ」
と春日が嘲笑したが、いつものことだしこいつはわかってないから無視。
オレは酔いながらでも仕事はできる――吐きながらでもちゃんと出力を調整して、大波を舳で切り裂いて進むのを見せてやりたかった。いや、おかものはそんなの、見ることもできずに酔ってるだけだ。
上級生もいるし、その気になればこの嵐で帆走だってできるんだ――素材強度だって木と麻でできた昔の帆船とは違うし、コンピュータの力を借りれば――昔の帆船だって、これ以上の嵐でも――うう――
船を片付け、あらためて繋留をしっかり確認すると、葉波が待っていた。

同時にメールが入る。
「メール見た？　学校とお母さんから、今日は岡野さんを案内して、ここでの生活を教えてあげなさい、って。生存公役三時間分」
「冗談だろ？」
しばらく無言。
「あたしも行くよ、それに――」
ぐっと、なにか悔しそうな表情をしている。メールが浮かぶ、
『今日、もしあたしが船長でも』、「ごめん」
『葉波だったら、機械切って帆だけでもよかったよ』
船のキーを埠頭事務局に返すと、家に戻った。

オフクロはもう仕事に出ている。物流の仕事は、こうして海空路がふさがると非常に大変なことになる。それに、そういえば今日の午後は育児の生存公役があったんだ。
みんなは繭で授業を受けてるはずだ。本来オンライン通信教育で十分だと思うが、やはり学校というシステムは必要らしい。
リビングで岡野が待っていた。オレの顔を見ると表情が、まるで日本人形のように硬くなる。

「そういうことだから、ほら」
と、葉波が明るい声で誘った。
顔も見たくない――
「先に、運動しなきゃいけないからジムに行こうか。あ、由は今日休みだっけ？」
「いや、着がえるから待ってて」
戻ってくると美香もいて、岡野の表情も柔らかくなっていた。何を話していたんだろう。
「両手に花ね、お兄ちゃん」
「まったくね」
葉波も合わせて腕を組んでくるし、
「まったくだ」
と、峰のやつがいきなりケーコの映話で顔を出してきた。
「るさい」
もう、なんとかしてくれ。

前をひらいたパーカーの上に七つ道具をつけ、飛行帽型ケーコをかぶって出る。
風は人工的なそよ風だけ――居住メガフロート全体を覆う半透明太陽電池はやわじゃない。でも濃い雲で、余計に薄暗いのはわかるし雨音は激しい。見上げると、もう風力発電

塔は強風仕様になっている。太陽電池が使えない分も、ってわけか。昔の風力発電は風が強くなると使えなかったそうだが、今は違う。
あ、葉波のおばさんも、全メガフロートで雨水を受けるためにあちこち準備で大変だっただろうな、もしかしたら葉波――手伝いから逃げたのか。
一応書いておくか、〝うち〟は今ゴビ砂漠の植林をしてるオヤジ、高速船物流の仕事をしているオフクロ、妹の美香、オレ――長谷川由。
隣の相原葉波は年の離れた姉の百合子、妹に美香の同級生でとても男らしい麻美がいる。おじさんは腕利きの飛行艇操縦士、おばさんと百合姉は船と農企業で働いている。親同士仲がよく、葉波はよくうちに入り浸っている。
家といっても、はっきり敷地が分かれて庭があるとかではなく、むしろ集合住宅に近い。ただし高層ではなくそれを倒した感じだ。配置はメガフロートの設計思想によってまちまちだ。一度見たことがあるが、沖縄近くの第二メガフロートは太陽電池屋根の下を全部ひとつながりの広い空間にし、地面を空けてすぐ天井のないエレベーターになって、それで水面下の居住スペースに降りるという代物だ。
うち――新緑ヶ丘は江戸時代の長屋と八〇年代日本の大規模集合住宅と手塚治虫をかけたようなちょっとやばいデザインだが、中身は案外暮らしやすい。
各戸には繭がいくつかあり、更衣室兼用の大きなウオークインクロゼット、蓋を下ろし

たらその上が洗い場になる省スペース型バスルーム、洗面所、トイレ、キッチンとリビングダイニング――といってもテレビなどは繭かケーコで見ることが多いので大きなテレビなどはなく、壁全体が本棚になっている――、倉庫、それになぜか和室がある。

数戸に一つ大きめのガレージと簡易トレーニングルームがある。大人が義務をこなすため朝か夜に近所で集まり、体操などをする。

「本土じゃみんな、公園か学校でやってるけどね」

「じゃあここが公園みたいなもんなんだろうな」

「それに、プランターとかも置いてないし庭もなくて、寂しくない？」

わかってないな、

「熱帯で下手に屋内に緑を置いたら、虫やトカゲでえらいことになる。庭なら農業用メガフロートに確保されてるし、私的営利農業希望者はヘクタール単位で持ってる」

「日本人には、虫と共存する熱帯生活は耐えられないのよ――ほらここがトレーニングスペース。ついでに運動して、義務消化しようか？」

葉波が指差した。囲まれ、引き戸で隔離されたちょっと広い空間にいくつかトレーニングマシン、総合ウエイトトレーニングベンチ、各種鉄棒、サンドバッグ、鉄砲用柱、棒や木刀で打ちこむ十字柱などが並ぶちょっと殺風景なスペースだ。

広いジムもあるにはあるけど、オンライン通貨を取られるか予約で待つことになる。

「勘弁してくれ、一周してから」

「あとにしよ」

「自転車とか車はないの？」

「車を持っている人はほとんどいないな。こっちじゃ使えないし。船か飛行艇を」

「あなたに聞いてないわよ」

つっけんどんな口調、可愛くない。顔と違って。

「ほら、これ」

玄関近くの小ガレージを開けると、いくつかの自転車や原付三輪自転車が立体的に収納されている。

「うわ、最新の都市用ハイブリッド三輪じゃない。本土の都市でも流行（はや）ってるんだ――結構積めるし狭い道で楽だし、税金優遇がすごいしね」

見た目は、透明な卵形の殻におおわれた自転車。後ろが膨らんだ三輪、シャフトに燃料電池とモーターが入っている。空荷なら脚でこげるし、荷物が重ければ動力を使う。それに動力つき荷車を増設すれば、三トンまで牽引できる。

「ここではみんなの足なんだけど、今日は歩いていこうよ。どうせ外の道も、この台風じゃ走れないし」

「よう！　どうしたんだ」
と、峰の兄貴が話し掛けてきた。
「生存公役？」
「そう、一番楽だよな」
「その代わり来週でしょ、下水は」
「ああ――わかってるよ！」
配給・生存公役制度――これこそ超恐慌・円卓騎士団事件後世界中がやっている、メガフロートや太陽水素以上の革命だ。
国家地方問わず財政は破綻した。日米中欧がいくら支えあっても、破綻したものは破綻していた。公務員の人件費も支えようがなく、借金がふくれあがっていた。
少子高齢化で、高齢者の介護にはロボット技術がいくら進んでも大量の労働力が必要だ。その給料の財源もない。市場まかせでも財政破綻した国も。
同時にグローバル化で平均賃金は下がり、そのくせ海外の労働力は介護など必要なところでは役に立たない。希望をなくした若者の多くが労働市場から退出し、特に欧州や中国では失業がどうしようもなくなっていた。
世界全体では金融が混乱し各種資源需要も暴走、生態系も崩壊して極度の貧困も増え、最悪の場合は世界の大半が経済崩壊で秩序を失い、飢餓戦乱疫病で未曽有の破局――十億

単位の大量死が起き、近代文明自体が崩壊する。
さあどうする？
大きい政府、増税は無理でも、全員の労働力を半強制的に引き出して、そのかわり最低の生存は世界中で保障する。借金は世界全体が〝大きすぎて潰せない〟状態になる――経済学の博士号をもつもうじいさんで、生涯学習のために現代史で同級の神谷さんに言わせれば、狂った悪魔の発想だ。神谷さんの、マルな師は邪道だと大著を遺して怒り死んだそうだ。
十歳から死ぬまで、誰もが最低週十時間か年に三ヵ月か四年につき一年、他の仕事に使っている時間が少なければそれ以上――全く仕事がなければ週三十時間か年に七ヵ月か五年につき三年の労働時間を提供せよ。正規の公務員を減らした代わりに全員がパートタイムの公務員だ、ともいう。
同時に世界全体で、水や食料など最低の生存、他の現実経済、そして情報世界の三つの経済を切り離した。
最低の生存――〝皆で皆を食わせ、介護し、育て教え、文明と自由を保つ〟は全人類に無条件配給。
他の現実経済――旧来の資本主義部分――は厳しく持続可能なよう国際管理され、生存保障の分が取られる以外は原則自由。

情報や特に著作権は、これまでのようにソフトを記録した媒体を車やパン同様物として売買するのではなく、コピーや再生をカウントしてその評価に比例する報酬を、主により高い情報アクセス権や名誉の形で与えるようになった。

生存公役を怠ると人気雑誌の最新号や新曲の――もちろんオンライン――入手が〝発売日〟ではなく遅れてしまう。義務を拒絶する者は、事実上あらゆる情報から切り離され、名誉も奪われるのだ――もちろん電話、メール、ネットを使えない以上、働いて金だけ稼ぐこともまず不可能になる。生きているだけに耐えられる者は、予想されたほど多くはなかったそうだ。

また、社会主義の弊害がないよう時間だけではなく、奉仕の質も評価される。時間を満たせば情報アクセス権を奪われることはないが、意欲的に頑張っていい結果を出したり、積極的に求められる以上の奉仕をしたり、新しいコンテンツを作って人気を集めたりしたら加点され、より多くのコンテンツをより早くダウンロードできる。加点は電子貨幣にもなりオンラインゲームなどでの通貨としても使え、制限があるが現実の金にも交換できる。

逆に金を出して生存公役を免除してもらうのは制限がある。

忙しい人の反対も多かった。だが週十時間の色々な仕事はそれなりのリフレッシュになることがはっきりしたし、ワークシェアリングとしての効果もあった。また地域を生かす効果も大きい――もちろん、いまだに反対者は多い。さらにその義務には、日米ではつい

でに毎日の運動や読書、義務教育を通り越した生涯学習までついているのだから。

ああ、日本では在日統一朝鮮人（といっても統一は建前だけで、むしろ米韓中露占領軍によるにらみ合いで統治されている）が強く反対したそうだが、元々生存公役は国単位ではなく、地域と国際社会が主になっている。朝鮮半島北部の植林事業をしているようだ。

この生存公役は学生であっても、全身麻痺でも老人でも例外はない――誰にでも何かできることはある、というのがたてまえだ。峰の兄貴も今、それを果たすために数時間パトロールをしている。ちなみに来週は下水処理か、大変だな。

まあ、昨日の草刈りのように授業単位として認められる生存公役も多い。

本当にいろいろなことを、時にはいきなりやらされることになる。おかげでいろいろな大人とも仕事できるから楽しいことも多い。それは地域を機能させて人民の支配を容易にしている、とも神谷さんが言ってた。宗教が強いところでは宗教が労働力を振り分けている、総力戦と同じく仕事と仕事仲間を与えることでアノミーを防いでいる、とも。

オレも明後日は、予定では何人かの乳幼児を見なければならない――ああ、二十一世紀初頭は虐待ヒステリーがあったっけ。もちろんモニターで監視される部屋だ。まあ、ほぼ隅々までいつも監視されている上、テレビ電話機能があり、しかも近くの人間のＩＤまで把握できて緊急ボタン一つで全部警察に送信できるケーコをみんなが持っている以上、現実世界で犯罪を犯して逃げ切るのは無理だが。第一基礎準備校から全員護身術をやってる

から、相手が子供でも危険だ。

いくつかの、長屋を思わせる戸に囲まれた道からより大きな道に入ると、すぐにコンビニとそのそばの路面電車が見えた。金さんの焼肉など店も開いている。何しろ都市全体に屋根があるのだ。

この往復二車線で台車ごと乗れる路面電車が、ここでの生活の中心だ。

「結構広い、というか長いのね」

広い道がメガフロートを縦に貫き、ハイブリッド三輪が忙しく動き回っている。

「全体は――ちょっと図を出して、URLは」

ケーコから図を表示し、北端の埠頭から解説する。

「ここが出入り口の港なの。そのすぐわきに市場があって、こっち側は中小の工場が集まっているわ」

「食肉処理とか魚の内臓処理とかは離れたとこでやるんだけど、より細かな加工は小さいところが競争してやったほうがいいんだ」

路面電車でまず市場に向かう。もちろん無料だ。

「どうやって乗るの？　路面電車なんて、修学旅行以来始めて」

「はぁ？　どうなってんだよ本土は……こんな便利なもの」

「うるさい、ハナにきいてんの！」

マーケットは本土の、モールとはいかないがスーパーぐらいはある。水面下が雑貨や道具、一階が食料、二階が衣類、本、おもちゃ、家電消耗品だ。ただし、農林水産社員が多いので、食料の多くは自給するか近所の交換でいい。他の買い物もネット通販が多いから、それほど混んではいない。

むしろ一階にある吉野家、MKD（十三年前に史上最高額で合併したマクドナルド・ケンタッキーフライドチキン・ドミノピザ）、F（ファスト・ノット・ジャンクフード）n（ファストフード同様早く安いがヨーグルト、野菜ジュース、粥、煮豆、握り飯、芋などが中心。近年支配力を強めているチェーン）、J（ディズニー・ワールド・ファスト・ノット・ジャンクフード）、デズ、そしてサーティーワンなどのファーストフード店に人気がある。もちろんどれも配達してくれるが、やはりその雰囲気を好む子が多いのだ。

軽く店内を案内し、ディズでジャスミン茶とミニークレープ――オレは女の子同士の話に入れず、ケーコで新曲を聞いていた。

港では、今は嵐で中止されているが普段はクレーンが活発に動き、色々なものを出し入れしている。海を見るとやはりすごく荒れている。

マーケットの一階は後ろに体育館ぐらいの広さで開き、港直通の卸売市場になっている。ちゃんと選別、小分けして陳列されている棚は少し高くなるが、そのほうが便利ではある。

やばい、オフクロが向こうを通った――気づかれてなければいいが――

「由！」

うわ、気づかれた。勘弁してくれよ――
「ちゃんと案内してる？」
「はい」
岡野ってオフクロには猫かぶってるんだな。
頼むから女同士の話はやめてくれよ。何でオレがいるんだ、葉波とオフクロでいいよ。

港、市場から多くの店が並んでいる。
その裏は大体小さな工場がある。
まっすぐ大通りが通って港の反対側に、大きな庁舎と図書館などの総合施設がある。
その前は噴水などがある、やや大きな広場になっている。
「海はどっちにあるの？」
と、彼女が聞いて、鼻を鳴らした。そのしぐさに変な感じがした。
「そういえば、ここは全体空調だから海の臭いはあまりしないわね」
と、広場を少し引き返し、カフェコンビニの角から横に出た。
表通りから入ると、このあたりは広めの家が多く、そのための少ししゃれた店がちらほらある。
美容院と岡野に葉波がふっと、不思議な視線を向けた。

「どうせこんなとこじゃ」
と、岡野の小声がなぜか耳に、ウニの刺のように刺さる。
すぐにドームの一番外の壁に出る。発泡コンクリートの壁に頑丈な鉄扉。
「フードとか上げとけ、ケーコは防水耐塩だろうな？」
「最新型よ！」
と、額に上げたサングラスにしか見えないそれを指差す。しっかり手入れされた長い爪が光っている。あれ、グローブは？　それ――それに最新型ってのは時々――まあいい、閉鎖されたシャッターの横の、普通より数段重い鉄ドアを開けると、猛烈な風と雨が叩きつけてきた。よかった、出なくて。
きっと目を強めた岡野が、そのまま飛び出す。
大丈夫だろう、海面上六メートルの防波堤があるし、波力発電ユニットや他のメガフロートがかなり波を軽減しているはずだ。
こちら側も見上げるような防波堤と、高い内側の壁に囲まれた幅三メートルほどの道。排水溝があふれそうなほど、雨水と――もしかしたら入ってきた波か――勢いよく流れている。
「海は？　この向こう？」
と、防波堤を触った。

「そうだけど、今は危ないわ。この風だと外は」
「見る！」
と、近くの階段から防波堤に登り始めた。
「よせ、危険だ！」
「大丈夫よ、泳げるもの」
呆れてものも言えない――
追って登ると、やはりすごかった。バランスを失いそうなほど強い風が、直接吹きつけてきた。
近くの農場や公園もろくに見えない。内側を見ると、補助翼を出した大風車がすさまじい勢いで回っている。
現金なことに、かなたを見ると青空がかすかにある。
「すげえな」
「ちょっとつかまらせて」
と、葉波がオレの腕をつかんだ。なぜか体が熱くなる。
「えま、つかまらなきゃ」
「わよ！」
声が風に吹き飛ばされる。

防波堤の上の、防風林も激しく揺れている。
あ、この木は五年前にオレたちが植えたんだったな。
「覚えてる？」
「うん」
と、もう声が届かないのでケーコで会話していた。
「岡野？」
一瞬ネットの情報を交えた嵐の海、そして思い出と葉波にぼうっとしていたが、見ると、彼女の姿がない――まさか、風か波に足を取られて――
こっちの堤防には波力発電施設がある。巻きこまれたら命がないし、巻きこまれ防止柵に引っかかったらこれまた命がない。さらにその影響で、洗濯機の中よりひどい水流がある。さらにこの嵐だ。それに、おかものは着衣水泳など――。
やはり落ちたのか！
嵐に吹き飛ばされた悲鳴がかすかに届いた。
オレは一声叫んで跳び、地を蹴ってから後悔した。
散々習っていただろう、人を助けるために飛び込むのはやめろ――危険すぎる、死人が増えるだけだから――。バカだオレは――
妙に冷静に、もう跳んでしまったのだから仕方がない、とケーコのゴーグルを水中眼鏡

がわりに下ろし、息を大きく吸って、足から着水して一気に潜った。

水面で一瞬すごい力を感じたが、水中にある程度潜るとかなり穏やかだ——もちろん、波力発電の水流に上下の感覚がなくなるが。

手を動かして衣服の抵抗に慣れ——着衣水泳は二週間に一度はやっている——鼻をつまんで明るいほうを向くと、少し離れて白い縄つき浮輪——葉波が追って放ったのだろう、あいつはバカじゃない——と、その脇にもがく影！

ぎりぎりまで潜水で近づくが、流れに離されていく。必死で浮上して息継ぎをしては潜る。そのたびに大波にもまれ、何度か水を飲みそうになった。

流れが、たまたま影のほうにオレを押しやってくれた——どれだけ経ったか、間に合うか——もう沈み始めている——強く水を蹴ってそれに体当たりし、手に絡んだものを——海藻とサメか髪か服か知るか——つかんで、ぐちゃぐちゃの水面に手を振り回されながら力を振り絞り、指に触れた浮輪を追う。それを一度失い、また水中に引き込まれ——とっさに右手に絡んだものを引き寄せた。

とにかく引き寄せ、水中で頭を探り、鼻を探り当てて口を口に合わせ、あごをこじ開けるように強引に残る息を吹き込んだ。

もつか——自分用にも残せばよかった——とにかく上だと思われるほうに、水面の波をかきわけて——運良く谷が来たところで息を吸い、また息を吹き込む。

とにかく一秒でも早く、一回でも多く吹き込む——一人で安定した海中に潜りたい、を抑え、すさまじい波に上からのしかかられて一瞬水を呑み、痛みに体が裂かれそうになり、振り回した足に触れた浮輪に足でしがみついた。

浮輪に腕をかけ、波にぐっと持ち上げられ、なんとか頭を水面に出して息を吸い、髪のお化けに吹き込み——いきなり、何かが頭を叩き、絡みついてくる。

狂気の化け物が、オレを水中に引きずりこもうとしている——オレも恐怖に総毛だった。

だが、波をかぶって冷静さが戻った——当然の反応だ。海に逆らうな——オレは女とは思えぬ力でしがみつき、体を砕こうとするかのようにからみついてくるその首に手を回して気管を探り、その両脇の動脈を締めた。1、2、3——十五数え動きが止まった、離れそうになっていた浮輪を引き寄せて彼女を——激しい波で一度失敗してから、浮輪につっこんで自分も隙間に腕をねじ込んだ。今度はとんでもない波の上下動と、頭にかぶさってくるのが遠慮なくくる。いっそ全てを捨てて潜ってしまいたい——水中は嘘のように楽だった——

が、腕がちぎれそうなほどしがみつき、また岡野のあごをこじ開け、波をかぶって咳き込みながら必死で吸った息を吹き込み、やっと救助ベルトのトリガーを引いて自分の浮きも膨らませる。

それから——はっきりと、ロープに機械的な力が加わる。オレも余裕が出て、縄をオレ

と彼女の体に絡めるともう一度息を吹き込み、少女の頬を叩いた。
目を覚ました彼女が暴れようとするが、波をかぶって叩けないので頭突きをした。
「波をよく見て、息と浮輪にしがみつくことだけ、ぶ……っ」
また波をかぶったので、彼女の口を押さえた。
オレも、もう――何かに思い切り叩きつけられる。それはそれで、体がちぎれるかと思った。ロープで引かれ、救助用階段に打ち上げられたのだ。
なんとかオレはもがいて手すりにしがみつき、彼女が浮輪ごと引きずり上げられるのを確認した。
そしてオレも、ものすごい大人の力で引きずり上げられ、頬をひっぱたかれた――その熱さでやっと意識が鮮明になり、波に一度抵抗してから腕を引く力を借りて階段をよじのぼった。
「ばかっ、殺す気？　首締めた！　それに何回キス奪ったの、この変態！　最低！」
――悪口がいえるのは生きているからだ、このおかものが――反論は口には出なかった。なぜなら、
「助けに飛び込むなと生まれたときから何度も何度も習っていただろうがこのドアホウ！」
「おかものじゃないのよ！　自分の命を大切にしなさい！」

と、大人に怒鳴られっぱなしだったからである。
その通りです――ごめんなさい――体を制御できませんでした――
『バカ、でもそこが好きなんだけどね』という葉波のテキストメールに気がついたのは、家で熱いシャワーを浴びて夜ゆっくりくつろいでからだった。
どうしていいかわからず、とりあえずオフクロに
「大丈夫？」
「大変だったわ、痙攣して……頭に埋め込んだケーコが、海水にやられたみたい」
「脳に直接接続？　最新型ってそういうことか――それで、生きてる？」
確か入力と音声は頭に直接、確かに羨ましいけど危険だよな、やっぱり。
「気になる？」
一瞬絶句したが、
「まあ死なれたらバカやっただけになるからね」
「十分バカよ、この親不孝者。ちゃんと元気だから心配しないで、すぐ帰ってくるから」
と、頭を叩かれた。かなり強く。
今夜も眠れそうにないな、いろいろな意味で。ゆっくり『第二次世界大戦』でも写すか、音楽は何にするかな――まあ繭が開いたのはありがたい。

3

喉が渇いた。一面の水面、飲みたい。
「海水飲んじゃだめ。飲めば飲むほど苦しくて、もっと悲惨な死」
——欲は海水のようなもの。飲めば飲むほど渇く——
——人類は本来ジャングルで進化しサバンナで暮らす群れサルで、人間の体も心もそれが生きて子孫を残すためにできている。人間の欲はそれに都合がいいように——

「由、起きて」
肩が温かい……葉波に寄りかかって居眠りしてたか。妙な目で岡野がにらんでる。
思い出した、飛行艇の中だ。
「腕がいいから寝てたんだろ、ゆー坊」
パイロットの、葉波の父ちゃんが声をかける。
「人工巨大浮体構造物有機廃水および生ごみなど生処理施設熱帯洋上型、通称人工マング

ローブ、略してジロブって呼ぶ奴もいる。とりあえず上空から見てみるか？」
何度も見てはいるが、やはりいい眺めだ。上から見えるのなんて、その壮大さの半分だけど。
後ろはるかに見える日本第七メガフロート群……五つの鈍く輝く太陽電池、それぞれから白くそびえる風力発電塔。中心の生命線、海水淡水化総合プラントが二つ。
十七基、二十キロ×五〇〇メートルから三キロ×二〇〇メートルまで色々な大きさの、水田や麦、休耕牧草など多様な緑に風力発電塔もまぶしい農場メガフロートが風も波も無駄にしないように並ぶ。その中に、深緑の小さい帯、可動式の用水路が数基守られ、農場同士つなげたり水を貯めたりしている。
やや遠くに、四キロ×二〇〇メートルの塩生植物海水灌漑メガフロートが二十基。
ちょっと変わっているのがドーナツ型の畜舎。ドーナツの中の海面に、牛が泳いでいるのがゴマのように見える。遠くにはラクダ畜舎も見える。
そしてオレたちが暮らす居住、軽工場メガフロート。上に張られた半透明太陽電池幕が鈍い光沢を放ち、その下のまっすぐなメインストリートと路上電車が見える。煙突兼用の大風車が雄大で、埠頭に集まるたくさんの船や飛行艇がまぶしい。
隣接して一回り小さい、緑の短冊がある。島の生態系を直線的に再現し、南国果樹を多めに植えた公園だ。ついでにうちの埠頭を波の直撃から守ってくれている。

　その群れから離れて、長さ一三キロの濃い緑が帯になって迫る。そのそばにある水畜産処理工場が白くまぶしい。
「あれがマングローブ」
　指差すと、さすがに岡野も驚いたように見ている。
「大きいね……すごく濃い緑、それに広いね」
「広い、で勘違いしてると思うけど、幅は見た目では二キロだけど実は五・五キロあるんだ」と指で宙に、同時にケーコの描画ソフトで透視図を表示しつつ線を引き、送る。「あっち、東側に、壁が二重にあるだろ？　外側のすきまだらけのやつが第一防波堤。あそこから水面下数メートルに人口海底が広がってる。その壁、第二防波堤からこっちに土砂が入ってて、壁からしばらく浅い干潟、そしてマングローブ。西側の壁は五メートルの崖になっていて、海鳥が繁殖する巣箱と波浪発電設備。そして真ん中西側の塔に汚水をためて、パイプでこっちのほうに流す」
「しかし、たった十六年でここまで育つとはな。一番高い木はもう二〇メートルを超えてるよ。もう毎年安定した木材やラクダ飼料がとれる」
　葉波の父ちゃんが、感慨深げにいいながら高度を下げ、
「海を見てごらん。向こうまでずっと」
　マングローブから海流に乗って、水平線まで大きな刷毛（はけ）ですっと流したように、海の色

が微妙に違う。
　そのまま、メガフロート群から離れた広い海域まで海藻と貝が養殖されているのがかすかにわかる。中央の海藻プラントが小さく見える。
「こんなに広く、海に肥料をやっているんだ。それに多くの魚の故郷にもなっている」
「いっぱい魚がとれるの？」
「まあな。あ、マングローブの周囲は原則禁漁なんだ。稚魚を保護するために。
　念のために言うが、漁業は主権や経済的自由という名の無法が横行していた二〇世紀とは違い、持続可能な漁獲のための国際管理、総量増加のための貧栄養温暖海域への施肥や人工珊瑚礁、産卵稚魚の保護、トロールや刺し網などの漁法制限、管理捕鯨の解禁など生態網の――」
「均等収穫原則、捕鯨を禁止しても同じオキアミを食べるアザラシやミンククジラが先に増えてしまっていて繁殖が遅いシロナガスクジラはなかなか回復しなかった、また魚の乱獲で生態系に空いた空白をクラゲが埋めてしまって魚が増えない、せっかくイワシの産卵を保護し、育つ暖海に肥料をやってもクジラが食べ尽くしてしまって漁獲が増えなかった、ってことを繰り返さないように、全体からまんべんなく獲るようにする」
　葉波の父ちゃんのフォローがなんだか情けなかった。黙っててくれれば思い出せたのに――

「と、……混獲の投棄禁止、が明記されている」
「じゃあ、混獲されたものはどうする？」
葉波が意地悪く突っ込んできた。
「えっと……極力死なないようにするか、死んだのはすりつぶして肥料や飼料にするか、海が消費できるよう少しずつ投棄するかだ。あと、マングローブの周囲が禁漁なのは僕らのトイレ直通だからだよ」
岡野の表情が凍った。
「そんな露骨に言わないでよ」
葉波の肘が、脇腹に食い込んだ。
「……マングローブでとれた魚介や海藻を、何も知らないところに流してるってうわさもあるけどね」
「はっはっはっ、大丈夫だ死にはしないよ安全基準は満たしてるから」
「ちゃん、やってる？」
機体を揺らしてごまかした——岡野が倒れこんできて、なぜか葉波もすごい目でにらみつけてきた——葉波の父ちゃんが、マングローブの東側を指差す。緑濃い海に、いかだが約八キロにわたって、規則正しく並んでいる。
「あのいかだで貝を養殖しているんだ。富栄養化しすぎた海域からはどんどん、栄養が深

海に失われるからね。少しでも回収しないと」
いって、大きく高度を下げる。
「すごい鳥」
「あと、マングローブやその下からも貝やエビ、カニがたっくさんとれる。主に肥料や飼料、貝殻は建材などにも使われるね」
「人の食用にする貝などは他のメガフロートの下や、公園でとることになってるのよ」
「僕らが食べる貝はね。おかものは知らぬが花さ」
「こらゆー坊、はっきりいうなよ。さて、降りて上から順に見てみるか……」
「え、降りるの……」
「やだなあ」
オレと葉波はげんなりしている。岡野は嬉しそうだけど——実態知らないから——
ま、今日はオレたちが生存公役で下水処理をやらなきゃいけないから、どっちみち行かなきゃいけないんだけど。
この間の事故の罰として、下水処理の仕事が岡野の案内もかねて前倒しになったのだ。それにしても、なぜここまで岡野にメガフロートについて、色々教えなければならないのだろう？
「さて、タンカーに合流するぞ。２２４８、タンカーどうぞ！　こちら１５７８６—２２、

これから着水し、長谷川たちを連れて第二埠頭につける。こいつらは今日新入生の案内が主になるな、どうぞ」

「こちら２４８―６６７、１５７８６―２２、７―４―０１第二埠頭進入よし、接舷よし、どうぞ」

無線の声を聞くと大きく旋回し、安全海域を指差し確認、ゆっくりと降下して着水。

「うおっと」

う――揺れた――まあ、今日はタンカーじゃないだけよかっ――いや、帰りはタンカーか――うぷ。でもやっぱり腕はいいよ。

「ほら、上にこれ着ろ」

「なにこれ、宇宙服？」

「いっそ宇宙服がほしいよ」

「ごめんね、すぐわかると思うから」

脚から胸まで覆う特殊合成ゴム引きのつなぎに、肩までしっかり覆う蚊帳つき帽子。分厚い作業着を隙間なく着込み、腕もしっかりカバーで覆い、分厚く長いゴム手袋を着ける。

そして蚊帳の下から飲める水筒と七つ道具を防水袋に入れてくくりつけ、ケーコの防虫防水を確認する。つなぎのポケットにモンキレンチと太いＬ字の六角レンチ、錆（さび）の浮いた大型ペンチ、やや大ぶりのチタン合金ナイフをつっこむ。

「大丈夫か見て」

葉波の全身をチェックし、オレもしてもらう。葉波が岡野もチェックし

「ここ、隙間が開いているわ。ふさいで」

「宇宙服？」

「そんなもんよ、これは――実際ひどい目にあってもらって納得してもらう、ってわけにはいかないの。いくら予防接種は受けててもね」

ゆっくりと飛行艇は海を航り、第二埠頭にぴたりとつけた。

「フェンダー用意！」

「フェンダー用意します！」

「もやい用意！」

「もやい用意ＯＫです！」

「よし、３――２――」

蚊帳をくぐり出て飛び移り、すばやくもやい綱を杭に固定する。

「よし、じゃあ行くか」

「行って来い」

葉波の父ちゃんの声、岡野と葉波が出て、出入り口の蚊帳をくぐると、さっそくおいでなすった――数限りない虫がぶわっと押し寄せてくる。

「きゃあああっ！」
岡野が悲鳴をあげてうずくまった。
「う、なにこの臭い――」
気持ちはわかる。これが初体験だというのなら――さぞ大変だろう。
「元気出して、行きましょ」
と葉波が岡野を引き起こした。
「う――」
「吐くなら汚水に吐いてくれ、栄養がもったいないし蚊帳帽子が汚れるから」
「ばかぁっ！」
「元気出たみたいね、いこ」
「もやい外します！　ありがとうございました！」

大人たちに合流し、少し岡野を任せて、まあ形だけ手伝った。もうタンカーの接続は終わっていたし。
「説明してやれ、復習にもなるから」
またこれだ、大人のめんどくさがりめ――なんでも子供にやらせるんだから。
「そのタンカーに集められた、風呂やトイレ洗濯などの海水とか粉砕した生ごみとか入っ

た生活排水、工業排水」
「から重金属や非生分解合成物を除いた」
と、葉波がいちいちフォローを入れる――バカにされてるな――
「排水、それと農業の塩や肥料が……ええと」
「海から入った塩分や肥料からの硝酸塩、農薬などがたまって再利用しにくくなった農業廃水、あと廃棄物から糞など肥料やエネルギー源にしやすいもの以外、そして加工の」
「肉魚の排水は海中パイプライン直結だろ。だからそっちに工場があるんだよ」
と、比較的近くに見える工場を指差す。
「うっさいわね、わかってるわよ」
「その言葉そのまま返す」
太陽電池に覆われた加工場本体、大型のクレーンなどがついた水揚げ用の埠頭がこっちから見えている。
そこからここまで、深さ八メートルにあるパイプラインでつながっている。
「それより、暑いんだけど……」
「じゃあ帽子取ってみろよ、死ねるから」
「あの人は平気じゃない！」
と、岡野が軽装のアブドルさんを指差した。

「こら指差すな、あの人は天然マングローブ育ちで、出稼ぎでここを管理してくれている人で、こういう環境に慣れているから――でも大量の虫に刺されるのは普通の環境で生まれ育った人間には耐えられないんだ」
「なんで、タンカーなんて使わないで生活も農場も、全部パイプラインにしないの！　自動に！」
「パイプラインはあまり長くできない、船にとってもジャマ。そして、この虫や鳥が生活の場や農場に入ってきてもいいのか？　距離をとらなきゃいけないんだ」
「で、タンカーからあのパイプで――どこに流し込まれてるの？」
うながして、崖になった埠頭面の堤防を登る。
「この防波堤の下に波力発電ユニットがある。で、ほら――この崖」
「いっぱい鳥がいる」
「この海鳥の卵と糞も、適度に回収できるようにしてるのよ。卵は食用に、糞は良質の肥料になるの」
「今朝も食べたろ？」
「あ、道理で大きな卵だと思った。それにすごくおいしかったね」
あ、今の声ちょっと可愛い。
「なに鼻の下伸ばしてるの、由。汚水はこの塔、中が空っぽで、そこに汲み上げられ、貯

められるの。その高さが圧力になって、この人工島の地下に広がるパイプ網で、できるだけ均等に汚水や砕かれた汚物を流しだすの」
「それをこのマングローブが処理して栄養に変えていくんだ」
「その栄養はどこに行くの？　それに農薬が混じってるって」
「遺伝子組み替え作物や天敵農薬、アイガモ農法を使っているから農薬はほとんどないし、タンカーや塔、泥の中で完全に分解されるわ。大丈夫よ」
「これから順に見ていこうか。西岸がこの崖で、そこから順に……」
手を振ると、今日の責任者である春おじさんが、空気を抜いたゴムボートのトランクやステンレス製のククリ（ネパールで伝統的に用いられる、前に湾曲した重厚で幅広い片手用の山刀。彼らが英軍グルカ傭兵となっても愛用することで知られる）、オールを持ってきてくれた。
防波堤から降りると、そこにはやや固い泥と、
「これは？　ススキみたい、ずっと大きいし葉はヤシみたいだけど」
硬い葉が、炎のように広がる。
「ニッパヤシ。陸側で半ば栽培している。これはとても利用価値の高い植物で、栄養をかなり回収できる」
春おじさんがいとおしげに鋭い葉をなでた。おじさんといっても従姉妹のダンナで、まだ三十そこそこ。

ちょっと線が細いけど、中身は筋金入りの海人だ。あの伝説のカジキは――おっと、

「東南アジアの天然マングローブ地帯では、衣食住これでできるんだぜ。焼けば塩までとれるんだ」

「砂糖もね」

「塩なんてタダじゃない？」

岡野の言うとおり――経済危機を解決するため、特に日米欧が過剰な生産力の行き先を探した結果、自然エネルギーが豊富な砂漠沿岸や亜熱帯の海などに、多くの海水淡水化プラントができた。

海水を淡水化したり電気分解して水素を得たりしたら、当然塩が出る。昔はその濃い塩水をそのまま海に捨てて自然を破壊していたそうだが、それはもう禁じられ――というか割に合わない環境税。

というわけで、今はもう塩……塩素とナトリウムはタダ以下であり、塩を工業原料として使う工場は安全に埋めるより安いと金がもらえるぐらいだ。

昔の中国で、塩で反乱があったりしたのはオレたちには信じられない話だ。〝敵に塩を送る〟という言葉もわかりゃしない。

「成長点は毎日食べてるし、実は今朝も食べたけど……あ、あたしたちが食べるのは、別に個人の畑で作ったものだから」

「ちょっと抵抗があるんだよ、さすがに。たぶん安全だけど。そして樹液から砂糖や酒が作れるし、葉は家の壁や屋根にもなり、繊維もとれる。この硬いところはちょっとした木材代わりにもなる、とね。こっちは近代生活をしているから、低品位パルプ用の繊維と樹液からアルコールが主な用途だな」

さて、いくらか樹液を採取し、葉を刈って――書けば簡単だが、暑いのに虫除けに厚着をしているしニッパヤシの葉は十メートル近いから大変なんだ――タンカーに運んでから生い茂るニッパヤシを抜け、小道を出ると――ほらさっそく、足が泥に沈んだ。

あちこちで、春おじさんが持ってきたたくさんの細いパイプを地面に挿し、抜いては端をふさいでいる。泥や水のサンプルを分析するためだ。

「塔がいっぱいになって、ちょっと潮位が上がってるね」

「満潮だし。でもそろそろ枝や海藻を刈って、少し泥を出さないと」

ふふ、気がつかないか――そりゃそうだな。

「さて、お待ちかねのマングローブ」

いつもの探検ルートの入り口を、大きなサキシマスオウノキの板根が出迎えてくれる。

「うわあ……」

岡野の声があきれていた。

入り組んだ屏風のような根。そして太い幹と、濃い緑。

木漏れ日がほぼ真上から突き刺さってくる。
「木の種類には関心ある？」
「あんまり……」
「じゃあ説明はしないね。気をつけて！」
といいながら、棍棒根に足を取られた葉波が春おじさんにぶつかり、受け止めてもらった。
わざとだろ？　あ、そうか。時々葉波が船長のときマングローブに近づくのは――
そして水が腿まできたところで、ボートを出して空気を入れ、かついでいたオールでこぎ始めた。
無数の支柱根を抜け、時にボートを担いで根を越え、鳥の鳴き声を聞き、――
「すごいね」
「ああ」
「いっぱい魚がいるね」
「魚もカニもエビもなんでもたくさんとれるさ。ついでにトカゲもカエルも――ヘビも」
と、目の前にぶら下がってきたヘビをオールに乗せた。
「きゃあああっ！」
「あああっもう、早く捨ててよ！」

「ばーか」
春おじさんにそういわれるとなんかすごくいやだ。
ぽい、と放ると、ヘビはそのまま泳ぎ去っていった。毒はない種類だから大丈夫。
「魚も」と、泥に手を突っ込んで変な顔のハゼをつかみあげ、「大丈夫なんだよ、この泥にはすごい量の貝やカニ、虫などがいる。パイプから押し出されて、この魚の中まで生きのびられるばい菌なんていやしない」魚を放した。
「由」
と、葉波がオレの目の前で手を開く。そこには大きなクモ、
「きしゃーっ!!」
「けーっ!!」
オレと春おじさんが、自分と互いの悲鳴に驚いた。
「あ、春おじさんもだめだったっけ。まあ――ここは自然に返すところなのよ」
葉波がクモを下がってくる気根に返しながら、使い古された言葉を――岡野が引いてる――
「てめ……違うだろ、人間には再利用しにくい排水汚物を自然を利用して浄化し、海に利用されやすい形でばらまいて、あとで回収するためだろ。バイオマスの絶対量をふやしてさ」

「ロマンのないことといわないでよ！」
と、枝を払いのけた棒が頭を直撃した。
「嘘でも女の子にはロマンを語ってやらなきゃな。それだから彼女ができないんだぞ」
と、さっきの醜態をなかったことにした春おじさんが、水のサンプルを取りつつ苦笑いをした。
「春おじさんが長いこと結婚しそこねてたのは」
皆まで言わせず舵オールがオレの頭を直撃、
「泥の無数の生き物が、汚水汚物を食べて浄化し、いい栄養にしているんだ。その栄養はマングローブの肥料にもなり、また海に流れ込む。あそこまでが、ちょうど土を入れた洗面器を水に、ちょっと傾けて一方から波だけが入るように浮かせたようなもので、周りの海から仕切られてる」
と、手振りを入れて講義が続いた。
「うあ、え」
ラクダの群れが歩いてくるのを見て岡野が驚く。
「ラクダだよ」
「塩分が多いマングローブでも育つからね」
葉波が当然のようにいい、ホイッスルでラクダを追い払った。

「淡水より圧倒的に多い海水から肉を作るのが、百億に肉を食わせる方法」
また岡野のやつ、言われもしないのに先走って調べてる。便利だけどなあ。
少しずつ水が深くなり、ヤエヤマヒルギがまばらになって、森を出るとかっと日光が突き刺さる。
元々この緯度でこの季節は日光がすごいけど――あ、そうか。
「な、なにこの日光！」
「今日は日光増強日だな。宇宙に浮かべた紙より薄い鏡で、あちこちの汚れた海や汚染処理の人工湿地、農場、太陽発電所に日光を少し追加するんだ。今日の午後はここだったね」
「暑いよ、のどが」
「背中に水筒があるでしょ、少しずつ飲んで――」
「もっと薄着になれないの？」
「こんなに虫がいたら無理なんだ、虫除けも限界があるから」
元々人間に適した場所じゃないんだよな、こういう熱帯の湿地は。
オレも暑いし、汗で防水防虫作業服がますます重くなる。
我慢して、ごく浅い栄養豊富で濁った内海を一キロ近く横切っていく。多くの水鳥が海

面をすくってえさをこし取っている。
　そして、第二防波堤につくと、
「ここが、実はさっき言った洗面器のふちなんだ。満潮になるとこの上まで海水が来て、栄養や生き物と一緒に出入りするから――」
「おかしいと思わない？」
　と、葉波がヒントを出した。
「え――そう、満潮!?　ちょっと、メガフロートでしょ？　浮いてるのに何で満潮なんてあるの？」
「ふふ、やっと気づいたか」
「うるさいわね」
「もうひとつ――この人工島、幅が広すぎると思わないか？　人工浮島、メガフロートの幅は、ほかは六〇〇メートル以下だろ」
「あ！　なんで――ちょっと待って、作るのが厄介だから」
「ブー。作るのはどんな大きさでも簡単だ。ブロックをつなげるんだから。
　でも、幅がある限度より広くなると、その底の下で水の酸素がなくなる――日光がなくて光合成が起きない、空気とも接してないから。その腐った水はいろいろ害がある。
　だから幅を制限するか、魚を飼う水槽みたいに空気を入れるか、光を入れなければならないんだ」

「新しいのは海中の浮きから、柱で海面より上に板を支えるから大丈夫よね」
「まあね。続けるよ、アメリカやアフリカでは、幅制限より空気や光を入れることを選ぶみたいだね。マングローブは幅が必要だから、あの波力発電のエネルギーで底に空気を入れている。その空気を調節することで、擬似的に潮汐を作っているんだ――実際の潮汐に合わせて。潮汐がないと、マングローブはうまく育ってくれないしね」と、春おじさんが鳥が群がる空気抜きの塔を指差し、
「そして浮力を得るため底にためた空気は、干潮の時間にあの塔から抜いてるんだ。中のタービンでエネルギーを回収して」
　ゴムボートを持ち上げて第二防波堤を乗り越えると、
「ここからは単に、擬似的な海底として板が沈んで固定されているだけだ。いくつか島もあるけど。それがここから約二・三キロ沖まで続いて、最終的な端がほら、あの隙間があって出入り自由な第一防波堤で、ここを波穏やかな内海にしているんだ――それで全体の幅は五・五キロ、ってわけ」
　春おじさんが指差した向こうに、隙間だらけの歯並びのような第一防波堤が、互いに隙間をカバーして二重に並んでいる。その上にずらりと白い海鳥が並んでいる。
「その外も、数キロ貝と海藻を養殖するいかだとかがあって進入、網入れ禁止なの。珊瑚

礁ができちゃうから、危険もあるしね」
「あと、ここの底も空気を供給されてて、相当なバイオマスがあるけど、それは利用しにくいのよ」
「そこまで見に行く？」
「それとも、ほら」
と、春おじさんが水のぞき――単に、底をガラス張りにした箱――を海につけ、岡野に示した。
「すっごい」
まあ、そりゃこれだけたくさん魚とかがいればな――海藻が多いから、あまりよく見えないと思うけど。
ここで多くの魚が産卵し、食べ、食べられる。
直接流したら海を殺しかねない汚水が、このマングローブでゆっくり浄化されていい栄養になる。
肥料分は日光と暖かい海水で膨大なプランクトンになり、卵からかえった魚を育てていく。それが回遊しながら大きくなったのを、人間がたっぷりいただくというわけだ。
もし何も考えず、汚水汚物全部流したらメガフロート地帯周辺は汚染されて漁業は不可能になり、肥料分の大半は急速に三〇〇〇メートルの海底に沈んでいくことになるが、こ

の形ならほとんど何らかの形で再利用できる。
マングローブから直接は、増えただけの木材やラクダの飼料になる葉、ニッパヤシの樹液、海藻、貝、海鳥の卵や糞をいただいて――といっても、あまりここには入りたくないんだけどな。
この無数の虫も、結局は魚や鳥、トカゲ、カエル――クモに食べられる。食ったのも何かに食べられて――食うだけで、死体は焼かれるのは人間だけか。
さて、いいかげん漕ぎ疲れてるんですけど――またあのマングローブを縫って帰るのか……はあ、まあこれで今日の分の運動は――必要量の五倍はやってるぞ、くそ、明日はバスケだよ……でも、春おじさんと葉波の前で弱音は吐けないからなあ……
「次のタンカーが来るまであちこち探検しようか」
勘弁してくれよ、クモが――。

4

溺れ――あ、夢か。バカなことをした、と改めて背筋が寒くなった。

あちゃ、今朝は配給食か、呼んでるオフクロの声もちょっと暗い。

玄米と豆と乾しカキの粥、ラクダ肉と芋と海藻とへんな塊としか言いようがない代物の煮物、ぬか漬けしかない。

「わかってるわよね……お説教はなし、食べちゃお」

あの頃をしのぶため、今朝のように配給に頼った食事を時々するのがならわしとなっている。

人類皆、たとえ政府が財政破綻しても餓死しない。最弱者の充分幸福が、文明の持続と一体で今の人類の主要な目標の一つだ。そのための配給制だ。

オヤジやオフクロも、日本始め世界中が財政破綻して大変だったころは配給に頼って生活していたこともあったらしい。今の、ここのように景気がいいところでも一応、配給券は配られている。そのほとんどは何かと交換するか寄付することになっているが。

まったく、どうにも最低のものだ。食料は原則として精白されていない玄米や全粒粉、そば粉や雑穀、芋、タピオカ（キャッサバのデンプン）、大豆、干し貝、オキアミ、ラクダの肉やチーズなど。最悪なのがネイなど遺伝子操作された新しい作物の加工品。要は〝生きていければいい〟〝人はパンだけで生きるものではない。けれども地では皆最小限はパンがいる〟。家畜の餌みたいなもんだが、今でもこの配給以上の食事ができない人は何億人もいる――それがなくて飢え死にするよりはましか。

牛肉や豚肉はまずなく卵もごくたま。砂糖、コーヒー、酒なども本当にこれだけで暮らすとしたら――もちろん衣服や住居も配給で与えられるのは、実用的すぎる最低限のものだ。

ここでは魚や貝、海藻の配給はまああるが、それも商品価値が低いものばかりだ。むしろおいしいものもあるけど。

この配給がいきわたっているからこそ、もし仕事を失っても生きていくことはできる。誰もが、だ。少なくとも人類は飢えは克服した――飢餓は、葉波としでかした漂流事件で一応わかっているつもりだ。誰も餓死させない人類の一員であることの誇り、か。

ついでに、情報が電話も含め、ちゃんと義務を果たしていれば全員使い放題なのは実にありがたい。電気、水道なども制限は一応あるが、まあ充分らしい。

この粗末な食事も、よく噛めばそんなにまずいもんじゃないが、やはり普通の食べ物の

方が好きだ。
「玄米は五十回は噛まないとちゃんと消化できないわよ」
「わかってるよ、でも学校船が出ちゃう」
「かむのが嫌いなのは人間の本性だから、ちゃんと乗りこなさないとね」
「習ったよそれぐらい！」
人間の本性を知り、それを乗りこなせ――いつもそう教えられる。それが嫌だと思うことがあるが、『ではどうする』と常駐ソクラテスにいわれると、どうしようもない。
常駐ソクラテスは誰もがコンピュータに持っている、ある種の相談相手というか厄介なソフトだ。子供にとっては家庭教師でもあるし、ある意味家族でもある。『なぜ？』『ほんとう？』『ほしいものは？』『うのみにしてないか？』『現実にできることは？』『やりなおせるとしたら？』『別の見方はないか？』『いい点と悪い点は？』『自分に嘘をついていないか？』『本音は？』などとしつこくしつこく聞いてくる。あれと話したがる人は多いけど、大抵はこのソクラテスが相手をしてくれる。それで十分だって話だけど。

学校に着くと、いきなり女子に囲まれた。
「ねぇっ、溺れかけた岡野さんを助けたんだって？」
「どんなふうに？　飛び込んだの!?　キャーッ!!」

一瞬戸惑い、それで嬉しく――だが、なぜか突然震えが来た。
あの幽鬼のようにしがみつく手――身長より高い波にもまれ、何度も息が詰まり――
ふ、と倒れかかったところを、葉波に支えられた。
「こまりますねえ、インタビューはマネージャーの私を通してもらわないと」
至近距離で、ちょっと怖い――船長としての笑顔がそこにあった。
「え、えー！」
「ずるい！」
背中に当てられた手が暖かい。ふっと気持ちが落ち着く。
「バカなことをしただけだよ」
まさにそうだ、前に、葉波と漂流する羽目になった時と同じく。
「岡野！　って叫んで、嵐の海になんのためらいもなく飛び込んだんでしょ？」
「すごいよね」
「そういえば、一緒に住んでるんだって？　もう運命よね！」
「葉波ちゃんはどうするの」
「てめ……表に出ろよ、一発殴らせろ！」
「やるのか？」
にらむと、そいつはあっさり引き下がった。

二十年ほど前、明治時代から生きていた決闘禁止法が改正され、未成年の決闘が、ルールを守れば容認されるようになった。複数の大人が立ち会うこと、男女対等は十二歳まで、武器なしの一対一、ひどい傷を与えないことなどが条件だ。女子同士、男女、年齢差などで複雑なルールが慣習としてできている。

ふん、やっかみやがって。

「バッカみたい」

「あ？」

ふり向くと、当の岡野がむくれていた。なぜか、顔が熱くなる。

「ねえ、それはないでしょ？　由くんが助けてくれなかったら、死んでたんじゃないの？」

「ひどいんじゃない？」

そうだ。もしオレがマニュアル通り、救命具を投げるだけにしていたら――あの嵐の中では、人魚も出せはしなかった。遺体さえ出てこなかったかもしれない。

「騎士（ナイト）にそんな言いかたないよ」

「ふん」

つん、と、彼女はすまして席に戻ってしまった。そういえば、あれから一度もお礼一つ言われてはいない。

お礼が欲しくて助けたわけじゃないけど、少しは感謝してくれないと、あんな危険を冒したのに。キスの一つぐらいくれてもいいんじゃ？

「由」

何か、葉波が叱るような目で見ている。やめろよ。なんだよ。

ぷい、と、彼女も、目を一瞬細めてそらし、手を離して去った。

「あの台風の中で、海に飛び込んだのかよ」

「どんなだった？」

男子もいろいろ聞いてくる。

「ま、なんでもなかったさ」つい、格好をつけてしまった。「おかものに着衣水泳なんてできるはずがないしな、とっさに飛び込んで、抱えて」

つく、と手のロープずれのような痛みを感じた。

「そこにちょうど、葉波が投げた救護具につかまって、引っ張り上げられたんだ」

「海、荒れてたろ？」

「寮は低気圧からはずれてたけど、それでもかなり荒れて外には出られなかったんだぞ」

「稲刈りの後でよかったよなぁ」

「そうだ、前から聞きたかったんだけど、寮に台風が直撃したらどうなるんだ？」

メガフロート暮らしだと、荒れたらどこにも行けなくなる。農場を最低限護ったら、居

住区に閉じこもってオンライン教育か、修理にかり出されることになる。
「どうもこうもないよ、船も飛行艇も飛行機も出られないから、ひたすらお前らがいない、がらーんなガッコで勉強して、体育館や寮で遊んで、大掃除をやらされるだけさ」
「海のみんなも似たようなもんだろ？」
「まあな」
「でも、もうすぐ――」
そう、春稲の刈り入れが終わって台風シーズンが来たら、農場も一部を除き緑肥を育てつつ〝地下〟に水をためこむのに専念し、学校も休みになる。その間は――生存公役がたまっていれば、世界のどこかで植林か何かをすることになる。野外活動も義務教育に含まれているから、それも消化しなければならない。
今年はどうするか、今年ずっとやってきたメガフロートの立ち上げを手伝うか、それともゴビ砂漠にいるオヤジを手伝うか――
「晴と僕らのグループは荒天帆走訓練をやったけど、死ぬかと思ったよ！　あの海に服着たまま飛び込むなんて――」
やめてくれ、そんな眼は。オレは単に、ほとんど自殺と言っていいバカをやっただけなんだ――
でも、やはり気持ちがいい。こたえられないよ。

「現在、日本の一次発電は原発が34％、石炭火力発電が19％、天然ガス火力が15％、風力・太陽光・バイオマス・波浪など自然エネルギーが28％、水力が4％。ただし、火力発電は二酸化炭素を環境に出さないよう、いろいろ工夫している。
その方法は立地によって異なり、沿岸にあり大都市に近い発電所では」
ケーコに浮かぶ、何度か野島崎から見る光の柱。
「火力発電は炉の排気と熱い水、石炭の場合灰が出る。その排気は二酸化炭素、硫黄・窒素酸化物、煤塵などが含まれている。その排気と熱い水、空気を混ぜ、東京湾など近くの、極端に汚染された海の底に放出する。二酸化炭素は水に溶ける。そして熱いから」
対流の図。
「海底にたまる栄養塩と共に海面に上がる。日光が不足して、混ぜた空気だけでは酸欠になるから、宇宙から鏡で二十四時間三百六十五日、日光を当ててやる。そうすると年に、東京湾だけで三百万トンの海藻と貝類が収穫でき、二酸化炭素も固定できる。
メガフロートでやっている、外洋海藻栽培と似たようなものだ。
ただし、収穫した二酸化炭素はすぐ大気中に戻ってしまう。本当の処理は深海処理で」
『由、由』
『なんだよ』

葉波からのメール。まあオレも退屈だし。
『あのときは傑作だったよね』
『ああ、カスがのバカが』
「地球温暖化は、外洋施肥や人工干潟・珊瑚礁・海水灌漑など海水バイオマスを増やす対策の成功、実用高速増殖炉など原子力技術の進展、そして地球自体の制御力のおかげか最悪の予想よりはましだ。でも最悪の予想が当たっていたかもしれない、予測できるものではなかった。本来は全員分の救命ボートが必要だったのだが、その視点はなかった。今だってそれほど余裕はない。核融合は技術的にまだ無理なので、一刻も早く宇宙太陽発電を主力にして」
宇宙?!
『由！』
『ああ』
『由……なんで宇宙と聞くとこんななの、海じゃご不満？』
ああ、宇宙……星空の向こう……
『誰でも、あんなふうに助けるの』
一瞬そのメールが浮かんだかと思うと、直後に消された……が、オレは軌道エレベーターと静止軌道太陽電池リング、月面や水星の太陽電池に夢中だった。

昼、聞いてくる連中から一人になりたくてとっておきの場、体育館の屋上にある日陰に行った。
岡野が一人、食事をしていた。なんともまずそうに。
なんだか腹が立った。オフクロが作った弁当がそんなにまずいのか？
「なに？」
彼女の目が、いきなりこっちを見た。何と話しかけていいかわからない。
「あ……」
いつもどおり、きつい言葉があれば別の場所を探せるのに、彼女も黙っている。
そこでうわっと、熱い西南西風が吹いた。
「ちょうどいいな」
「何に？」
「この風、帆をグースウイングに絞れば」
「わからないんだけど」
そうか、おかものだった。
なんとなく同情する――ほとんど異民族のような連中に囲まれて暮らすんだから。
オレは風上に坐ると、弁当を出した。

彼女も何も言わず、食事を再開する。
「昨日とれたばかりのトビウオだ、うまいだろ？」
「そうね」
ふ、と表情がゆるむ。また、熱い風が吹く。
なんだかどぎまぎし、さっさと食べ終えて体育館に走った。

「由、今年はどうするの？」
帰りの船で、葉波がふっと聞いてきた。今オレたちは非直だが、岡野にロープワークの基礎ぐらいは教えてやれ、と言われている。
「うーん、オヤジのところかな」
「そうね。あ、それじゃ輪が締まっちゃうわよ。もやい結びはこう、まず基本的な結び方をしっかり覚えないと」
「航海術のコース、とるつもりないんだけど」
「でも、嵐の時とか、全員が手伝うことがあるからある程度できたほうが恥をかかずにすむし、いざというとき安全よ」
「うう……」
たどたどしく、……ほらやった！

「おい！」
「何よ！」
手首をつかんだオレの手を、あれ？　水をつかんでいたように外された。
「なんなのよ」
「だから、結ぶときに絶対指を輪に入れるな。今こうして」と、紐を引っぱる。「綱に力がかかったら指がつぶれるぞ」
「よけいな……バカ」
ごん、と葉波に殴られた。
「海が嫌いなのか？　酔わないのに」
それがうらやましくてならない。オレはこんなに海が好きなのに。
「由、何書いてるの？」
「ハッキングするなよ」
葉波はコンピュータでもかなりの腕利きだ。数学はオレのほうが得意なんだが、それとこれは違うらしい。
「あ、例の日記？　まじめにやってるの？」
「まあな」
今書いているこの文章、学校で勧められた、〝汝自身を知れ〟日記だ。自分自身を、今

暮らしている文明を含め外から分析するような視点で書く。また自分の感情も素直に書く。
――そうすることで、役に立つもう一つの自己ができるし、自分の心が邪悪に呪縛されるのも防げる、とのことだ。とりあえず二一世紀初頭の視点から記述してみている。
「何が書いてあるの？」
「そっちのも見せてくれ、そしたら見せる」
「ごめん」

「これが太陽電池？」
「そう」
「なんか大きな板がたくさんのった、三角のジャングルジムみたい」
そう、太陽電池ユニットは、水面下にある中空球形の支浮脚から基本的に正四面体で組まれた、水面上数メートルに伸びる柱に支えられている。
海水面に触れていないから、海水の蒸散はほとんど妨げない。近い将来、他のメガフロートもそのやりかたで造るようになるらしい。
新型の太陽電池は半透明で40％を電気に転換、30％を透過して海面に、30％は反射だから生態系にもさほど影響はない。それが何千枚も、太陽を常に追っている。
表面にはいつも掃除している、ヒトデに似たロボットがいる。

風力発電塔の自動レーザーに海鳥が追い払われている。
「で、メンテナンスって何をするの？」
「ロボットの点検と行き届かないところ、あと脚の掃除だな。脚の掃除は大人がやるから」
「水中なのに何を掃除するの？」
「どうしても底にフジツボとかがつくんだよ」
「きゃあっ！」
岡野の悲鳴に、あきれてものも言えなかった。おかものの女はなぜフジツボを怖がるのか、あんなにおいしいのに。
「本当にここに来るまで、海を見たこともなかったんだな――どこで暮らしてたんだ？」
ぷい、と彼女はオレを無視し、
「どうやって水中で掃除するの？」
と、船から海面を見下ろす。うらやましいぐらい酔ってはいないようだ、この不安定な波で。もうオレは――うっ。いつもながら、ゲロに魚が集まってくるのを見るのは情けない。
それにしても、岡野は本当におかものなのか？　この海で酔わないなんて。
「じゃあ、今日はそっちを見学するか」

春おじさんがにこやかに笑った。
「〝人魚〟使わせてくれるの？」
葉波が目を輝かせた。
「――よし」
オレも勇んで、船酔いもふっとんで帆脚索（シート）をゆるめて転桁索（ブレース）の手応えを感じ、
「風よし、左舷開（ポートタック）きに上手回（タック）しいくよ」
「上手回しよし！」
葉波の舵と息を合わせ、風に向かって大きく船体を躍らせた。
残念ながら、岡野は回る帆桁に頭を殴られる洗礼は受けなかった。葉波のやつ、事前に注意したな……裏切り者。
大きく傾きながら裏帆を打たせ、エンジンを使わず微妙な調整で太陽電池のベースに着くと、もやい綱を投げて船から飛び降りた。岡野が葉波につかまって降りている。
「水面下メンテの見学だってさ、出してやれ」
「ま、さっきの上手回しなら大丈夫だろ。ほら、壊すなよ」
バスケコート程度の海上倉庫に大型車程度の大きさの乗物がいくつかある。
イルカを思わせる優美な流線型に二本の人間のそれに似た腕と象の鼻を思わせる腕、そして下に二つの車輪とキャタピラが一つ、流線型を損なわぬようにいくつかの箱状のものや、

小型のスクリューがついている。
頑丈な窓とカメラアイもいくつか見える。
「実物ははじめて見た――これが人魚？」
「そう、特殊水中作業機。古典アニメ好きが強引に腕をつけちまった代物さ」
と、点検し、ドームを開けて補助席を引き出した。
「長谷川、前やったことあるだろ？　岡野さんはそっちに乗って」
「え、はな――いやわかった、わかりました」
岡野と乗れば、葉波は春おじさんと乗ることになる。そうしたいなら……岡野に我慢してもらえばいい。
「ちょ、ちょっと！」
当然岡野は文句を言う。
「しょうがないだろ」
「いっつもそう、海の人ってしょうがないだろばっかりで、すぐ大人の言うなりになって！　しかたがないは奴隷の始まりよ」
「だって相手は海なんだから。どうしろってんだよ」
と、補助席を示して――あちゃ、わかっちゃいたけど狭いから思ったより密着してしまう――

「鼻の下のびてるよ！」
葉波に言われ、
「そっちこそ！」
言い返すとシートにつき、足をあぶみに入れてケーコと人魚のコンピュータをリンクさせ、操作グローブをつけて指を一本ずつ点検する。
それからシートから出たマスクで鼻と口を覆い、口と舌の操作に合わせて象の鼻が動くことをチェックし、足の操作でコンピュータの点検モードをチェックして……
「岡野、そのホースをしっかりくわえて。しっかりシートベルトをして、ナイフだけは確認しておけ」
「指図しないでよ！　ナイフなんて持ってるわけないでしょ、そんな野蛮な物！」
「命にかかわるんだ、ったく――」
オレは自分の、足にとめてある予備をはずし、
「左利きだよな、なら右腕にでもテープでつけて」
「指図しないでよって言ってるでしょ！　ナイフなんて危ない物、触りたくないわよ、ましてあなたのなんて」
「岡野！」
くそう、そんなに命を粗末にしたいなら、オレはあのとき何のため、あんな危険を冒し

たんだ？
「えまちゃん」
春おじさんが、いつもとは違う厳しい目で見ている。
「最低限の準備ができていないなら、海に入るべきじゃない。もし事故が起きて、シートベルトがはずせなくなったらそのままおぼれ死ぬのかい？」
「事故なんてないわよ」
「あるんだ、いいからつけなさい」
と、強引に彼女に押しつけた。
全体が特殊チタン合金製で錆びない。刃渡り7センチほどの短剣形（ダガー）で、一方が普通の刃（ブレーン）＋湾形糸切刃（ライン カット ツバク）、もう一方が波刃（セレーション）。柄は金属のままのワンピースで、細長くとがった柄頭はマリンスパイクを兼ね、軽量化を兼ねたシャックルキー穴が抜かれている。文字通り最後の最後で命を預ける一本だ。いらないんならオレだって、一瞬だって手放したくない。
「こちらの点検は終了しました、見落としはないですね」
「大丈夫だ、掌紋確認、起動」
コンピュータにしても何にしても、年中掌紋を使うこともあり、ケーコ操作用手袋は掌部分が開いている。
機体付属の超高画質両目接眼ディスプレイ――かなりごついゴーグル――とヘッドホン

を装着し、表示を確認する。古典になっているロボットアニメでは、全天周囲リニアシートとかいう全面がディスプレイになった球状コクピットだったけど、それはどう考えても無駄だ。ディスプレイは目の前だけ、いや技術が許せば岡野のように視神経の中でいい。

もちろん、窓から直接外を見ることもできる。

手動開放よし、酸素供給よし、緊急用サブラングよし。

「緊急用に、このサブラングは引っ張り出せる。それで、ここを操作すればハッチが開くから覚えておいて」

「ついてこい！」

春おじさんの通信が入る。

「周囲だいじょうぶですね！」

周りを見回す――目のディスプレイに入る映像は、事実上壁がないのと変わらない。一度シミュレーターで、ドックで人をはねてしまったことがあるから、気をつけないと。

「よし」

足を軽く踏み込むと、特殊な大容量畜電池（と、水中ではあまり使えないが燃料電池のハイブリッド）で音もなく前進し、海にそのまま通じる坂に進んでいく。

「海に入る時、切り替えに気をつけろ！」

「はい」

「足の力を抜け、手袋は今どこにつながってる？」

「作業アームの操作です、コンピュータではなく」

普段、ケーコは専用の手袋で操作する。手袋に無数のセンサーが入っていて、指の微妙な動きも捉えている――キーボードと同じ感覚でどこでも使えるし、手袋ならではの操作系もいろいろある。

それがこの〝人魚〟だと、手袋は〝人魚〟の腕にそのまま連動しているから、作業中はコンピュータの操作に使えない。それが混乱すると事故につながるのだ。オレもシミュレーターで何度か、かなりひどい事故をやらかしている。

主に本体の移動はフットペダルで行い――今ちょうど水に入って、

「あ、沈んじゃう」

「だいじょうぶだ、ほら同乗者を安心させて」

「はい、だいじょうぶだから、もし水が入ってもそのホースをくわえていればそれが、別のシステムで酸素を送ってくれる」

「うるさい、聞いてないわよ」

坂から海に滑り出し、前に行く数機の〝人魚〟を追う。

「そこで停まって、沈降」

船、特に帆船とは違う、すごく直接で乱暴なパワーに振り回されないよう、しかも足で

の操作で間違えないよう、ゆっくり動く。前に初めて操縦した時は、いろいろ混乱して大変だった。

足の操作に合わせてすっと海に潜ると、前にはとてつもない眺めが広がっていた。

多くの、いろとりどりの魚やクラゲ、そして入り組んだ、想像を絶する大きさの玉。

表面はもう、びっしりといろいろな生き物に覆われている。まるで妹の絵だ。

「20‐4、由、通信、ソナーは？」

「通信良好、ソナー良好、どうぞ！」

耳に、立体的な音がある。周囲をソナーで確認し、その像を耳に投影しているのだ。

ソナーによる三次元空間認識は、特殊な音楽としても楽しまれているが、実際にそれを使っているとまた違う眺めだ。

はっきりと目の前の球が聞こえるのだ。

「な、なに？」

岡野の声。

「不安ならケーコを切っておけ。ほら、向こうに鯨とイルカがいるよ」

「え、うそ！　そっちいってよ！」

「だめだ、待機して見学するんだから」

「あとで自由運転していいから、ちょっと見とけや」

と、通信が入った。

二本の、見かけは無骨な機械だが実の手とまったく変わらず使える腕と、口と舌の操作で想像以上に自由に動く〝鼻〟が様々な道具を用い、球を覆いつつある貝類を掻きおとし、収穫していく。

ここだけでも相当量の貝類などがとれ、それも肥料などいろいろ使い道があるのだ。

〝人魚〟の優雅な動きとパワーは、何度見てもすごい。無骨な機体だが、本当に人魚のように自在に動けるのだ。

太陽電池を支える特殊強化コンクリート、特殊鋼、超炭素繊維複合非生分解プラスチック、生チタンなど多層の大きな中空の球にはとてつもない強度と耐蝕性があるが、油断すると、波や潮、生物の想像を絶する力で徐々に破壊されてしまう。

かといって、船のように銅板など生物にとっての毒で覆うのも害が大きすぎるからできない。

ある程度表面の生物を許容し、食い食われる関係を作ってそれでコントロールし、メンテナンスはそれを助ける程度にするわけだ。

やはりオレは、資源の無駄遣いでも板を浮かべたメガフロートのほうがいい。

少し離れた海中に、ひときわ大きな球が並んでいる。太陽電池の上に降った雨水を貯めるタンクだ。直接大型の艀（はしけ）で曳航することも、輸送船に積むこともできる便利な代物だ。

びっしりとついて、よけいな重さを加えている貝をかきとり終わると、声がかかった。
「ちょっとだけ、遊んできていいぞ！」
ぶるっ、と喜びがふくれあがる。
ベースに道具を置くと、葉波の人魚が一気に加速した。オレも追う。
「ハナちゃん」ぴったりくっついている岡野が、あえて葉波に聞く。そこまでオレと話したくないんだ。
「なんでこの〝人魚〟って、遠隔操作にしないの？　安全だし、同じことじゃない？」
「由、教えてあげて、あ！　イルカ、ついてきて」
葉波の、面倒くさそうな声が興奮に変わった。
「ＯＫ！　窓からみてごらん、こういう臨場感が遠隔操作にはないんだよ」
岡野に言うと足を微妙に動かし、一気に超伝導推進を加速させた。
耳が、周囲をとらえている。今水面から５メートル。下の奥に泳ぐ十数頭のおおきなにか。
加速し、近づくにつれてその形がわかる。体が温かいものを感じている。
大きく曲がって減速し、姿勢を制御して、耳を澄ます。
さまざまな声が聞こえる――
「きた」

「うごく」
「こっち」
「いこう」
「えさ・なかま・かりうど？」
「この声？」
岡野がとまどっている。生の不思議な音もいっしょにある。
「イルカの声さ、コンピュータが人語に訳してる」
「今は仲間だ、少し遊ぼう」
「今のは葉波の言葉を訳したんだ」
窓に釘付けになって、きいていないようだ。
「いいよ」
「いこう」
「におう」
「後ろからつく」
海での電磁推進はどうしても塩素が出る。極力減らしてはいるけれど。
「由、ついてきて！」
「ＯＫ！」

先頭が方向転換をするのに合わせ、一気に潜る。
魚の群れにつっこみ、豪快にほおばるのを見る。
急な方向転換の連続で、上下の感覚がなくなりそうになる——ソナーの情報が複雑に変わるが、空間認識は失わずにすむ。
「手をうまく使うんだ」
と、前の葉波の機から春おじさんの声。
腕と鼻を微妙に使って、くるりくるりと舞うように方向転換している。
こうしていると、まるで自分がイルカになったようだ。空を飛ぶのに匹敵する自由。
ずっとこうしていたかったが、時間が来て浮上する——
「もう終わり？」
と、岡野が女の子らしくかじりついてきた。こうしていればかわいいのに。
「ほら」
すいっと、巨大なマンボウがクラゲを食べているのを横切ってちょっとだけそのひれを触り、加速して腕の力も使って水面からジャンプした。
「うわぁ！」
「ほらガキども、遊びは終わりだ！　ちゃんと帰れよ」
「はいっ！」

そういわれると、どっと疲れが来る。もう一度潜って、ディスプレイに浮かぶソナー誘導線をつかまえ、坂に下りるとキャタピラに切り替えて上がり、コクピットを開けると——神経の切り替えがうまくいかず、しばらく立てなかった。
「ほら、ぼーっとしてないで、自分で乗ったのは自分で点検しろ！」
鬼——

5

目ざめると、何かすっごくいい夢を見ていたような気がする。思い出せないのが残念なぐらい。

朝、一人で早起きして運動してきたのか、ひどく疲れた様子の岡野がいた。

今朝は東南アジア風の、ココナッツミルクのきいた辛いスープか。

「あれ？　コンポストは？」

かなり残した皿を持った岡野が台所を見回して、聞いてきた。

「はぁ？」

コンポスト――聞いたことはあるような。

「だから、これは――」

と、手の皿の残りに視線を落とす。

「あ、流しの穴に入れてペダルを踏めば、ディスポーザーが処理して流してくれるよ。危険だか」

「ディスポーザー!!」

何か、えらく衝撃的な表情だ。

「ディスポーザーって、生ゴミを切り刻んで砕いてそのまま下水に流してしまう、っていうアメリカ式の野蛮な代物じゃないでしょうね!?　殺人の死体を隠すのにぴったりな！」

むっ。

「コンポストってのは、生ゴミを堆肥にするとかいうお笑いでエネルギーの無駄な代物じゃないだろうな」

お互い呆れたような、奇妙な表情でにらみ合っているのが窓に映っている。

「地域無償幼児教育レベルでいうね……ディスポーザーで砕いた生ゴミをそのまま下水に流したら、川とかが汚れるでしょ」

「二年前の復習になるな、こりゃ……生ゴミといっても調理したものが多いから塩分、化学製品など不純物が多い。そんなの堆肥にしたら家の庭ぐらいならともかく、畑に塩分が入っちまって安定した食糧生産には使えない……ミミズかハエでも育てて飼料にしたほうがましだ。

食糧生産メガフロートはただでさえ海から塩が入りやすく、貴重な雨水やエネルギーを使って淡水化した海水を使っているから塩分は大敵なんだ。そして、こないだ見たあのマングローブメガフロートは生ゴミも廃水も全部海の栄養に返して再生利用できるからだい

じょうぶ。
都会は人口が多いから、処理しきれないのか――いや、できるはずだ。あ、それどころか本土には簡易下水さえなくって、川に直接流している場所もあるんだってな――」
「なんですって」
本気で怒る表情。なんだか目が離せなくなる。
「いいか、調べてみろよ、自分で。処理できないはずがない、房総半島沖の黒潮だけで人工干潟メガフロートが十五基、筏式の海藻・貝類養殖や防波柵があれば外洋で浮かんで増える遺伝子改良海藻のコロニーもたくさんあるんだから」
あえて口調を穏やかにすると、彼女もおとなしく目を閉じた――溺れかけた事故で改良版ができ、それはディスプレイまで視神経に直結させてしまったらしい。もう完全に体内にケーコが内蔵されている、ってことだ。体内のだけじゃ小さくて性能が悪いから、普段はチビリュックを背負っているけど。大丈夫なのか？
自分でもケーコで調べてみると、処理できる容量はあるのだが本土ではコンポスト派が多いため、それが定着してしまっているそうだ――これだから本土は。
というか肝心なことを言い損ねた。食べ物を残すな！　どれだけ苦労して作ったと思ってるんだ。まあオレも、食べ残せないけど好き嫌いはあるし、ときどき吐くから大きいことは言えないが。

『熱い』
葉波からきたテキストメールは、暑いではなく熱いだった。わかる。
『まあね』
回帰線で海の真ん中の夏は、真上に近い太陽からの猛烈な日光と、わき上がる海水の湯気のダブルパンチだ。時にさわやかな風もあるが、それもあっというまに、甲板を焼く日光と海の照り返しで炙り返される。
だが、この強烈な陽光こそが――
「聞いてるのか？」
と、峰の兄貴が講義を続ける。船が遅れているので、ちょっと船内で授業。
「ごめん」
とケーコのノートと教科書以外を一時停止にした。
「海で一時間ほど泳いでくるか？」
「それだけは勘弁して」
「泳げないの？　何がそんなに恐いの？」
何も知らないんだから、おかものは――
「一度経験してみるか？」

すっぱだかで海に放り込まれ、船が視界の外に出てしまう――うねりしかない大海、雲一つない空！　思い出しただけでちびりそうだ。

もちろんどこかに発信器がついていたり、近くに人魚が待機していたり安全は確保されているのだが、小さい頃のオレが知るはずはない。まあ、最近はかなり多くの子供が、一度は自然の中に安全は確保してしばらく放置され、恐怖と不安を叩き込まれる。もちろんそんなことがあり、安全が確保されていることは、小さい子には絶対に秘密だ。妹のときには本当に心配だった――どんなに安全だと言ってやりたかったか。

安全対策はあっても、あれをまたやる気にはならない。もしタイミングよく鮫が来たら終わりだ。

あれから何度か海に放り込まれたり、悪仲間とボートで数日流されたり、それにあの漂流――

「さて、続ける」

ケーコに、講義データベースからの映像が浮かぶ。

「石油涸渇が迫り、人類は大量のエネルギーを確保する必要に迫られました。現在でも中心は石炭と原子力ですが、代替エネルギーの研究も急速に進みました。

特に無尽蔵の日光のうち、生物があまり利用していない、外洋や砂漠に注がれているものを利用する技術が開発されました。バイオマスの総量を増やすことは、二酸化炭素削減

にも有益です。

光合成をする、人間にとって重要な生物は主に日光、水、酸素、二酸化炭素、必須元素つまり肥料、適温を必要とします。砂漠は水が少なく、外洋海面には肥料が少なく、極地は温度が低すぎ、地下や海底は日光や酸素がありません。

さて、代替エネルギーに少し戻ります。アフリカから中東の砂漠地帯では太陽と風力が、主にヨーロッパの余剰労働力と聖杯による自己増殖生産技術で発展しました。初期は海水を利用できる沿海域を中心に、太陽熱発電のほうが多く行われました。太陽は夜間などの限界がありますが、宇宙から鏡で日光を追加しています。

今でもアラビア半島などには海水を引き込む大規模な運河と、その周辺の太陽熱発電所・海水淡水化工場を中心にした工業地帯がいくつもあります。太陽熱発電は高純度シリコンなど環境負荷の高い資源を必要とする太陽電池と違ってガラス、アルミや鉄、建材、水や油と発電機だけでできるという利点があります。

そして外洋では太陽光や風力も利用されていますが、バイオマス生産も研究開発されました。そのためには海に降る雨水や淡水化した海水を利用し、陸上と同様の農業として食料とバイオマスを得る方法、海自体に肥料をやって海藻を養殖する方法、浮力だけ与えて珊瑚礁をつくる方法、沿海砂漠地帯で海水灌漑可能な作物を育てる方法があります。

海藻の養殖にも浮きで固定した筏で天然種を育てるやりかたと、自分で浮くことができ

る海藻を遺伝子改良で新しく作る方法があります。制御しやすいかわりに地上の資源を消費する前者と、勝手に増えるけれど制御しにくく、深刻な生態系破壊の恐れがある後者のどちらがいいかはかなりの議論がありました。

後者の研究が進まなかった間に、特に汚染がひどい海域を中心に、筏やメガフロートと不足必須元素肥料、宇宙鏡からの日光を用いたバイオマス生産が発達しました。

それはここ二十年さらに規模を拡大され、日中米比の共同研究で建造された黒潮での海藻筏と人工干潟、人工マングローブ、人工珊瑚礁は周辺国の廃水と製鉄残渣、宇宙鏡を利用することで、沿岸とあわせてアメリカ合衆国の農業以上のバイオマス産出量があり、アジア太平洋のエネルギーの23％をまかなっています。メキシコ湾流、西太平洋、北大西洋でも本格的に稼動し始めています。

近年はバイオテクノロジーで先行するアメリカを中心に、遺伝子操作品種の浮かんで増える海藻も急成長しています。この技術は、深層水の利用とあわせ近い将来世界の持続可能なバイオマス生産を三倍に増やすと予想されています。

ネイの耐塩性も海水と淡水を同量混ぜればいいぐらいに向上し、完全海水灌漑までもう一歩です。

課題として、二十一世紀初頭当初において、当時の諸条件を考えつつ、海洋でのバイオマス生産はどうしていれば最もよかったか検討してください」

と、さまざまなデータがダウンロードされる。

「当時の人にとって一番大事なのは経済効率、金だ。当時の人の身になって考えるのと、今のやりかたで合理的に考えるのを並行してやるんだ。前に、鎌倉時代の地頭や豪農などいろいろな立場の仕事をやってみたのを思い出せ」

峰の兄貴が補足する。いろいろなミミズがのたくったような漢字ばかりの手紙を見、花粉などから当時の気候や肥沃度、当時ある技術や作物の種類まで考えて農業方針を立て、東大寺再建に寄付したり鎌倉に訴えたり親戚と小競り合いしたりするのは面白い経験だった。

「資源を使いたくないなら、空気の窒素を固定できて浮く遺伝子操作海藻を使うのが断然いいんじゃないか？」

「いや、それを開発すること自体と、除去のコストを考えろよ。当時の技術で」

「あのころのバカは除去のコストなんか考えないんじゃないか？」

「ちゃんと最善、現実、最悪の三つのシナリオを出せよ」

「浮きだけでいい珊瑚礁もいいだろ」

「今やってるように、薄いメガフロートで海水灌漑できる作物でもよかったんじゃ」

「肉やチーズにできなきゃ意味がないわ、まだお父さんはラクダがダメなのよ」

「当時の遺伝子技術の低さ」

「あのころは科学技術を理解しておらず、信じていない人が圧倒的に多かった！」
「教育史はおまえ得意だろ？」
「確かチェルノブイリ二十周年で」
「遺伝子改良作物に対する反対運動など、頑迷な反科学派が」
「今もいることはいるけどな」
「実際には」
「しっ、〝実際には〟どうなったかは当時の人は知らないし、その〝実際には〟が本当に最善だったかはわからないんだ。ケーコが発達するまでタイプライター由来のキーボードが使われていたことは知っているだろう？」
「今のケーコにも、標準で入ってるけどな古典キーボード（QWERTY）」

今日は船が遅れて体育に間に合わないので、別の形で運動の義務をこなさなければならない。

まあ学校でも居住メガフロートでも、楽しく運動の義務をこなすため、楽しめるよう配慮されている。ちなみに学校がある日は、幼児以来共通で国語や読書、理数、体育が毎日一時間ずつあるので、義務は自動的に満たせる。

学校でも運動で何をやるか自由な日もある。サンドバッグを殴ったり蹴ったり、木刀や

杖で柱を殴ったり突いたりするのはすっとする。もちろん海の特権で海で泳いだり、ボートを漕いだりするのもある。

選択単位や部活動で集団でやるスポーツもあるが、グラウンドには限りがあるので制限が多く、自然に待ち時間を懸垂などスペースを使わない単調な運動で潰す羽目になる。

昔は単調だったらしいランニングマシンも、ケーコをつないでおもちゃの銃、剣、弓などを手にすれば、恐竜に追われて走っては撃つなどいいゲームになる。

もちろん、そういうのはゲームセンターがもっとすごい――ゲームセンターは一時ケーコや繭の発達で廃れかけたが、カラオケおよびスポーツジムと融合した体感ゲーム中心になって復活した。

今は個室でプレイするのが主流で、入り口で床や天井、壁に無数のワイヤーでつながった特殊な服に着替える。体が軽くなる感じから、非常に重くなる感じまで楽しめるし、動きを精密に判断してくれるし、いくらダッシュしても跳んでもその場に戻ることになるので、狭いスペースでいくらでも暴れられる。

それで好きな武器を選んで存分に楽しむことができる。さらに好きなだけ声を出せるので、歌い踊ることを魔法にするゲームも多い。

また、ヴァーチャル・ハンティングは狩猟採集生活を体験させる授業にも使われている。数あるゲームでも、十年以上バージョンアップしながら世界中で愛されている「スター

ワイルダネス・ガンウエスト3」は二年前からオリンピックの正式種目にさえなっているほどだ。

もちろんオリンピックなどで使われる最高難度はとてもじゃないけどついていけない。銃剣つきライフルに加え3Gの重力と同じように引っ張られ、ハーフマラソンの距離をジャンプ、ダッシュ、坂の上り下り、梯子の上り下りの連発で走りぬき、時々水中並みの空気抵抗などもあり、さらに銃剣と射撃も高度なものを求められ、おまけにオペラ歌手の試験並みに歌呪文をほとんど歌いっぱなし、とどめに高度な数学パズルの要素さえあるのだ。

レベル5のクリアも今のオレの、大きな目標の一つだ。最近は新作の、流水プールで泳ぎながら戦う「ポセイドンの子供たち」や風洞室で飛ぶ感じを体感できる「イカルスの冒険」にはまっている。

まあ今は学校だから、とにかく泳ぐ。

学校が建つ大型メガフロートから少し艀で離れると、サメよけネットに囲まれた遊泳海域があるので、みんな次々に飛び込む。

「いいなあ、毎日泳ぎ放題なんだ」

と、岡野がつぶやいた。

「陸では野球とかが好きなだけできるんだろ？」

「んん、あんまり」

少し寂しそうな横顔――でも、つい薄手の水着から盛り上がる胸と、白い腕に目が行ってしまう。

「どこみてんのよ」

ビート板で、葉波に頭を叩かれた。こっちはまともに目を向けられないほどグラマーだ――ついこの間までおんなじガキだったのに。

「ほら！」

と、いきなり海に蹴りこまれた。そう何度もやられるか、と足首をつかんでこっちも海に引っ張りこむ。

みんなが思い思いに泳ぎだす。海生まれで泳げない者はほとんどいないが、苦手な子は上級者が何人かでサポートする。

教えるにまさる復習はない――誰でも少し下の子を教える義務がある。それが、一時世界から遅れた日本の基礎教育のレベルを高める切り札となったそうだ。

岡野を探したが、彼女はとても泳ぎがうまい――というか全力で泳ぎっぱなしじゃないか。大丈夫か？

「残念？」

また隣の葉波につねられた。

「由、また競争しよう？」
「ああ！」
と、二人クロールに切り替え、ペースを上げる。前はまるでかなわなかったのだが、最近は追いつけるようになってきた。
それがなんだか――あまり嬉しくない。なぜなんだろう。
第一、オレに抜かれると葉波がすごく悔しがって、しばらく口もきいてくれないし――もちろんわざと負けたらもっと怒るし。
なのになぜ競争したがるんだろう。

放課後、しばらくのんびりしていた――何人かはケーコでテレビや映画を見ている。皆が帰り、「おい、船出るぞ」
と、岡野に声をかけると――様子がおかしい。
肩に手をかけると、異常に硬い。服が冷や汗でじっとりぬれ、顔を拭くことさえも忘れている。
「きゃあああっ！」
いきなり、彼女が悲鳴をあげてものすごい力でしがみついてくる。
オレも、あのときの恐怖を思い出して呼吸ができなくなる。

が、手に恐ろしく暖かい感触――葉波が、オレの手をその最近やたらとでかい胸に？
あ――そうだ、ここは安全なんだ――
「ああっ、廃墟、廃墟……何もかもが崩れる、死――死！」
岡野が叫ぶ。
「何を見ているんだ、目を覚ませ！」
「まさか、体に埋め込んだケーコが暴走して？」
そうか――もしエンドレスでホラー映画が流れていて、現実と区別できなかったら！
「どこだ、外部ユニットはないのか……」
「だめ」
と、葉波がオレの目を手でふさいだ。ああ、服を脱がせて体を探るのは女じゃないと。
オレは目を閉じ、岡野を抱きしめる。華奢で柔らかいのに引き締まっている。
「あった、電源は」
「ちょっと待て、もし生命――メーカーに連絡を取るんだ」
「そうね、ちょっと待って。はい、……そうですか……」
そのあいだにも、彼女がオレを締めつける力はますます強くなる。骨が折れそうだ。
「ああ、死ぬ、腐る……ああ、腐った水……死体でも食いたい……人が人を……食う……ふくれた死体が、風船のように破裂して……伝染病が、腐肉に群がる――」

一体、何を見ているんだ？　これ――

「助けて、違う！　夢よ、こんなの夢！　悪い夢！　今の世界は、もう何年も誰も餓死していない！」

まさか。

「そんな、夢じゃない……」

やっと、葉波が電源を切ったようで、女の力が抜けて――

目を開けると、半裸の――首筋が痛々しく日に焼かれて赤い、服に包まれた部分は透き通るように白い肌。

その黒い目が、徐々に光を取り戻していく。

「あ、あ――」

「岡野！」

「えま！」葉波がぎゅっと、彼女の手を握った。

「あ――」

あまりにも強い恐怖。なら――オレは彼女の手を、彼女自身の胸に押しつけた。

「どうだ……生きているだろう？　脈打っている、お前は生きているんだ！」

「夢じゃなくて？　夢じゃなくて？」

「現実だ！」

ふっ、とその体から力が抜ける。

「入っちまったのか、『何もしなかった未来』に」

そう、オレたちも何度となく見せられた教育映画だ。オレも悪夢は何度も見てる。

もし、二十一世紀初頭――それ以前からの運動が実を結んだのでもあるが、〝選別をせずに持続可能文明に転換する〟道を選ばなかったら。全世界最低生存保障とエネルギーの転換、持続可能な食糧増産の模索に舵を切らなかったら。円卓がなかったら。温暖化などがひどかったら。

恐慌と資源の枯渇、気候変動で社会が崩壊し、世界のほとんどは飢餓と疫病、戦乱で――普通の都市が、はじめはただの不況だと思ったのがあっというまに飢えに襲われる――飢えて武器しか持たない難民の、ゾンビ映画みたいなのが街を、国を飲み込んで全てを破壊していく――見せられたのを思い出しただけでぞっとしてしまう。

緩慢な飢餓が続くことで法は崩壊し、そこで不安と不満が敵を求め、民族虐殺（ジェノサイド）はもちろん魔女裁判のように些細な密告でも残酷な私刑が起きる。

数十億の死、地球全体を覆う近代文明の崩壊は想像を絶する。地球が死体で埋まる――皆が飢えか伝染病か殺し合いで死んでいく、アメリカやヨーロッパのごく一部の、核も毒ガスも細菌兵器も遠慮なく使って他者を締め出し、油田と井戸を確保した要塞帝国以外は。

あまりにも多くの死。地球を覆う不潔と破壊と飢え。――そう、文明なんてバッタの大

発生（日本語ではイナゴの大群と言うが、蝗害現象を起こすのはバッタ）と、数年と数百年の違いしかない、どちらも地質学的には一瞬――緑を食い尽くし自分たちも死んで、地を骸で埋める――一人一人に名前と人生があって、それがバッタと同じただの死体に変わる、それが何十億――

「ケーコが暴走して、繰り返しあれを――まるで、今の生活が夢だったように……」

「言わないで、思い出す必要はないわ……人間は切り抜けたのよ。人間は賢明な道を選んだの」

「うそよ！　人間みたいなバカで邪悪な種族に、こんな道が選べるはずが――」

くそ、

オレは彼女の、半ばむき出しの胸をつかむように触った。

「あ――」

「――な、に、すんのよっ！」

蹴りが頭を直接襲う――

「ね、えま、夢じゃないでしょここは――」葉波が岡野と目を合わせてから、こっちを向く。「由……」

「悪夢よ！」

と、葉波と岡野、両方の足が上から顔に向かってきて――岡野は赤、葉波は青いストライプ――気がついたら船の上で、帆桁端（ヤーダーム）から逆さに足首を縛られ吊るされていた。

もちろん、すぐに吐いたのが鼻に入って――それに頭に血が――た、助けて――

かろうじてナイフは――ある、左手で縄につかまって足首の輪を切って、それから登れば――できるか？

やっぱりあいつの脳直結ケーコ、欠陥品だ！

「さて、今日はメガフロートを下から見てみようか」

このあいだと同じ、オレと岡野、葉波と春おじさんでメガフロートの埠頭から人魚で海に潜った。

もちろんメンテナンスのついでだ。

「え……」

ソナーの描く像に、彼女が驚いている。

水面下十八メートルもの、下が見えないほどの深さがある。そしてその下は――

「由、気をつけて」

「わかってます」

「はい、だ。ちゃんと注意と敬意を払っていることを言動で示せ」

「はい」

ここは、メガフロートの縁の波力発電ユニットでかなり流れが不安定だ。その流れの恐

ろしさはついこの間、生身で味わっている。
「ほら、ここが波力発電ユニット。外洋からの波を受けて、ここで必要な電力の八割はまかなえてる」
ゆっくりと沈んでいく。ひたすら目の前は、海藻や貝がびっしりつき、珊瑚が育ち始めている壁。
「どうなってるの？」
と、岡野が目の前の壁を指差した。
そこにライトを当て、ふっと近寄って鼻で体を固定した。
「この壁は非常に複雑な形に、わざとしてある。岩場を再現して、魚の隠れ場を確保しているんだ。これだけでこの周囲はかなりたくさん魚が暮らせる。潜るぞ」
「こんなに水面下に、何があるんですか？　春さん」
わざわざオレを無視するなよ――
「貯水設備さ。亜熱帯海洋気候のここはかなりの雨が降る。それを、上の太陽電池幕で受けて海面下に貯める」
と、春おじさんが説明する。
「ほかもそんな感じなの？」
「そう！」

ちょっと不機嫌に葉波が応えた。
「そろそろ底が見える――少しは、立体音響に慣れてきているか？」
「ケーコの世代が違うのよ、最新型よ」
つっけんどんな口調でいう。
「欠陥品だろ」
「うるさいわね、海が異常なのよ！」
「バカか、そんなの体に埋め込むな」
「こら由、運転に集中しろ！」
春おじさんの怒鳴り声にちぢみあがる。あの人が本気で怒ったら……ぶるる。
「オレがわるいのかよ！」
「いつもわるいのは由」
葉波の言葉にがくっとなり、そのままメガフロートの底にもぐる。
「うわぁ――」
すばやく操作して、映像を光増幅して音響定位映像を重ね、注視部の距離表示をオンにする。かなり暗くなるけれどはっきり見えるようにして、ぶつかりそうになったらわかるようにした。
メガフロートは、上では単なる板、平らな陸地にすぎない――だが、水面下には壮大な

構造物が隠れているのだ。それも珊瑚の生長で日々変化する。
ブロックごとに巨大な球の下半分。貯水場だ。
その下に柱でつながれた三段の巨大な板。海中の板には無数の穴があり、メガフロート自体よりかなり広くなっている。
「な、なに？」
「あの球は貯水場、板は擬似的な海底を作って、海底で暮らす生物の楽園になってる」
オレの説明を聞いているのか、ただ呆然としていた。
彼女の目には何が映っているのだろう——最新型ケーコはどんな情報を、脳に直接流し込んでいるのだろうか。いいな——いや、あんな欠陥品、頼まれてもいらない。
「赤道直下ではもっと貯水場が大きいよ。雨の量の桁が違う、降雨だけで水田稲作が二回といろいろ一回できるぐらいなんだから」
オレの言葉を聞いていないようだ——ひょっとして、言葉をシャットアウトしているのか？
とん、と手を軽く叩いた。
「な、なによ！」
びっくりしてこっちを見る。ち、近いよ——意識してみると、すっごく——
「あ、あの……なんだ——」

うわ、——混乱して——まっすぐ目を見るなよ——
「由っ！　危険だから、普通の音や映像をシャットアウトしちゃダメよ、えまちゃん」
葉波が代わりに言った、妙に刺のある声で。助かった——
「さて、ちょっと底のメンテナンスもしておくか」
と、春おじさんがぱっと他の人魚に合流する。
「ここは原則禁漁、魚のいい産卵場になっているから。でもちょっとは掃除しないと、どんどん重くなって沈むからね」
「穴抜けるぞ、舌かむなよ」
「あぶな——」
春おじさんの声を無視し、するっと腕を振ってペンギンのように隙間をくぐった。
なんかちょっと気になった——今、春おじさんと葉波は狭い人魚で、こんな感じに密着しているのだろうか。
おば——おねえさんに言ってやろうかな。

6

ひたすら飢餓と伝染病、原始的な戦争。廃墟。砂漠と荒野。
それが、いつしか別の夢になる。
巨大な、工場のような研究所。
無数のラット、シャーレ、試験管、いくつものビルを埋める当時最強のコンピューター——巨大光子コンピュータと量子コンピュータ、パソコン数十万台の複合体。
若い美女が白衣を脱いで震える手の注射器を見つめ、自分の腕に刺してゆっくりと透明な液体を注入する。
それから優雅なドレスに着替え、空の旅を愉しむ。猥雑な空港。カイロ、ニューデリー、シンガポール、上海、成田——
一年後、人々が一斉に、苦しみもがいて死んでいく。全身に赤と黒のできものを浮かべ、高熱に錯乱して。
世界中で。**白人以外すべて**。

アメリカでも黒人やアジア系、混血のヒスパニックが、もう白人より増えていた人たちが次々に死んでいく。
ＮＢＡの試合が中止された。

あ——夢か。よかった。あらためて、円卓騎士団に感謝するな。くそっ、岡野があんなことになって、つい同情して葉波と『何もしなかった未来』、ついでに『円卓の騎士たち』を見ちまったから——
もうすぐ夏休み。その前に稲刈りと期末。
本土では稲刈りは九月ごろだが、亜熱帯のメガフロートでは三月下旬に田植えをして七月には収穫できる。
「もう、飛行機とっとく？　父さんのところに行くんでしょ？」
オフクロが聞いてくる。
「ああ——」
どうしようか。やっぱりゴビ砂漠でオヤジを手伝うか、ずっと見てきた防風林がどんなふうに育っているか——
でも、僕らは緑前線を進めるだけで、一年中毎日面倒を見るのは現地の人だ。
あそこのように環境、交通に恵まれていない地域では自給自足と緑の維持を優先、具体

的には大きな地域全体の半分は森に、そして残りの農地も木をたくさん植えて燃料や肥料、金になるものを確保する、という原則は守られてるだろうか。

原則自体は正しいけれど、現地の人たちと触れあってみればその格差を、どれほど彼らが不満に思っているかは伝わっているんだ。

しょせん子供は足手まといだ、と最近ようやく分かってきた。あっちの、まだ貧しいところではまだ子供が労働力になってはいるけれど。今年は少しはものの役に立てるだろうか――

「おはようございます」

相変わらずどこか他人行儀に岡野が――うわ、トレーナーが汗に濡れて、肌にくっついてる。

「由、あっちで食べてなさい」

「だいっきらい」

「お兄ちゃんのスケベ」

余計なことを言う美香の頭を軽くはたいた。今朝は煮魚と海藻汁と……

先生が来る前にテスト勉強で先週の復習をまとめていると、ふとなにかひっかかりを感じた。

あの太陽電池の、いつも見ている柱――発泡コンクリートの断面――

「〝泡を正四面体を集めた構造に〟」

録音の一語に、何かがおかしい気がする。

そう思っていたら、もう授業が始まっていた。

「EUは、地中海周辺から中東にいたる、古代文明のせいで砂漠化した地域の緑化に力を入れています。最大の問題であった若年失業者を振り向けることで、社会不安を解消する努力がすすめられ――

「まずEU内部の緑化で当時若者の30％を越えていた失業者に植林、緑化、アグロフォレストリーの素養を学ばせ、後にギリシャ、アルバニア、トルコからイランにいたる広大な地域を緑化――

「ユダヤ、キリスト、イスラム三大宗教が協調し、文明が破壊した荒野を緑に変えるという思想は多くの反対がありましたが、円卓騎士団事件をきっかけにローマ教皇が――

「アフリカ大陸全体について、EUが大きな責任を持つことになりました。そのかわり大西洋に多くのメガフロートを建設する権利を得て、それは今EUの汚水処理、食糧、バイオマスエネルギー増産に活躍――

「北海、バルト海全域に二十四時間日光が宇宙の鏡から与えられています。それは生物生産量を五倍に増やし、二酸化炭素を吸収すると同時に産業革命以来の膨大な汚染の分解に

寄与して――

「EU北側の海の栄養は飽和しており、メガフロートを用いた下水処理は非効率的です。日光を追加して海藻と貝を養殖するのが優先され、また大河流域のあちこちに、大規模な水質浄化用の湿地を回復させ、そのバイオマスを有効利用して――」

――授業を聞きながら、頭の中では何かが形になれずにいる。

夜、感じた引っかかりを考えてみた。何だろう。

「由、由？」

あ、うわ！　至近距離で葉波がのぞきこんでいた。目がぶつかりそうで、心臓が跳ね上がる。

「どうかしたの」

その瞬間、わかった。

パズルのピースがぴったりはまった、いやはまらない。

頭を抱えて想像するが、それではもどかしい、何か言ってくる葉波を押しのけ、机に飛びついてノートを二、三枚引きちぎる。うーっ――あ、コンパスと定規で正三角形は作れる。

自分の繭に飛んでいき、ドアを開けるとそこには岡野がいた。

「悪い、コンパスと定規」

「え、え」

強引に手を突っ込み、奥の壁の棚を探って文房具をあさり、そのまま机に引き返す。

呆然としている葉波を無視していくつか、もどかしい手で正三角形を作る――、切って正四面体をいくつか作る。はじめはまだるっこしかったが、大きい正三角形を作ってから各辺の中点をとって結べばそれも展開図になることに気がついた。

正四面体をいくつか組んでいくと――やはり！

「あれ」

葉波も気がついたようだ。

「ほら、正四面体じゃうまく組み合わさらないんだ！」

思わず、葉波を抱きしめていた。

「ちょ、ちょ――」

「いや、ちゃんと証明しなくちゃっ」

と、また繭に飛んでいくと、まだ映画を見ていた岡野を強引に押しのけた。

「な、なにすんのよ」

「悪い、ちょっと使わせてくれ」

「わたしの……いや、そうね、でもこれが終わるまで」

「待てない！」
岡野を抱え上げて外に下ろし、そのまま繭に入りこむ。ええと、これに関して――ああ、確かおいらの証明だっけ、正多面体が5つしかないのは角度が、だから――ネットで調べてみるか。面同士の角度は、そういうことか。うわ、情報が多すぎてよくわからん――正四面体を縦に切れば――ああ、索具（リギン）を思い出せ。ロープと滑車（テークル）が――

「由！」
強引に繭が開けられた。
「葉波？」
あ――くそっ、徹夜しちまった。ケプラー予想か――軍艦の砲弾から生まれたとはな。くそっ、もっと前に生まれていたら。
「もう学校よ、早く！　そろそろ期末でしょ……やっと勉強してるの？」
う、忘れてた。『人間は忘れたいことを忘れる』とコンピュータ、うるさい。
「また、えまちゃん泣かせたでしょ？」
「え？」
「え、じゃないわよ！　強引に下着で寝てる女の子の繭に手を突っ込んで！　それから引きずり出したって？」

「あ――」
そんなこともあったな。人の繭を勝手に開けるのは――いや、元はオレの繭だぞ。というか下着姿だったんだ！　もったいないことをした。
「おばさんに言われたわ、かわりにしっかり叱っといてね、って」
「え」
「いい、えまちゃんがどれだけ気を遣ってるか、心細いかわかってる？　最低。あんたは守ってあげる立場でしょ」
「あ――」
それどころじゃなかったんだが。
「それに、女の子の繭を勝手に開けるなんて、スカートめくりよりたちが悪いんだから！」
「悪かったな、久々にめくってやろうか？」
手を動かすと、葉波は冷ややかに微笑み――悔しいが見とれてしまう――
「いいわよぅ、どうぞごえんりょなく。ほれほれ」
と、ぎりぎりまで自分でスカートを引き上げて――たまらずそっぽを向いてしまった。
勝てない。

「さて、今週はメガフロートがどこにあるか、地図で見てみましょう。
まず日本の近くから。最初にできたのは東京湾と大阪湾で、港湾・工業・娯楽施設としてです。それらの用途もかなり重要で、現在もニューヨーク沖に世界最大規模のメガフロート群が建造中です。
そして総合エネルギー・下水処理の人工干潟・海藻養殖型が野島崎沖など、黒潮にそって多数あります。
沖縄ではエネルギー・農業複合都市型も多いのですが、米軍基地としても数多くあります。そもそもメガフロート自体、米軍基地の受け入れ先として発達した面が」
『由』
葉波からテキストメール。どこにどんなメガフロートがあるか、毎日船で通っているオレたちは先刻承知。
だから、今はひたすら昨日の続きをやっていた。
『なに？』
「他に中華連邦、韓国、フィリピンも主に日本と共同で、北西太平洋各地に多数のメガフロートを作っています。皆さんはご存知だと思いますが、日本の領海は地球儀で見るとこんなに広いんですよ。
北太平洋は元々好漁場が多く、増やす余地は少ないのですがアメリカ・カナダが外洋海

藻養殖場を作っています。
赤道付近は名義は島嶼諸国、実際の建造・管理は日本で水田稲作・合鴨魚複合型が急速に増えています。わたしたちのメガフロートと同様にアゾラの空中窒素固定能力を利用し、合鴨や魚に雑草、害虫を食べてもらいます。低コストの人工珊瑚礁や、マングローブや塩生植物をラクダに食べさせるところも多いです。
南太平洋ではイギリス・オーストラリア・ニュージーランドが中心になってみなさんと同様のエネルギー・総合農業複合型を主に――」
『由、夏休みどうするの？　あのさ』
「インド洋ではインドが中心になって赤道周辺に、水田稲作・合鴨魚複合型や人工珊瑚礁がかなり作られています。南インド洋は現在未開拓の外洋ですが、高緯度の南氷洋は鉄と珪素さえ供給すれば光合成が増えるので、メガフロートこそ少ないものの海藻養殖設備が大量に造られており、世界のバイオマス生産の――」
『今話しかけないでくれ、勉強中』
「北大西洋はEUが主で、娯楽・産業型が多いです。海藻養殖も大規模ですね。北アフリカ沿岸でEUの汚染処理メガフロートが数多くあり、南大西洋は主にブラジルがラクダを大規模に飼育しています。メキシコ湾でも汚水処理マングローブ・海藻養殖設備が多数あり、水深を浅くし、宇宙の薄い鏡から日光を添加することが広域化してから、問題とされ

ていた富栄養化が逆に膨大なバイオマスエネルギーをもたらしています」
『何の勉強？　音楽？　美術？』
オレはもう答えなかった。やることが多すぎる。
「再来週から期末テストです。がんばってください」
授業が終わるのももどかしく、先生に聞いた。
「先生、正四面体では空間を覆えません！　ピラミッドが必要です！」
「あら――あ、ちょっと待って」
わたわた、と先生は机を探り、小冊子を差し出した。表紙の、軌道エレベーターの予想図や冒頭の帆船写真に目が釘づけになる。
「長谷川君の受けている授業は――そうね。もし自分で気がついたのなら、よかったらこの講座を受けてごらんなさい」
基礎数理工学夏期特別講座？
「天分があるのよ、理科や数学の成績も抜群だし。ちゃんとした証明については――そうね、大内先生に聞いたほうがいいわ。メールでアポ聞いてみるから」
「え――」
「そして、発泡コンクリートは自然がエネルギーを最小にしようとする力のおかげで、それぞれが少しだけ正四面体からずれて組み合わさることで、充分に強い構造を作るのよ」

「どうしたの由、次の授業始まっちゃうよ」
「ほら、行きなさい。期末テストの勉強、しっかりね」
……
さっき渡された講座についてケーコで見てみる。
本土で夏休み中、生存公役も免除で徹底的に数学、理科、工学の特に深い基礎を学ぶらしい。
受講に必要な単位と成績もかなり高い。数学はなんとかなるが、期末で英語をちょっとがんばらないと。
いや、何が悲しくてわざわざ勉強しなきゃならないんだ？　オレは将来、船乗りか農業か緑化事業か――
それだけだろうか？
軌道エレベーター計画が始まるのに。
木星や水星、冥王星やアルファ・ケンタウリだっていけるかもしれないのに。
「由、あの」
「なあ」
「え？」

風がぶつかり合い、裏帆を打って帆桁（ヤード）が震えた。
「これ、どう思う？」
出したパンフレットを見た葉波の表情が凍りついた。
「え、それ受けるの？　まいったな」
岡野の声がデクレシェンドする。
「えまちゃんも？」
「うん――」彼女の顔がはっと変わり「あ、でも、違うからね！　こいつが受けるなんて知ってたら、絶対違うクラス」
「わかってるわ」
と、葉波がなんだか寂しそうに。
「う、この――バカ！」
岡野がオレを、憎々しげににらみつけた。
「由」
葉波の、とんでもなく迫力のある声に、つい直立不動になってしまう。
「それを受けるなら、本土までの船で航海術実習をついでにとれば便利よ」
口調は穏やかなんだが――でも、その通りだ。往復で二週間みっちり実習でき、船賃もただになる。

「ずっと……せっかく――」
葉波？
それっきり、葉波は向こうに行ってしまった。岡野も、オレと眼をあわせようとしない。

「風、強いね」
岡野が外を見上げた。
「えまちゃん、今日は学校に泊まるよ」
葉波がちょっとケーコをいじり、空を見上げた。
天気データを見るまでもない――この間のオレと同じ基準なら船は出せない。かなり大きくスピードのある台風が接近している。
「へえ、そんなこともあるんだ」
「よくあるわよ、あたしたちは大体泊まる部屋が決まってるけど――いっしょでいい？」
「え、いいの？」
なんだか、岡野が葉波に借りがあるような目をしている。海では借りは早めに返したほうがいいんだが。
「今日は帆走だけで帰るぞ、気合入れろよ！」
ドラ声が響いた――うわ、今日の帰り、三本マスト大型船で船長は春日じゃないか！

最悪。『考えないようにしてただろう』と、常駐ソクラテスの一言。
「うそでしょ？　あたしなら船は出さない――あ、カスが――」
「他の学校船も出てないぞ」
「運が悪かったな、死体が出れば上等だよ」
ざわつきながら岡野たちおかもの、航海術コースを取っていない連中を船内に収容する。
だが、かなりの、ある程度わかっている子は乗船を拒否して学校に泊まることにした。
オレもできたらそうしたいよ――と呪いながら、必死で重い円材を持ち上げ、はめこむ。
「当直員は艦尾甲板に集合！　整列、直立不動！」
春日――本当は一つ上だから、先輩をつけるべきなんだがつけたくない――が、嬉しそうな表情で勤務表を発表した。
「木村、シグナル・ハリヤード、左舷。長谷川」
「はい」
胸がむかつくが、今は奴が船長だ――
「メン・トップヤード、右舷直」
「はい」
「アイ・アイ、サーだバカモン！」
いきなり蹴りが飛んできた。何がアイアイサーだ、そんな慣習ここにはねぇぞ勘違いし

やがってこの――他の誰にも同じようなことは言ってねぇじゃねえか――
「アイ・アイ、サー」
「声が小さい！」
「アイ・アイ、サー！」
「もう二十回！」
「アイ・アイ、サー！　アイ・アイ、サー！――」
「声が小さい、三回メンマスト上り下り！　全速！」
「アイ・アイ、サー！」
唇をかみしめながら、固くもやわれているのに激しく揺れている、伸ばす手も見えない嵐の中を必死で駆け上がり、駆け下りる。マスト・トップが埠頭にぶつかりそうになる。
心臓が爆発しそうになる――なにくそ！
下りる一瞬、無表情を保っている葉波と、客室に入ろうとしている岡野が見えた。
その表情が目に焼きつく。イルカのような――
「そのままヤードにつけ！」
春日――今は船長の声が響く。
くそ、オレが何をしたってんだ！　前もひどかったが、あのときは凪だった――
風で顔がゆがんでいるのがはっきりわかる。まだ五時なのに空が暗いぞ！

オレが出なかったときよりやばいぞこれは――

峰は錨索（ケーブル）からメン・ハリヤード、葉波が機関次席――くそ、せめてどちらかが舵を取っていれば。

金さんと安里以外最悪なメンバーばかり中心に、こりゃ凪でも沈むな。

と、思ったらいきなり、

「大横帆（コース）展帆！」

冗談じゃねぇぞ！　今の帆は昔と違って、強靭すぎるからたちが悪いんだ――

鉄板ロールのように固く巻き締められているのに暴風にもぎとられそうだった帆を、歯を食いしばって――少しずつ、だましだまし――

「何やってるんだ長谷川、一気に開け！」

ふざけるな、帆がどうなると思ってる、オレに吹っ飛んで向こうの校舎に首から突っ込め、と？　船を転覆させろと？　だが――

船では無条件に服従しなければならない。しかし、船の安全だって――うわあっ。

恐怖に歯の根が合わず、気持ち悪くて気を失いそうなのに耐え、げろをかみ殺しながら――風が一瞬緩むタイミングを計り、鋼の鞭のように跳ねる作業端をつかみ、一気に引く。

そのとたん、爆発音がして船が大きく傾き、帆桁端（ヤードアーム）が海面に触れそうになった。船が砕けたか。

同時に、すさまじい力がオレを帆桁（ヤード）からもぎはなそうとする――足が足場索（フットロープ）から外れ、左手一本でぶら下がる形になる。体が砕けたか。

かろうじて体勢を立て直すと、船が恐ろしい勢いで横にずれ、左右に激しく、不規則に揺れながら埠頭にぶつかりそうになる。

おかものよりたちが悪いぞ、中途半端に航海術をわかってるつもりで何をわかっていないか考えたことがない、サドのクズは。

船が沖に無事に出たのは奇跡、いやオレも含め何人かが、微妙な命令違反をしたからだ。

暴風はますますひどくなり、船は今にも沈みそうな、危険な縦揺れ（ピッチング）をしながら倒れそうな詰め開き（クローズホールド）で風に逆らい、また船首をおとして脇腹を波に殴られ、ふらついて船尾を波に食われる。雨だけで沈みそう、波に甲板が洗われる。どうみてもぶざまな動きだ。

一時もマストから降りることを許されないオレは、船がどこにいるかも知らなかった。もう吐くものなどないし、それどころじゃない。ケーコに触れる暇などなく時間もわからない、暗黒しか。

次の大波と突風に――いっそ、命令に従うだけの機械になっちまったほうがどんなに楽か。だが――またカスが、上手回し（タッキング）のタイミングが――くそ――

たのむぜ、峰、金さん――二人がかろうじてタイミングを修正しているのが、帆脚索（シート）から伝わる。葉波が船長か、せめて操舵長（コーターマスター）だったら！

「長谷川、なにをしている！　さっさとそのロイヤルを展(ひろ)げろ！」
本気で船を沈める気かよ。もう真夜中で服が風をはらんで、空を飛べそうなのは慣れてるからいいが。
「遅疑や反問は許さん、実行しろ！」
死ぬのか――みんな――
「そこまで、緊急事態発令、実習中止！　メン・トプスルを縮帆(リーフ)して下りろ！　機関半速！」
やっとだ、監視員の木村さんが声をかけてくれた。
オレは手早く縮帆をすませ、がっちりと留まっているのを確認して後支索(バックステー)を滑り降りた――また、甲板口(ハッチ)から顔を出している岡野と目が合った。
ばかな、閉めろ！　海水が流れ込む！
「春日。君を船長から解く、長谷川と交代」
え、オレ？　こんな状況で？　今日帰路の副長は金さんでは――
「学校側と連絡は取った。できたらこのまま、荒天帆走訓練を続けてくれると助かるのだが？」
う――おおっ、
「はいっ！」

オレはできる限りの声で叫ぶと、
「機関微速、ミズン・トプスル二段縮帆！　ゆっくり、当て舵少々、左舷二人メン・ハリヤードにつけ！」
矢継ぎ早に指示を出す。とにかく船を安定させ、風に向かわせなければ。エンジンを切って帆走に切り替えるには――
「楊、海図と現在位置！　エンジンそのまま……ゆっくり下げて」
現在位置はここか――エンジンうまく下げろ葉波、好きだ――信じてる。
「舵戻せ、針路このまま――ジブ、上手回し用意！　風上下隅索(タッック)」命令しようとした瞬間、直感で吼えた。「取り消す！　総員体を固定！　取舵いっぱい、機関全速！」
「機関全速！」
「取舵いっぱい！」
甲高い声。波しぶきで視界がきかない目の前に、突然塔のような三角波がそそり立つ。
斬れるか？　きわどいところで推進力が効き、鋭利な舳(へさき)が波の裾を切り開き始める――胃袋が、いや意識しちゃいけない――ぐっと傾いた船体自体が、風を受けて三角波に押しつけられる。
一瞬宙に浮いたような、甲板が壁のように傾いて――くる、ショック――きた！　転げ落ちそうになった誰かをつかまえ、手摺りに押しつける。

手摺りに腕を絡ませ、甲板を膝まで洗う余波にかろうじて耐え、
「舵戻せ、機関停止！」
もうエンジンは危険なだけだ。
「面舵少々――いっぱい！　戻せ！」
船体がずれた背後で、間一髪波が立つ。船首が落ち、風を受け波を追い越す状態になる――危険だ、早く――焦るな――
空と海がきれいだ、何も見えないけど。不思議と笑みが浮かぶ。
まだだ――まだ、ここで――
「金、メンスル一段展帆！　フォアおさえろ、もうすぐ峠は越える、気合入れろ！」
「おおっ！」
皆の、腹の底からの声が響く――見回す、全員無事だ。
心臓がつかまれる感覚を抑え、一瞬空が見えるが、その分風が荒れる空と海を再び見つめる。一面のしぶきに視界をふさがれる。そろそろ次の雲に入る――安定するはずだ。
「面舵もう少し！　帆脚索（シート）少々――よし、取舵」
やっと風とつきあえるようになってきた。波も、危険な三角波は――今だ。
「まわすぞ！　優しく逃がせ、舵気合入れろ！」
「おうよ！」

操舵手の安里、声変わりでかすれた声。
「機関微速前進、転桁索（ブレース）気を抜くな、――」
ぐっと前が上がって――のりこえた、一瞬風が強まり――波が船首を押してくれる。
「ヤードまわせ！　面舵一杯！」
「面舵一杯」
ふわっと、船が回った。
「舵戻せ、メンコース少し絞れ、ジブ用意！」
ここで油断しちゃだめだ、気力を振り絞れ！
いやというほど傾いて詰め開き（クローズホールド）、ここで気まぐれ波が一発来たら――目の前で波が弾ける。しぶきがシャワーのように注ぐ。ジブのすさまじい力が、巨人の手のように船首を風に向けて押す。船体が、バウが悲鳴を上げるのがわかる。
大丈夫だ、いい舵――最高だ――風と波に乗るようだ――最高だよこいつら、この船、海と風と波――
「このまま南硫黄島九番に向かう。針路北北東、取り舵少々――よし、メン・トップマスト・ステイスル展（ひら）け、ジブ縮帆！」
風が味方になり、鋭い舳が波を裂いて船が安定する。ここで気を抜くな、また三角波が来る――真っ黒で、ところどころ青が交じる空――

「だいじょうぶ？　嵐の長谷川、って呼ばれてるんだって？」
なんとか最寄りのメガフロートが見えた頃はもう朝、台風一過のいい天気が広がっていた。トビウオが脳天気に飛んでいる。腹がきゅるっと鳴る。
「それ、やめてくれ」
岡野に答える――船室で誰かに聞いたのか。
まだ波が残ってはいる。ここからが危険だ、メガフロート群の海域は海面下施設が縦横にあり、ブイを一つ見逃しただけで――ブイが一つなかっただけで終わりだ。一応李に交代したはずだが、甲板を離れて寝るわけにはいかない。
第一眠れる訳がない、この横揺れ（ローリング）――船酔いで。
「まだ出るな、港に錨を入れるか繋留するまで危険は続いているんだ」
「錨？」
「メガフロートの周りにはよけいに底がある。船着き場には錨を入れられる」
「そう、もうこんなに天気もいいから、ちょっと上がらせてよ」
「いいから、今はオレが船長なんだ――船長命令は絶対だ」
「だからあんな、めちゃくちゃな命令にも従ってたの？」
「ああ」

「バッカじゃない？　それで自分が死んだり、船が沈んだら」
「その話は後でする、峰！　船客を船室に」
「はい、船客を船室に収容します」
峰が岡野の腕を取り、連れて行った。
何か言いたそうだったが、無視。
確かにめちゃくちゃだった。オレも、岡野も含め船のみんなも危険にさらされた。
だが――規律と服従がない船は、ずっと致命的なんだ。まあ、あいつは二度と船長はやらないだろう。向き不向きが早めに分かるのは幸せだ。
灯台と大風車は見えているが、まだ波が荒く風も強い――今港に入るのは賭けになる。
だが、みんなの体力も限界だ。オレ自身も。だが――葉波と漂流したときは、もっとひどかった。まだいける。
「よくブイを見ろ、波の異常も！　オンライン海図（チャート）もブイも絶対じゃないぞ！」
声をふりしぼる。風をよく見て、なんとか無事に入港しなければ。訓練にはならないが、帆をたたんでエンジンを使うか？

7

大きな船。船長は？　オレは――持ち場は？
船が一気に傾き、甲板が壁のように――オレは滑り落ち、右手で間一髪何かにつかまる。
そこに、二人滑り落ちてきた。
葉波と岡野。
どちらかしか助けられない――どっちを？
オレの手が伸びる。

はっ、と目が覚める。
全身が冷や汗で濡れる――なんて夢だよ。
ハンモック。筋肉痛が全身に走り、頭が重い。
そうだ、嵐の海から船を指揮して南硫黄島のメガフロートに避難し、何とか入港して――

今何時だ？
丸一日半ぶりにケーコをつけると、もう一八四〇。といっても、寝たのは一一二〇は過ぎていたはずだ。
腹減った。寝る前に少しだけ牛乳を飲んだが、ぜんぜん足りない。
集まっている簡易宿舎にいくと、みんな大体起きて食べ終えていた。ケーコに没頭してるのもいるし、雑誌を読んでいるのもいるし、しゃべってるのもいる。
みんな食われてるかなと覚悟していたが、葉波たちがちゃんと取っておいてた。
「あれだけマストで頑張って、一休みもせず船を動かし続けてくたくただろ？　この餃子も食え！」
「このチャンプルーも元気出るぞ！」
「さすが〝嵐の長谷川〟！」
「ありがと、おかげで命拾いしたわ！　長谷川君に交代するまで死ぬ覚悟してたの」
「やっぱここのメシはうまいよ、もっと食えよ！」
とどんどん詰めこまれた。
南硫黄島メガフロート群には沖縄系、韓国系が多いから、食べ物も日本食から離れている。でもおいしい。そういうのを安里や李の家でご馳走になることもあるけど、うまい。どちらも雑穀や海産物、肉をうまく使ってる。

でも岡野に言わせると、

「ここだけじゃない、海の食べ物って――うちの食事も給食や学食も、本土とはぜんぜん違う変なのよ」

「悪かったな――好き嫌いは食べ物がなくなって四日間、一度の雨だけで過ごしてから言ってくれ」

「由、バカを自慢しないの。おいしいんだけどな」

葉波はちょっと恥ずかしそうだ。あれ以来オレも葉波も、（オレは船酔いの時以外）何も食べ残せなくなってしまった。

「ううん、おいしいよ。でも――食卓の調味料から違うの。ここも、うちや学食も塩、普通の醤油、これ――」

「魚醤（ニョクマム）。魚を発酵させてるの。東南アジアで使うわ」

「韓国でも、実は古代ローマでもね。醤油よりずっと歴史のある調味料よ」

「それに、この唐辛子味噌（コチジャン）」

「中国でも似たようなのがあるわ」

「と小エビの塩辛に酢でしょ？　本土では醤油とソースが主で、塩コショウ、化学調味料、七味、あとラー油と粉チーズがよくあるわね。ここの組み合わせは――ちょっと調べさせて――やっぱり中華、韓国料理店、それも日本人向きじゃない本格派よ」

「本土ってそうなってるんだ――メガフロートはアジア中、いや世界中からだし、素材がいいからね」

メガフロートには失業対策、移民先という面もある――そうなると少子高齢化の日本より、元々人口が多いアジア各国からの移民が多くなる。日本領海では日本語中心で補助的にニュイン、だけは一応守られてるけど。

「でも、ちょっとそれぞれの故郷とも味が違ってるんじゃない？」

「まあね。オヤジは最近外食するたびに伝統の味じゃない、って文句いうよ。でも寒い韓国と、この暑い回帰線じゃあね」

「みんなで新しい味を、世界を作ってるのよ」

「おーい！　君が今朝のお子様船長かい、映像見たけどたいしたもんだ！」

とそこのお兄さんにも嵐の話を聞かれ、

「ほら、うちのキムチと鰍魚湯（チュオタン）も食えよ！」

「なに？　このお団子」

「ドジョウ」

「え！」

葉波に岡野がまた聞いてる。さすがにあの脳直結ケーコも、味覚で検索するのは無理なようだな。

「健康にもいいのよ、いっぱいどうぞ」
野菜がたっぷり入った、山椒の辛味がきいたさっぱり熱々スープにすり身のドジョウとご飯。うまい！　かっと吹き出る汗が暑さをふっとばし、つかれきった体に染みこんでいく。
「メガフロートの水田ではアゾラ、アイガモ、ドジョウ、鯉を同時に育てるのが標準で、すごく豊富な食材なの」
「ほら、鯉の甘辛煮とアイガモのローストもどう？」
「飽きても世界中から来た、いろいろな味つけで目先を変えられるしね」
「鯉にドジョウ、水田の魚はアジアの味！」
「海に、アジアに乾杯！」
「海に国境はない！」
「ほら、これも飲みなよ！　おねえさんがお酌してあげる」
「ノンアルコールだけどね、もちろん」
どこからか女の子が――年上のお姉さんも――集まってきた。あ、やっぱり酒だよ。
「ねぇねぇ、この映像本当？　こんな小さい子がこの台風、ほとんど帆だけで乗り切ったの？」
「うそでしょこれ、三角波がわかるの？」

「すごい迫力！　本物の船長さんみたい」
「ここの上手回し素敵！　こんな可愛い顔して」
などとちやほやされてかなり気分はよかった――でもケーコで見たらオレもミスがけっこうあったから、それを思いだすと恥ずかしい。けど気持ちいい。でも忘れちゃいけない、それはみんながついてきてくれたからだ。でも気持ちいい。頭がくらくらする。

帰ると、稲――ネイも多いけど――刈りの準備が本格的に始まっていた。
とっくに合鴨は繁殖用以外食肉処理された。美香が大泣きしていた。水田のドジョウや鯉も収穫か水路へ、アゾラは緑肥や飼料にされている。
より南ではもっと早く稲刈りを終わらせ、遺伝子改良麻やトウモロコシ、キャッサバなどの植えつけが始まっている。
期末テストが終わると休む暇もなく稲刈り、そして夏休み。
そろそろあちこちから、出稼ぎの臨時労働者が集まる頃だ。
大人がどんどん忙しくなる。例の講座のこと、親に言わないと――
「あのさ」
「お兄ちゃん、何さぼってるの？　宿舎整備しなきゃいけないんだから、手伝えって！」
「勘弁してくれよ、もうすぐテストなのに」

着がえて出かけると、年寄りと子供が忙しく働いていた。大人は農業メガフロートで機械のメンテナンスなどをしているのだろう。
空き屋やホールなどを片づけ、出稼ぎに来た人たちが数日暮らせるよう寝床やトイレを整備する。
「ここは中国、あっちは？」
「フィリピンからは今季三十人ぐらい来るよ。去年の苦情一覧は――」
「ほらこっち手伝ってくれ。死人を引き起こせ、ほー」
「お嬢さんはこっち、炊き出しの準備を手伝ってくれ。もしジェンダーがなんだでやりたいならあっちでもいいがね」
と、李ばあちゃんが岡野に、足場の遺伝子操作強化竹を担いでいるおれたちを指さす。
「い、いいです」
ふん。結構運動神経いいくせに。こっちのほうが気持ちいいんだぞ？
ちなみに見た目ほど重くはない、一度昔使っていた、同じぐらいの強度の鉄パイプを持ったことがあるけどその半分もない。
遺伝子改良竹は実に便利だ。こういう高強度、大収量の製紙用、植林用、飼料用など何種類もある。滅多に実をつけないから制御もしやすい。
だいぶいい汗を流し、

「さて、そろそろ今日は一段落するか。ガキどもは勉強だろ、ちゃんとメリハリつけろよ」
「はいはい」
「はい、は一度！」
ああもう――大人だらけの世界ってこれだから。でもクズな先輩よりはずっとましなんだが――
クズな大人もたまにいるけど、それは告発すればちゃんと調べて処理してくれる。情報公開があらゆるところで徹底しており、ネットワークの騎士団が人間とはまったく別な視点で監査してくれている。
でも本土よりはましか、
「本土って老人ばかりなんだって？」
「どこからそんな話が出てくるの？　もうすぐテストよ、早く帰るわ」
ふ、と少し赤くなった岡野の表情が和む。日焼けがひどいんだな、気の毒に。
「これ、夏休みに行きたいんだ」
と、オレは画面向こうのオヤジと目の前のオフクロに、例のパンフレットを見せた。
「いいじゃないか？　集中的に勉強できるならいい機会だ」

「でもいいの、お父さんのところに行かなくて」
「毎年毎年、砂漠で穴掘りするのもなんだろう？　会うだけなら今から戻って稲刈りを手伝うよ、美香たちを迎えに行くついでに」
　相変わらず鷹揚というかおおざっぱというか、これで関東地方に匹敵する面積の砂漠を、森と農地に戻してきた人物とは到底思えない。
「美香もそっちへ行く予定だったの？」
「ああ、それに」
「で、その授業って」
　突然オフクロが話を切り替えた。なんだ？
「パンフを見ると、理系の研究や高等技師に通じる講座みたいだな。でも内容は基礎的だって。勉強時間はすごく長いけど」
　一日十時間以上時間割が組まれている。休みがほとんどない。
「基礎的？　簡単？　本土で遊びたいんじゃないの？」
　オフクロがちょっと嫌そうな表情。
「いや、数学とかの基礎は意味が違う。この講座、宇宙関係や上級の技師には必須だな」
「え、じゃあ絶対やる！」
　宇宙と聞いたら。

「それに、成績が良ければ国費上級学校にも」
　オヤジのひとことでオフクロの目の色が変わり、
「じゃあ行きなさい！　とにかく真面目にやるのよ？　向こうでの受け入れ先は――あ、寮があるのね」
　向こう？　あ、本土でやるのか。それも見てなかった。
「それに、この講座を受ける条件は？」
　オヤジが急に真面目になってきた。
「英語をもう少し――」
　実はかなりきつい。ニュイン――ネット生まれの国際共通語でコンピュータ言語であり、簡略化した英語とラテン語が中心――と船乗り言葉は大丈夫なんだが、古典英語の単位が少々足りないのだ。何で英語なんてやるんだ、自動翻訳もあるのに。
　急いで短篇二つとソネットをいくつか、暗記暗唱しなければならない。期末テスト一発の選択講座で助かった、もしできればだが。
「ならそれがんばるんだな。稲刈りには帰るよ、あとは」
「わかった」
　と大人同士の話から離れ、繭に戻ってテスト勉強を始めた。
　宇宙に行きたい、だからあの講座を受けたい。今までにないほど勉強した。

でも――無性に悲しい。親は行かせてはくれるけど、でも――なんていっていいかわからないけど、もっと別のことを言って欲しかった気がする。無性に腹が立つ――勉強にぶつけるのがいいんだろうけど。

常駐ソクラテスがまた『なぜ』『なにがほしい』と聞いてくるだろう。

オヤジと仕事をしたいのも確かなのに――

テスト勉強はいつのまにか岡野、葉波、美香の四人でするのが普通になった。美香は小さいので暗唱を確かめたり絵を描いたりケーコで遊んだり、だが。小さい頃は暗記暗誦が多くて退屈だったな、そういえば。読書や計算が好きだったからまだ救われるけど。

岡野も美香はかわいがってくれているようで、ほっとする。オレの悪口で仲がいいんだろうが――麻美は女の子たちに人気があるから、そっちで遊んでいる。前は美香といつもいっしょだったけど、最近は……

葉波は得意な社会とコンピュータ、オレはいつもならお返しに数学と理科だが、今回は岡野が葉波に教えている。

岡野の英語と理数は大したもので、もう国際義務教育水準――相対性理論と量子力学も理解しているらしい。オレは航海術に時間をとられて、まだ微分積分と古典力学で四苦八苦している。航路をちゃんと数学的に出すのと、勘と、コンピュータで出すのがどう違う

か、分かりそうで分からないんだ。何か肝心なことがわかってない気もするんだけど。

で、オレは岡野に英語を聞くしかないのだが――

「なあ」

「え？」

「すまない、ここ教えてくれ」

「あ、ここはね――」と、葉波が割りこんできた。そのほうが岡野にはいいからか。優しいな。

「で、この関係代名詞に――そういえば明日の午後、おじさんが帰ってくるのよね」

「ああ」

「半年ぶりでしょ？　楽しみ？」

「うるさい」

「バカ」

と、岡野が突然機嫌を損ねた。何かしたのか？

「あ――メール。悪い、ちょっとテスト勉強休んで、うちの収穫手伝ってくれない？」

葉波が軽く片手拝みした。

相原家は週のうち二日は大農企業で大規模な食糧生産、残り二日は自分たちの林畑でメガフロート住民用や加工用の野菜や果物を作っている。オレの家に庭として割り当てられ

ている土地も半分以上は葉波の家に任せ、代わりに野菜など現物を市場に行く必要がないほどもらっている。
「うんハナ」
「わかったよ」
まあ、少しは体を動かすのもいい気分転換だ。
「じゃ、ヨット借りてくる。えまちゃんはこれに着がえてて」
ジャージとオレンジの麦藁帽子を渡す。
オレはのびをして英語のテキストをしまい、クロゼットルームに向かおうとして――ちょっと岡野とぶつかったようになり、間が持たなくなった。
「のぞかないでよ」
「しねーよ」
意識させるなよ、我慢してるのに。
「この間お風呂のぞいたじゃない」
「見てねぇよ、悲鳴あげるからだバカ、虫ぐらいで」
本当はまだ目に焼きついているんだが――
「あんな大きな――見たことないわよ」
「由――」

葉波が後ろから――
「ちょ、ちょっと待って」
「問答無用！」
と、一発しばき倒され、こっちで着替えなさいとクローゼットに放り込まれた。
「のぞかれたらびくびくしないで見せてやればいいのよ、減るもんじゃないし。それで堂堂と見たり、襲ったりする度胸なんてないから。お姉ちゃんがね、おととし由が――」
葉波の声。くそ、バカにしやがって。
しかし――あれは――昔は平気でみんな一緒に風呂でも何でも入ってたのになあ――昔の自分がうらやましい。
路上電車で埠頭に向かい、予約してあった小型のヨットに乗ると、う――また気持ち悪い、けど――やらなきゃ――
「面舵少々、よーそろ――」
「よーそろ――うぷっ」
んん――気持ち悪い――頭が重い、また――少し波をかわして縦揺れ（ピッチング）、うう――
「もうすぐだから我慢して！」
「わかってるって」

船尾を見るオレの目に、全く酔わないけど少し寂しそうな岡野の目が映った。何もできないのが情けないのか？　なら一から航海術を習え、一年ぐらいしたら舵は無理にしても――う、大きなうねりをよけ、それを利用して上手回し――舵を返し、首をすくめて反対舷に回る帆桁をよけ、波を頭からかぶる。岡野のケーコ、また故障しないだろうか？

「もうすぐ、そこだから」

目の前に細長く広がる第二農場。ヤシの葉が防波堤の上から見える。

「第三埠頭にいくよ、取舵一杯」

「了解、上手回し――おっと」

ちょっと大きな縦揺れ。葉波が素早く三角帆を操作して不安定を逆用し、埠頭に入って手早くもやって上がった。

「大丈夫？」

と、百合姉が背中をなでてくれる。ああ――ほっとする。憧れてたのは百合姉の結婚式までのはずだけど――

「由！」

葉波の怖い声。

しかし百合姉、手伝って大丈夫かな？　もうおなか大きいのに。

「岡野さんもごめんなさいね」

と、葉波の母ちゃんが声をかけてきた。

「いえ、皆さんにはいつもお世話になっていますし」

岡野は相変わらず大人相手には――いつものオレ相手の毒舌、録音して聞かせてやりたいよ。

「さて、今日はこっちのキュウリと」

さ、やるか――

「うわ、なんか森みたい……あ、犬に、ニワトリも！」

岡野はびっくりして見回している。

「主にここの居住者用で、各戸の庭や家庭菜園、個人経営の農場があるんだ。トロピカルフルーツの木が多いね」

葉波の父ちゃんが籠を渡し、案内する。

「虫除けちゃんと塗った？」

オフクロが岡野の背中を軽くなでた。

結構広い農場に、色々な果樹や野菜が混じっている。

ここは日光が強いから、多少日陰があったほうが野菜も葉焼けしないし、色々、木も混ざって植わっていると連作障害も土壌流出もない。土が失われる怖さは、毎年の植林でいやというほどわかっている。

今は普通農地でも輪混作が推奨されている――二十世紀後半は単一作物が農業の主流だったそうだが、連中がいかにバカで狂っていたか、同じ人類として恥ずかしい。
リヤカーがいっぱいになって、葉がついたままのスイカを切ってむしゃぶりつく――相変わらずうまい。砂漠のスイカもうまいけど、やっぱりこれが好き。
それからオレは自分の家の庭に割り当てられているところを見、ちょっと雑草を抜いたりした。
そういえば最近、あまり庭を見てなかった――まあ、ほとんどは相原家に任せているんだけど。
葉波たちが、雑種犬のバックと夢中で遊んでいる。
熱帯の虫とは共存できないからだけど、ちょっと自分の庭といっても遠いよな――犬ともあまり会えないし。小さい頃は毎晩遊びにきてたけど、今は正直面倒くさい。
「この犬はここで放し飼いなの？　だいじょうぶ？」
「生存公役で何人かがまとめて世話をしてるよ」
「結構自然と遠いのね、ここ」
「本土のほうがもっとひどいんじゃなかったか？」
「やーね、いつの話よ。今は人口も減ったし、みんな自然と触れ合えるようにしてるわよ」

「オレたちだって、毎日海に触れてる。いつでもここの庭でも公園にでもいけるし――今度公園も見るか？」
「公園って、居住メガフロートにはないんでしょ？」
ちょっと遠い目で、防風林と防波堤の向こうを見ようとする――海は見えない。
「独立のメガフロートだ。虫が出るからメガフロート内は街路樹程度、あとは――そうだな、防波堤周辺の防風林でも――あ、悪い」
その防風林を見ていたときに、岡野は海に落っこちたんだ。確か去年、基礎医学生理学でやった修正ＰＴＳＤメカニズムは――
「そろそろ思い出して直面していいんじゃないか？」
「なにさぼってるの、由。今度はこっちのトマト手伝ってよ、一個そのまま食べていいから」
「へいへい、ありがとな」
葉波に引っ張られ、また暑い日差しの中を歩いている――なんだろう、この気分は。いつ葉波は春おじさんを思い切るのだろうか、そうしたら――いつか……。
少し後ろをついてくる岡野の、ちょっと寂しげな目も妙に胸を騒がせる。
そろそろテストが始まる。休み時間も遊びではなく、勉強している人が多い。

古典学園漫画では期末テストが全てだったようだが、今は公文式を参考に完全習得の積み重ねが原則だ。単位は普段の小テストでちゃんと満点を取るまでやり直すことのほうが肝心だ。

期末テストはあえて難問にチャレンジするだけだが――基礎問題は全問正解じゃないとダメだから辛い。

古典英語でちゃんとやらなきゃいけないけど、もちろん数学や物理でミスをしたら例の講座など無理だ。

できない部分が絶対ないよう、きちんと潰しておかなければならない。

常駐ソクラテスが、しつこく『比の定義を本当にわかってる？』とか聞いてくる。コンピュータに言われるのもむかつくが、これは一応人間以上の知性の一部だ――

……みんなどこに行くんだろう。

もうすぐオレたちも十五歳――半分の時間は働きながら二十代前半までかけて、義務教育と仕事に関係ある講座、単位として認められる仕事というお定まりコースか、それとも高等学校――より専門的なコースに挑戦するか――そして国費上級学校――

オレも葉波も成績では一応挑戦できると思うけど。

岡野はどうするんだろう。いつまで海で暮らすんだろうか。海になじもうとしないんだから――

なんだか泣きたくなるけど、とにかく勉強しないと――

8

何の夢だったのか――岡野？
早く目が覚めてしまって飛び起き、ちょっと運動しておかなければと気がついた。
テスト勉強で義務がたまっている。このままじゃオンラインの貯金が減る。
着替えて運動場に行くと、岡野が中国系の人たちと太極拳をやっていた。
目が離せなかった。
四つ上で、大きな賞を取った江さんもいた。一度ケンカしたから、どうしようもなく強いのも知っている。でも、岡野はそれよりきれいな動きだ。
「何見てんのよ」
葉波に背中を叩かれた。怒ったような声。
「え、あ」
「おはよう。運動がたまってるんでしょ、ほら」
と、いきなり背中合わせにくっついて、ストレッチを始めた。

どうしたんだろう……春おじさんがいるなら、嫉妬させたいんだろうけど、どうしたのかな……まあ気持ちいいからいいか。嬉しすぎて恥ずかしくて、なんだか居心地が悪いような気もするけど。

今日のテストは自宅からネットで。
昨日は学校でケーコを取り上げられ通信を遮断され、代数と航路計算と、英語と漢詩の暗記暗唱だったが、今はむしろコンピュータや教科書があっても力を試せる試験科目が多い。逆に完全に修得しないと単位が認められない――毎日のように小テストを完全にできるまでやらされるのが辛い。
これから岡野のように脳直結が増えたら、コンピュータを取り上げることはできなくなる。そうなったらどうなるやら。いや、もし脳直結のレベルが上がり、誰もが常時円卓について聖杯に接している状態になったら――
そしてオヤジを迎えに、みんなで――岡野も葉波一家も――家を出たら、埠頭に峰が待っていた。
「よ」
「おう」
次の瞬間、目に映った腕、頭に散る星――呆然とした。殴られたのか。

「な、なにすんだ」
「きゃあっ」
「何を」
「峰くん」
「この野郎！」
再び拳がめりこむ。やっと痛みを認識し、血の臭いをはっきりかぎつけた。
「約束じゃねえか！」
「てべぇ！」
それからはオレもあまり覚えていない。ある部分は妙に冷静だったが――仲間とのケンカと、人外動物（ヴァーレルセ）から身を守るのは区別しなければならないから、区別して――って、噛みつきは反則だぞ！　しまった、肘が入っちまった。
気がついたら、オヤジや通りがかりの船員たちに取り押さえられていた。
「約束、しただろうが――葉波が船長、おれは機関長、由は一等航海士――」
「おいおい、どうしたんだ？」
苦笑気味のオヤジ、峰がしばらくもがいて――ふっとむき出した出っ歯をしまい、折れた歯を吐いた。
「お帰りは？」

「あ――お帰り！」
と、美香がオヤジに飛びついた。
「大きくなったな、寂しくなかったか？」
「ううん、ネット映話でいつも話してたし、みんな誰かいないもん」
オフクロが控えめにオヤジに寄り添う。
オレはどうしていいかわからなかった。
「さて――どうしたんだ？　正式な決闘だった、ってことにするかい」
オヤジが峰を放し、声をかけた。
「ずいまぜん――」見ると、彼は泣きじゃくっている。「ぐぁ、あ――」
オヤジの目配せを受けた相原一家が、峰を連れていった。
「いきなり心配させるな」
ぽん、と頭に手が乗る。
「大きくなったもんだ、しかもずいぶん元気にな」
「そんな――」
嫌味のつもりか――くそっ。
「峰くんもずいぶん強くなってたよ、前見た時はこんな子供だったのに」
と、腰ぐらいに手を、頭をなでるように出す。なんだかむかむかする。もう腕力じゃ負

けない自信は――だめだ、あっさり取り押さえられた。くそ――くそっ！
「ちゃんと仲直りしろよ」
「しらねーよ、いきなりあんな――」
はっ、と気がつく。オレが、例の講座を受けに本土に行くことは――海とメガフロートから出てしまう、ってことになるのか？　本土に出て行って、稲刈りと正月ぐらいしか帰ってこない連中のように?!　単に面白い勉強、ってだけじゃなく？
それに、三人で船を持ち世界中を回る、って子供の頃の約束――あいつはいまだに本気だったのか――
「やれやれ」
と、オヤジは呆れたように肩をすくめ、
「まったく――」
ちょっと遠い目で水平線の水鳥を追った。
「どうするんだ、今からでも予定を変えるか？」
オレはどうしていいかわからなかった。
「ありがとうございます」
オヤジが、取り押さえるのを手伝ってくれた船員に礼を言う。一人の初老の黒人が特に気になる。

「元気ね、君が〝嵐の長谷川〟？　わしはジョンソン。よろしく」
重みのある声、船乗りっぽいがしっかりした日本語。握手した、皮手袋より厚い鋼のような手。筋金入りの海の男だ。
「は、はい、よろしく」
ちょっと意味ありげに苦笑し、なぜか岡野と――多分ケーコのテキストで少し話して、ぴしっと敬礼して立ち去った。
カッコイイ――それにオヤジ以上に、ものすごい力だった。
「知り合い？」
「何度か世話になってる」
オヤジもちょっと意味ありげに見送った。岡野も。なんだろ？
「おっとすまんな――えまちゃん、いきなり騒がせて悪かったな」
と、オレの頭を後ろから小突く。去年まではこういうときは、頭に手を乗せて押さえつけたんだが。
「小さい頃会ったことがあるけど、覚えてるかな？」
「はい」
「そろそろ予約の時間よ、いきましょ」
パーティには岡野ももちろん相原一家も誘って、ちょっと盛大に外食した。

主に船員など外から来た人のため、安くておいしい店もたくさんある。海からも農地からもふんだんに色々とれるし、海にはアジア各国から人が集まっている。今日はずっと中国奥地にいたオヤジのためだから港の寿司屋。

オヤジの「生魚なんて半年ぶりだ」が何回でたことか。

「本土じゃ、ここまで新鮮な魚やカニなんて食えないだろ？」

岡野をからかうと、

「バカにしないで、普通にあるわよ――これもおいしいけど」

と怒っていた。

「仲悪いのか？　居心地いい？」

「ううん、すごく仲いいよ」

葉波がフォローしていたけど、どう見ても仲悪いと思うな――でも全部岡野が悪いんだぞ？

「いえ、みなさんよくしてくれて、とても居心地はいいです」

「だってあたし、えまお姉ちゃんとなかよしだもん！　お兄ちゃん、そのイクラちょうだい」

「いいよ」

美香もバカだな、本土から何日かけて運ばれてきたと思ってるんだ。

「へぇ由、さび抜き卒業したんだ」

葉波の一言に凍りつく。葉波ならともかく、岡野にまで子供扱いされたらたまらないから頼んだのに――あ、オレが我慢しているのばれてたんだ――

「あのねえまちゃん、由ってついこのあいだまで」

「もうやめてくれ」

テストが終わる頃、稲刈りが始まった。

大きくひたすら広いメガフロートに着くと、金色の野が広がっていた。

重く垂れる稲穂、はちきれそうなネイ――広いあぜ道の両脇に茂る、防風を兼ねた高いサトウキビ、各種豆、灌木など。

こんなにたくさんどこにいたのか、と思うほど多くの人が集まる。

あちこちに行っている住民の家族や、アジア中から集まった渡り鳥たち。

「ちょ、ちょっと――」

「ん？」

「どこに行くの？」

葉波が向こうに回り、オレと岡野は――

「ぶらぶらしてればすぐ声かかるって、」

「ほらそこの二人！　これB‐33に持って行って」
「はい。な？」
　重くはないが結構長い板で、一人では持てない。
「そっち持ってくれよ」
　と、ばたばたやっている。
「鎌で稲刈りなんてやらないのね」
「コンバインで全部できる、平坦なメガフロートの利点さ」
　いろいろなことで手が必要ではあるけど。赤道付近では、近くの大人口を吸収するためほとんど人手でやってるらしい。
「おい、これでもどうだ」
「サンキュ。ほら」
　と、おっさんが切ってくれたサトウキビを分けてみんなでかじる。
「甘い――」
「そりゃな。ほら、こっち手伝えって！」
「う、重い――」
「がんばれ、落とすなよ」
「もうちょっと、ファイト」

「ふう――あれ？」
　と、H鋼をみんなで運びこんだ、まだ刈り取っていない田を見て岡野が、
「これ――知ってる稲じゃない」
「ネイだよ」
「ネイ？」
「遺伝子改良水稲の一種で、ヒエとかの遺伝子が入ってる。光合成がどうとか」
「ちょっと待って」
　と、数秒目を閉じると、
「なるほどね、C4光合成できわめて耐塩性が高い――わたしがとってる生物学2で光合成は、低緯度地域での収量がきわめて多く、主に飼料用――あ、なるほど――」
　便利なもんだ。欠陥品だけど。おっと、
「ほらこっち！　サトウキビばっかかじってないで塩水のんどけ、熱射病になるぞ。おーい！」
　葉波たちとまた合流した。
「お、始まったか」
　空が黄昏れてくると、刈られて肥料を混ぜて掘り返され、あちこちサトウキビが残るの

みの田を背景に、たくさんの人たちが集まる。
漁船が直接横付けされ、魚がホースで巨大な桶に注ぎこまれる。オレたちもどろどろになって魚をさばき、種類や部位によって刺身、海水で煮る、揚げるなどに流れ作業で分ける。やっぱり水産処理場のプロは違うよな――
「こら、ぼーっとしてないで手を動かせ。プロのみなさんみたいにできるわけがないんだから、丁寧に、怪我しないように」
はいはい。
次々におけ一杯になる内蔵などが運ばれていく。砕かれて肥料になるのだろう。
他にもたくさんの食べ物飲み物が運ばれ、板を敷かれた祭場を埋めていく。
櫓ができ、夜店も出る。
葉波たち女子はもう着替え、トランペットの練習を始めている。
「みんなももういいぞ！」
と待ちに待った声、男子は裸で海に飛びこんだり大きなホースの水を浴びたりして汚れを落とし、浴衣に着替え、好きな楽器を手に集まった。一昨年までは家族に着付けてもらったが、去年から男子どうしでやっている。
「お――」
葉波と岡野の姿に、思わず言葉を失った。

いつもと違う、華やかな朱とまばゆい緑に負けない葉波と、濃紺に白とかすかな金が凛とした気品をかもす岡野――
「どうしたの、そんなに見とれて！」
葉波がいつも通りの声で、身を寄せてきた。
何人もの男に誘われている岡野がちょっと助けを求める目でこっちを見たので、葉波と二人で蹴散らした。
そして熱い風の中花火が上がり、音楽が始まる。
「これなに？　星みたい」
岡野が夜店でいろいろ買い食べている。
「スターフルーツさ、熱帯フルーツならみんな食べ飽きてるよ」
「わたしには珍しいの！」
みんな夢中で飲み食いし、演奏し、歌い、踊った。
オレは声変わりが終わるところで大声ばかり出していてあまりいい声は出ないが、精一杯張りあげる。
「おい、声小さいぞ」
「おいじゃないんだけど。それに海のみんなって声大きすぎ」
あ――

「どう呼びたい？　どう呼んで欲しい？」
と、葉波がおれたち二人に後ろから飛びついてきた。
「きれいだなあ、二人とも」
オヤジ！　オフクロもいい年してめかしこんじゃってまぁ――
「そうだ由、それにえまちゃんも知らせが来てたぞ、例の講座。二人とも合格」
「え――やったぁっ！」
ぱんっ、と葉波とハイタッチし、岡野ともしようとするが岡野は葉波の陰に隠れ、
「ありがとうございます」
とオヤジにだけ頭を下げた。
「じゃあ、ちゃんと二人とも守れよ。去年みたいなバカはするなよ」
「わかってるよ」
くそ、思い出させるなよ――
「ねぇ、こっちいくわよ！」
葉波が引っ張った先で、若い衆に担ぎ上げられた神輿（みこし）が豪快に動き回る。
花火が次々に空に花を咲かせる。
時々誰かに殴られては殴り返すが、それもまた楽しい。殴ったやつと次の瞬間には肩を組んで歌い、飲み、食っている。

とにかく風が熱くて、なんでもうまくて、気が変になりそうだ。
夜も深まり、そろそろ帰らないと――でもまだ風も体も熱い。
オレは埠頭に行き、ヨットを見つけた。去年は十何人か子供たちだけで酒に酔って、船を勝手に沖出しして――思い出したくもない。錨をつけて三キロの海底に沈めたい。
「どこか行こうか？」
いきなりの葉波の声にびっくりした。
そして、岡野もそのうしろにいる。
「また行きたいのか？」
「――」
葉波がじっと沈黙し、いきなりオレと岡野と肩を組み、ぎゅっと、二人とも抱き寄せるようにした。
「どうした？」
「なんでもない」
と、海の彼方を見つめる。
オレはふと、宙を見上げた――
岡野は何を見ているのだろうか、少し気になったが、それでも銀河から目を離せなかった。

「どこか、遠くに行きたい」
「オレも」
あまりに遠い星空に胸が痛くなり、無性にどこかに行きたくなって寂しくなって、葉波の腰にまわした腕にぐっと力をこめる。
岡野の手が、腕に触れて――手摺りにしがみつくように、握ってきた。
また、花火がはじける。
「三人で、どこか、遠くの無人島――」
葉波がつぶやく。
「ずっと――」
岡野のすすり泣きが聞こえた。
そろそろ台風シーズン、この田もひと時休む。今年はいつもと違う夏――

9

夜。この港町は？　クレーンも車もない――でこぼこの石畳に、ガラガラと馬車が走っている。
ぶらっと、近くの水夫に声をかける。船乗り英語――知ってるのとかなり違う。通じるから別にいいが。
すごい臭い、服装もなんか変だ。何もかもが臭い。
と、いきなりばらばらっと人々が来て、殴り倒された。
「な、何」
「運がなかったな、兄弟」
「免状は？　ないか、君たちはＨＭＳフリゲート艦リディア号に強制徴募された」
「はぁ？」
「来い！」
のしかかってくる水兵がズボンのベルトを、大ぶりのジャックナイフで切る。逃げよう

としたらずり落ちる、ってわけか。
みんなわいわい、諦めたような――まるで小さい頃は泣きながら見た、処理場に引かれる牛のように――妙に仰々しい格好の士官や乱暴な水兵に連れられ――痛いっ！　いきなりこぶつきロープで背中をひっぱたかれた。
「すぐそこだ、乗れ！」
動力のない手漕ぎボートに、荷物かなにかのように放り込まれる――いきなりの船酔い。
「船酔いか？　実は艦長もだ、って噂だよ」
「こらそこ、しゃべるな！　ミジップマン、今の水兵の名前を控えよ」
月光に、巨大な帆船がそびえていた。うわあ――まさか全部木造？　こんなの特殊な実習船で何度かみただけだよ！　いや、アメリカまで行ってきた村田が、米海軍でいまだ現役のコンスティチューション号の土産話をしてくれた。
「名前は？　生まれは？」
「ユウ・ハセガワ、ジャパン」
なんなんだ？
「読み書きは？　船に乗った経験は、水兵の経験は、特技は？」
ここ、ひょっとして――あの時代のイギリス港？　なんでまたこんなところに。タイムスリップにしてもある意味最悪だな。

こうなったら――しょうがない、提督になってやろうじゃねえか！
と、志願を決意したところで、
「由、いつまで寝てるの！」
オフクロの怪訝な顔が操作パネルに映っている。
全然残念じゃないな、この夢。リディア号の乗組員は確か――思い出して苦笑する。
「助かった、ロサスはやだ」
そこまで生き延びるにもかなり運がいるけど。
「はぁ？　寝る前変なの見るからよ」
夏休みに入り、ちょくちょく台風が来るようになった。
多くの田は刈られてすぐ耕されて一休み、秋からまた水田にしたり、他いろいろな作物を植えるのを待つ。サトウキビとキャッサバなどが台風に耐えて育っている。
大人は台風の間を縫い、作物の積み出しなど結構忙しい。
メガフロートの両端にある運動公園はいつも予約で一杯だし、部活で野球やサッカーをやってる連中は設備が充実した学校で合宿してしまう。
何人か、早めにあちこちに出港する子もいる。オレも来週には出港の予定だ。
公園は混むし、天気のいい日はボートやヨット、泳ぎで周りの海もにぎやかだ。反面生存公役などの安全員は忙しい。

オヤジはひたすら寝ている。もうすぐゴビ砂漠に帰るんだし、毎年こうしてこの時期はゆっくりしている。オヤジの仕事は特に公共性が高く、生存公役単位にも認められているからこうしてごろごろしていられるんだが。

オレももう一眠りしよう、と思ってたのに――まあ、あの夢から起こしてくれて助かった――

「あのね、由とえまちゃんの二人でこれ買ってきて」

オフクロが古風にメモを渡す。ケーコでいいのに。

「はい、わかりました」

岡野は嫌なのをよくもまあ色にも出さず――女優だな。

「何で二人で」

岡野が嫌がるだろ。

「荷物持ち」

「だったら一人で行くよ」

「えまちゃんも買わなきゃいけないものがあるの」

「じゃあオフクロがついて行けば」

「仕事」

「メモに書いといてよ」

「女の子の用事よ、男の子に行かせるわけにはいかないの」

岡野が真っ赤になったのを見て、なんとなく察してオレも真っ赤になってしまった。あ――

「だったら通販でいいじゃん――あ、エロ本みたいに学習資料って書いてもらって」

ここでは市場で買い物をするより通販のほうが多い。本土でも大抵の物は通販で買えるそうだが。

「あ、そういう手だったの、春のあれ」しまった。ケーコに『最低』とテキストメールが浮かぶ。

「それに変な想像しないの！　女の子の用事はいろいろあるの、いいから市場に連れてってあげなさい」

「葉波は？」

「もうとっくに起きて、畑を手伝ってるわよ」

――負けた。

「前はちゃんと案内できなかったから、いろいろ見せてあげてね」

「わかったよ」

と言い捨て、自転車に乗った。岡野もこっちでハイブリッドを買っている。

狭い道を縫って走り、外壁と太陽電池幕で守られた居住区から外周部に出る。

自動の鉄扉を開けると、この前は嵐でろくに見えなかった外周部の様子がわかる。
「暑い――」
「まあね」
「中全部冷やしてるのって、確かに涼しいけど無駄じゃない？」
「いや、深海から冷水くみ上げてるから、そんなにエネルギーは使ってない。ついでに海に栄養補給もできるし」
目の前には海側から見ると高い防波堤、だがこちらからはそれほど高くはない。
そして防波堤の上はかなりの広さがあり、道があって防風林が並んでいてちょっとした公園になっている。
防波堤と居住区外壁の間も道と鉄路がある。
「そういえば、ほんとに自由な時間、なかったよな」
岡野がこっちにきて以来、オレや葉波に連れられ、あちこち案内されてばかりだった。
「行きたいとことかある？」
「ないわよ」
そうされるとどうしていいやら――繭に閉じこもっていれば幸せ、って人種なのか？
「どうなんだ」
なんか変な気持ちが、そのまま出た。

「え？」
「なんでも……じゃなくて、ほら……あ、憂さ晴らししたいんだったら」
「いいよ」
「なにが？」
「余計なことしなくて」
何て言っていいかわからず、防波堤に上がる坂に向かう。
「ついてくるなよ、危険だから。今度は浮輪投げるだけにするからな」
でも、また――また、体がとっさに動いてしまうかもしれない。
「え」
「バカなことしたと、反省してるんだよ」
あ、防波堤に上がってくるなって言ったのに！　まあ今は台風でもないから、落ちても下の張り出しに引っかかって無事だろうけど。
岡野をちらりと見ると、ものすごく驚いている様子だった。
「もしかして、従卒（スクヴィヤ）じゃな――っ、あれ？　ここから泳げるんじゃない？」
岡野が指差したのはメガフロートの波浪発電岸から、いくつか大きく伸びている遊泳桟橋だ。
「ああ、ほらそこ」

その根元は、多少海に向けて半円形に張り出し、緑があってベンチなどが置かれ、小さな公園になっている。
その中央部にはいくつか、小さな建物もある。
「公衆トイレと更衣室とシャワー室、ほら」
数人の女が水着に着替え、出てきた——ちっ、小学生と親。
「残念？」
「うるさい」
くそ、葉波と同じようなからかいかたしやがって。
「あの埠頭の先端から、ほら——そのいくつかのブイに囲まれた海域は安全ネットが張ってあって泳げるんだ。春から秋、寒くなるまでちょっと気軽に泳ぎたい時はあっちで泳いでる」
「春から秋って、季節があるんだ」
「そりゃあるよ」
ここをどこだと思ってるんだ？　亜熱帯には四季があるぞ、霜や雪がないだけで。
ふ、と海を一緒に見つめながら自転車を飛ばしている——あ、そろそろマーケットだ。
なんだか胸が苦しくなる。
「この扉がマーケットだから、降りるぞ」

「わかってるわよ、地図ぐらいちゃんと重ねてみてる」
「運転中むやみにケーコは使うな！」
本当に危ないったらない。
「——でもないくせに、そんなに心配……しないでよ……」
また、いつも通り岡野は機嫌を悪くし、突然、
「ごめんなさい」
と謝ってきた。自転車で、彼女は後ろについていたから表情は見えない。
「何が？」
「なんでもない」
あとは無言。

「あとは……」
「ビール、これはおじさんのね」
「贅沢してるよな」
穀物を消費するビールや日本酒には高い税がかかっている。
特に地中海周辺の緑化プロジェクトではワイン産地が次々生まれているから、ワインのほうがずっと安い。

ここでいちばん安いのは、こっちでできる各種のヤシ酒やラムなんだが――オヤジはビールが一番好き。
「勘違いするなよ」
「？」
岡野がちょっと不審な目で振り返った。
「あのオヤジ、こっちじゃごろごろしてるけど、そんなの今だけだから。中国奥地に戻ったら――」
なんだかくやしくてやるせなくて、走り出したい。荷物の重さが嬉しいぐらいだ。
「わかってるわよ、あの人の業績ぐらい」
「だから――」
ネットでわかるような、業績って一言にできるものだけじゃない！　夏だけだけど、何回か一緒に仕事してるから――
「そういえば、岡野の親って」
びくっ、と岡野の表情が、ますます人形のように固くなる。
なかなかうまく焼けないんだ――赤い。
「本当に知らない――ようね、ならそのままでいてよ」
「なんだよ、別に気にしないぞ？　ここには差別なんてないからな、外国出だろうと混血

だろうと、家畜を……肉にする仕事だろうと、必要なんだから」
現にその手の仕事は、年に数日授業兼生存公役で手伝わされる。自分で食べるものがどうやってできるか知らなければ、ということだ。
「小さい頃は泣いたけどな、可愛がってた動物を殺して肉にするのって」美香が、田の合鴨に情を移して泣いていた。「あ、こっちでは半分授業で――バカだよな、本土の連中って。まあ昔は何も知らないから伝染病のリスクを避けたのはわかるけど、でも近代化されたら……」
なぜか岡野が呆れ顔で吹きだした。
「なんだよ」
「バカ、わかってないの？」
呆れた笑顔、でも笑顔だからいいや――可愛いな。
「何が？」
「自分の足元にだけは絶対気がつかないのね」
「わかってるよ、それぐらいいつも教わってるだろ」
人間は自分の足元にある問題には気がつかない、年中常駐ソクラテスに言われる言葉だ。
「バカ」
と、危ないほうの本屋に行こうとする。

「おい、おい岡野！　そっちは」
「岡野、だなんて呼ばないでよ！」
なんだか、いきなり泣きそうな目をしていた。
「岡野だなんて……」
「だって、じゃあ――」
えまちゃん、とでも？　無茶言うなよ――オレ、なんで女の子を名前で呼べないんだろう。葉波以外は、でも葉波はどっちかというと、男女区別がなかった頃の相棒、って感じの延長だし――でも……なんかいやだ……くそ……
「なんて呼べば」
そこで突然ケーコに電話。オフクロだ。
「あ、由？」
「何？」
「魚も買ってきて、ブダイと……」
「うん、うう……ほら、行くぞ」
と、岡野の肩を軽く叩いて魚市場に向かった。
「ここは個人の漁師も店が出せる自由市場でもあるから、便利なんだよ」
と軽く案内を続けながら、いい魚を選ぼうと港に向かう。ちょっと人気の少ないところ

に入って、そこで岡野が突然カートを手放し、オレの手を引いて走り出した。
「こっち！」
え？
強引に少し走り、カップルが物陰に隠れるように自販機の陰に引きこむ。そして抱きつき、突然キスしてきた――
びっくりして離れようとしたが、しっかり後頭部を押さえて離さない。ぎゅっと体が密着する。
震える唇と――柔らかいのに引き締まった体がなんとも熱くて――頭がくらくらする。繰り返し歯がぶつかるが、かまわずますます強く押しつけてくる。
永遠とも思える、息が続く限りの――オレは三分を超える――時間。
離れると短い息継ぎだけでまた繰り返す。
オレもつい、夢中になって抱きしめてしまった――
いつまでそうしていたのか、ふっと岡野はオレから離れた。
その目には涙が浮かんでいる。
「ごめん、勘違いしないで……今のは忘れて」
彼女はどこかに去った。
オレはしばらく呆然としていた。やっと我に返り、魚の血が流れる水洗いされた路面に

舌打ちしながら、一人で荷物を運ぶ羽目になった。
ちょうど家に着く頃に、岡野も戻ってきたが――どうしていたのだろう。
お互いに何も話さなかったし、沖縄風煮魚と海藻と貝の味噌汁の夕食でも、目を合わせることもできなかった。
正直――夜は風呂や繭などで来てくれるんじゃ、と色々妄想したがもちろんそんなこともなかった。

あれから、岡野とますます気まずい。
オレも家に帰ったら、岡野と顔を合わせないようすぐに繭にもぐりこんでしまう――岡野もオレと二人だとすぐに目を閉じ、直結ケーコの世界に没頭しているようだ。
でもつい、キスのことを――柔らかく、それでいて妙に鍛えられた体の感触を思い出して、ちらちら見てしまう。それを葉波に見破られないかが怖い。
まあ、元々もうみんなでリビングでくつろぐ習慣はないから、家族でも顔を合わせないようにしようと思えばいくらでもできる。オレが小さい頃接眼三次元ディスプレイが普及してから、リビングの大画面テレビの価値がなくなっていろいろ変わったそうだ。まってここはリビングが狭い。
今はリビングダイニングでは音楽が流れているぐらいで、会話が中心だ。昔のドラマに

ある、テレビ中心のリビングなんて今から思うと技術がなかったとはいえバカな話だ。テレビの中毒性も知らないで。
もちろん葉波が来ているときや、みんながいるときは楽しいけど。最近、岡野もみんなにはとけこんでいるようでそれはほっとする。
でも、なんとなくみんなが、特に葉波がオレに隠していることがあるような気がする。
「ねぇハナ、新米はいつ？」
岡野がオフクロに聞こえないよう葉波に聞いたのに、オレは思わず吹き出した。
「なによ！」
「確かにこないだ稲刈りしたばかりだけどさ、あの米は……ちがうぞ？」
普通に話さないと、普通に――
「え？」
「遺伝子改良とかで耐塩性と量優先だし、水も違うし、特に春稲は寒暖の差も小さいから味は……もちろんネイは人間の食べ物じゃないしね。おいしいお米は、やっぱり本土産よ。ちょっと高くなるけどね」
葉波の目がちょっと気になる。
「ここのは主に輸出で飼料、配給用」
「そうなんだ――結構大変なのね」

「そりゃな」
と、葉波と目くばせし、小さい頃から習っている言葉を同時に唱えだした。
「メガフロートは、かけがえのない地球をこわさず百億に肉を食べさせるため、母なる海に人が作った新しい大地である。われらは人類文明の存続、全人類の選別なき幸福なくらしのために食べ物をたくさんつくり……」
「……以下略」
と、葉波と目を合わせて軽く笑った。
「ああ、そういうこと」
「地域無償教育から毎朝、ね」
岡野の笑顔が妙に嬉しい。
「おーい長谷川！」
「由、やっぱ葉波も、えまちゃんも」
何人かケーコにメールをかけ、ぞろぞろやってきた。
「たまには公園行こうか」
「えー、今更？」
オレは夏休みの宿題――あ、『第二次世界大戦』の手写し、ぜんぜん進んでない――はともかく例の講座の、予習として渡された課題で忙しいんだが――しかしいらいらするな、

二進法や八進法、十二進法で、さらにその小数や分数も含めてややこしい問題を計算するのって。いかに十進法に慣れきってたか、ってことだけど。
でも遊びたい、どうせある程度は運動しなきゃいけないし。もうすぐ出発だし。
「じゃ、ついでに手漕ぎで行くか」
「そうね。それならえまちゃんもいいでしょ？」
「どっちが早いか競争するか？」
峰がいつも通り力こぶを見せる仕草をした。
「身の程知らずめ、これで二百十五勝二百十二敗だな」
「バカヤロ、去年の三月のあれと一昨年の八月のクラス対抗はこっちが勝ってるんだ、単にカスがのバカのせいで」
「海に言い訳はないのだ、ミスタ・ブレイスガードル」
「相変わらずよね、男子って」
女子が笑っている。
「ついこないだまでお前らも似たようなことしてたろ――」
「ほらほら、行こう！」
ぱっと葉波が席を立ち、荷物を取りに飛び出した。
クロゼットから出てきた岡野を見て、

「あのさ――えまちゃん、本気？」
葉波が呆れている。
「え、砂浜があるんでしょ？」
岡野はまぶしい――を通り越して痛々しい、おかもの丸出しの青いビキニにワイシャツを羽織っていた。
みんな鼻血が出そう――という以前に呆れて頭を押さえている。
「バカ。太陽がほぼ真上から刺さるんだぞ？」
オレの言葉、そして女子たちを見て凍りつき、真っ赤になる。
「誰か教えろよな……」
「まさかこのカッコだなんて思わないもん」
オレが水着はどうとか、教えるわけにはいかないじゃないか。
あ――そういえば夏休み前、オレにネット通販のカタログ見せて、どっちが似合うっていうから無視したら――すごく怒ってたな――あいつが怒ってるのはいつものことだから放っといたんだが。
「それに裸足は危ないよ。イモガイだっているんだから」
「イモガイ――ちょっと待って――毒のある貝?!」
と、また岡野が目を閉じて体内のケーコで調べた。なんか引っかかるながめだよな。

「そう。だから最低限サンダルが必要なんだよ」
もちろん地元のオレたちは、女子も含めて海でもTシャツに膝まである半ズボン、足元は頑丈なスニーカーで固めている。日焼けは慎重に少しずつで、ほとんどの時間は海で泳ぐ時もちゃんと服を着ている。
慌てて岡野はクロゼットルームに戻り、オレたちはため息をついて埠頭の手漕ぎボートに向かった。

遠くの台風からの波が、それぞれがかばい合っているメガフロート群の隙間を縫ってボートを揺らす。軽い酔いに耐えて、必死でオールを引いた。息を合わせ、全身の力で。
といっても公園は居住区から泳いで渡れるほど近くにあり、土日は浮き橋もある。
横の短辺の埠頭にボートをもやい、そのまま一つの長辺を丸々占める、長大な白い砂浜に駆けこんだ。スニーカー越しでも砂が熱い。
休んでいる船員などが甲羅干しをしているのも見える。特にトップレスの女性に、オレも含めて男子たちが興奮してつつき合う。
ついでにウミガメものてのて歩いている。おいおい、いつもながらのんきだな――つい百年前までの人類が何をやったか覚えてないのか？
真っ青な海に飛びこみ、葉波が用意してくれたスイカを割る。まぶしい太陽の下さんざ

ん泳ぐ。
「うわ」
女子が集まってくる色とりどりの魚と、きゃあきゃあたわむれている。
男子は競泳したり、高いところから飛び込んだり、中には銛を持ち出すやつもいる。峰がひときわ大きなのを仕留め、葉波が大喜びした。
「向こうのブイまで」
葉波がオレの背中を叩き、クロールでぐんぐん飛ばす。
オレも必死で追う。
無数の、色とりどりの魚。やや遠くまで浅くなっている、メガフロートだけど珊瑚で生きている海底。そこの生き物たち。
人魚のようにペースを上げる葉波。
その足首に触れそうになった、その時、潜っていた岡野とぶつかりそうになった。
水中で声が出ないが、確かに彼女は笑顔だった。
なぜかびっくりし、ちょっとパニックになって浅いところに上がる。と、オレの首に、葉波が後ろから突然しがみついた。
「どう？」
え……立って少し離れ、Tシャツと半ズボンを脱ぎ、モデルのようにポーズを取る。

「どうしたんだよ」
なんだかまぶしくて目をそらしたくなるが、
「見てよ」
と、オレの前髪をつかんで引っぱった。
ごく、っと思わず喉が鳴る。黒と赤の大人っぽい水着。豊かに膨らむ胸。胸下から締まった腹に、裂けたような空きが鮮烈。すらっと伸び、膝から下が人魚のように沈んだ脚。
「由も……」
なんだかすごく寂しそうに、オレの体をじろじろ見る。くそ……なんだか無性に悔しく、同時になんとも言えない……抱きしめたい……
「スケベ！」
にまっと笑い、いきなりオレの頭を抱えてプロレス技気味に引き倒し、え？　いきなり唇が重なってきた。そしてまた、今度はみんなのところに泳ぎ去る。
オレはぼうっとして座っていた。なんだったんだよ……

さて、みんな集まって、疲れたし一休みするには――
「もうちょっとおやつ調達してくる」
いつでも森に入れるよう、荷物には厚手の長袖長ズボンにジャングルブーツ、ククリと

重装備もある。
公園は見た目より広く、森としてもなめちゃいけない規模だ。
元が人工だからわざわざ観光に来る人はいないが、現実の島より南西諸島の生態系が忠実に再現されている。
そして果樹が多い決められた地域の実は、その場で食べるだけなら取っていい。
用意したさおに手鉤をくくりつけて、葉波を探したがなぜか見あたらない。なんだか行きたそうにした岡野に、
「おい、来るか？」
「おい、って呼ぶのやめて」
そういえば――どう呼べばいいんだろうな。岡野、と呼んでも嫌がったし。
「え？　じゃあどう呼べってんだよ。名前か？」
「知らない」
といいながら、森には好奇心があるのか黙ってついてきた。
「虫除けちゃんとしとけよな」と、自分に使ったスプレーを手渡す。「あと、怪我しないよう上着とズボンも着とけ」
「茂みに引きずり込むなよ」
「バカ、同じ家なんだからいつだってできるじゃん」

「それって」
たく、うるさいな――指一本触れてねぇよ。
森に一歩入ると、いきなりかなりうっそうと茂っている。一応道はあるけど。
数多くの虫や獣の気配、深い緑のエネルギーに圧倒される。
これが怖くて、みんな小さい頃は居住メガフロート内の広場や海でばかり遊んでいた――所詮人工的な森なんだろうが。でも大きい子に強引に連れられ、森で遊ぶのはなぜか大好きだった。
そして、つい数十年前は砂漠だったという、オヤジたちが植えた森で遊ぶのも――
「あったあった、ほら」
と、パパイヤをたぐりよせ、腰のＭＰＴからナイフをワンハンドオープンして切ってやる。二年前オヤジが誕生日に、絶対に悪用するなと散々説教してからくれた――普段は大型の折りたたみナイフ＋マリンスパイク＋シャックルキーと、多目的ラチェットドライバー＆レンチに分離できる。結合すれば大型のハサミ、プライヤーを選択できる。
「はぐれるなよ、結構深い森だから」
差し出した手を岡野は一度ためらいながら、そっと握ってきた。
オレもなぜか、びくっとしてしまう。
「さ、さてと――こっちだ。ちょっと待って」

さおで藪をかきわける。
「気をつけて、ものすごいとげがあるぞ」
引き寄せたのが、急に岡野が女子だと思って――胸が騒ぐ。抑えろ、冷静に――高い緑の天蓋を見上げた。
「森を歩くのは久しぶりね」
と、彼女も見上げていた。
「あ――」
「何か見つけたか？」
「ちょっと待って」
と、コードで彼女自身が背負うチビリュックと、オレのケーコの本体をつなげた。
ゴーグルとヘッドホンを下げると、色々な画像と音声が混じる――多くの鳥や虫がいる。
イリオモテヤマネコさえ、目で見てはわからないのが熱画像で浮かび、そちらを注視するとそのわずかな音とコントラストが増幅されて浮かび上がる。
こんな世界をいつも見ているのか？
「止めろよ」
「え？」
「その体内のケーコ止めて、そのまんま見て聞けよ」

「ど、どういうこと？」
「確かに面白いけど、あくまで人工的に処理された世界じゃねーか――そのまま触れって言ってるんだ」
ぐっ、と岡野が口をつぐみ、一瞬目を閉じた。
「止めたよ――え」
「どうだ？」
何も言わない。オレも何も言わず、じっと緑を見上げ、そのかもし出すものに浸って――ふとケーコの着信音に気がついた。
「なにやってるの！　えまちゃんに変なことしたら、また帆桁端（ヤーダーム）から逆さ吊りにして、ついでにお姉ちゃんに言いつけるからね！」
はっと気がついて、手を放した。
そしてポケットからロープを少し取り出し、
「つかまれよ」
と差し出した。手を離すわけにもつなぐわけにもいかないなら、これしかない。
岡野は泣きそうな目をして、そのまま歩き出す――
「危ないぞ！」
腕をつかまえ、ロープの端を握らせた。

「熱帯には危険な生き物も多いから、むやみに動くな。こっちだ」
「指図されたくないんだけど」
「だったら全身腫れあがっても知らないぞ」
すごく不満そうな顔で、ロープに指を引っかけてついてこようとして、滑る倒木に足を取られた。
それを抱きとめた拍子に、手が柔らかな胸に触れた。
「悪い――殴るのはあとにしてくれ、今は危険だ」
「いいから、手どけてよ」
「ご、ごめん」
と手を離す。正直名残惜しいけど。
「あんまり、そういう優しさやめてよ」
と、岡野が小さくつぶやく。どうしろってんだ――
「ほら、ここ」
何種類かの果物を集める。中には結構グロテスクな見かけのものもある。
「近道で戻るぞ」
と、浜に一度出てから戻ろうとした――そこで、突然岡野がオレを茂みに押し倒した。
「なんだよ」

「だめ、あれ怖い、あれだめなの」
と、ケーコにテキストメールが浮かぶ。声も出ないのに、ケーコは操れるんだな。
倒れて重なり、密着する体――何かを警戒している目、そして――チビリュックのケーコ本体が活発に動く、記憶ディスクなどの雑音？
ぎゅっと抱きつかれ、暖かく柔らかい体の感触がもろ――うわ、岡野の胸をもろもんでる！　唇が深く重なる。頭がぼうっとして、あまりに熱くて――恐怖に似た感情が吹き上がってくる。理性が切れそうになる。
ケーコに警告音が鳴った。
「由！　カメラこっちに向けてよ」
葉波の声。やばい、また吊るされる！
岡野はすばやく離れ、カメラを指にはめて周りを見回してうなずく。まだ背中に触れているオレの手に熱いのは、内臓ケーコ本体？
オレは慌てて立ち上がり、木に寄りかかってテレビ電話モードに切り替えた。
「何やってるの、用ができたからみんな早く帰れ、って」
「うん、すぐ行く。ごめんね」
岡野は冷静に答える。つい今までむさぼりあっていた唇で。
帰ろうと岡野の手を握ると、ふと気になったことがある――森の生き物が近くにいない。

そして、変な感じに折れた枝がいくつかある。ちらりと見えた海岸の違和感。におい。何かが引っかかる、いつもの森、公園じゃない――

そして、帰りも妙にあわただしかった。オヤジと峰のオヤジさんがわざわざ動力ヨットで迎えに来たのだ。

正直岡野が、葉波も怖い。

「由」

ハスキーな声がいきなり割り込み、びっくりする。

「なに観てたの？」

「見せられてたんだよ、『天国と地獄』」

「ああ」

ネットはいろいろ好きに楽しめるようで、逆に義務としていろいろなものを見せられたり読まされたりする。好きなものばかり食べるな、見たくない真実にも直面しろ、ということらしい。お節介な世界だ。

『天国と地獄』は『何もしなかった未来』と同じように、小さい頃から見せられている定番教育映画の一つ。もし環境・資源問題が大したことなくて、二十一世紀初頭の延長だったら？　それが革命もなくそのまま、貧富の差がとことん開いて安定してしまったら？

貧富の差が遺伝子改良や脳直結技術で、本当に別の種になってしまい、一割の神々と残り大多数の奴隷、いや家畜に近い――

何度見ても胸が悪くなる。安定しているからこそいやになる。人間ってそこまで冷酷になれるのか？　あの貧富の差、多数の餓死と貧民の悲惨さは、何でこんなことに耐えられるんだ。自分たちは特別だと思ってしまったら、別の種になったら、そこまで……

そして貧富どっちも無知のままで……無知と邪悪と宗教にすがって、憎んで、戦争で満足して、あれじゃ奴隷というか、いや凶暴で残忍で……人間やってくのがいやになるな。

学校でやったけど、だから今はそうならないよう、みんなが情報と接して智を育んで義を正しい向きにし、衣食を足りさせて礼を育て、目を配って信を築き、仁に至る、か……

「今日、ヨットであちこち回ろうか。三人で」

「忙しいんだけどな」

「それは三人ともじゃない、だから」

明日の朝にはオレが乗る筑波丸が来て、午後に出航するはずだ。

岡野は明日の晩に出る飛行艇から沖ノ鳥島沖――早口言葉としか思えない、みんなマシリト空港と呼んでるメガフロート空港で乗り換え、一足先に本土に着くはず。

「だから、三人で春さんのヨット使っていいって！」

「え、じゃあ行く」

実質二人だけで船を動かす――明日から一週間はひたすら命令に従う毎日が待っているとわかっている分、最後の自由は楽しみたい。やっぱり自由が好きなんだ、特に海で生きていくには規律や義務が必要だ、とわかっていても。

農場を縫って、風を受けて加速する。

「ブイ左舷（ポート）、気をつけて！」

「OK、舵（ステレー）そのまま」

しまった風下に入っちまった、匂いがもろにくる。

「あ――この匂い――」

「そ、畜舎。上から見るとドーナツ型だ、牛とかが中で泳いで、ついでに体を洗えるように」

「ラクダ畜舎はあっち、ニワトリは居住区の近くよ」

モーモーブーブーいろいろな声を聞き、鼻をつまみながら手を振って抜けた。

「メガフロートの主な目的は海藻からのバイオマスエネルギーと、肉や飼料の大量供給なの」

「わかってるわよ、もう説明はいい！　わかったから」

「ここのおかげで、毎日おいしい卵と牛乳があるんだぜ」

「好きよね、ゆ……も」

「だからにょきにょき伸びてるのよね」

「それで最近」

と、葉波の胸元を見たら笑顔で蹴られた。

本格的にメガフロート群を抜けると、波がぐっと激しくなる。

もう吐くだけ吐いたら楽になり、すっかり仕事に集中できる。

やっぱり葉波の舵取りはうまいな――すごく柔らかく波に乗ってる。

見回すと、目の前に大きなマングローブ――いや、このままの開き（タック）だと、下手をすると水産畜産処理場にぶつかる。

「このマングローブは前見たろ？」

マングローブのそばは通りたくない、虫や鳥、危険な障害物が多いから。

とにかく緑が深すぎて怖いし、波や風も――おっと、帆桁（ヤード）を少し動かして――

「でも、隣の水産畜産処理場は見てないよね、今度見てみる？」

「そんなの見たくないって！」

「目をそらしちゃだめだ、というか生存公役でたまにやらされるぞ？」

「わたしは……」

やっぱり、しばらくしたらここから出て行くのだろうか？

なんだか胸が痛くなり、葉波に手を振って大きく上手回しをし、東南東に向かった。
しばらく大きなうねりにもまれて航路を保つと、前方に大きな塔が見える。
「これは？」
「ここ？　海藻プラント」
マングローブからも少し離れたところに、かなり大きな工場が浮いている。
プラント自体は一昨年交代した新型だから、海面下の球形浮きからいくつもの柱で支えられた、いくつもの円筒形のサイロなどがパイプラインでつながって浮いている。
古い工場がバラバラにされてフィリピンに売られるとき、泣いたな――あそこの倉庫が大事な遊び場だったから。
巨大な埠頭だけが海面に接しており、そこにはいくつもの専用船や球が並ぶガスタンカーがある。
「空から見たほうが早いよ。ちょっと航空写真――あった、ここ」
と、岡野のケーコに送る。
「こんなに」
そう、マングローブから、さらに航路を阻害しないよう安全なところに、数千平方キロもの海域をブイで区切り、無数のいかだが広がる。メガフロート群の海域よりはるかに広い。

マングローブから栄養を与えられている海域に加え、化学肥料を薄く散布したより広い海域で、海面下十メートルの筏から海藻と貝が大量に養殖されている。
巨大な扇の要にあるのが海藻総合プラント。
海藻と貝が主な産物だが、バイオマス生産量はメガフロート農地の合計をはるかに上回る。当然だ、面積の桁が違う。
もちろん、かなりの人がこの工場や収穫船、肥料散布で働いている。
「ここで海に栄養を与えて、ものすごい量の海藻や貝がとれるんだ。でもそれは食べてもあまりおいしくないから、貝の肉と海藻の一部は肥料や家畜の飼料になって、貝殻は建材や土に、ほとんどの海藻はこの工場で主にエネルギー……水素やメタン、アルコールになる」
メガフロートで生産されている――もう日本領海だけでニュージーランドの食肉生産量をしのぐ――家畜飼料の七割以上は海由来の海藻、貝、小魚、プランクトンなどだ。
陸地全部より広大で、栄養塩だけが足りない外洋から肉を作り出す以外、百億にマクドナルドを食わせる方法はない。もちろん貝や海藻も大量に食べられており、干し貝は世界中で配給の主力品だ。ついでに二酸化炭素も処理でき、エネルギーも得られる。
また海水で育つマングローブなどをラクダに食わせても、淡水を消費せず肉や乳製品を得られる。おかげで配給にはいつもラクダの肉やチーズが入ってる。

「ちょっと補足するね。海藻は一応植物だけど、木と違って水分が多くてそのまま燃やせないし、草とも成分が違って食べてもエネルギーにしにくいの。だからこの工場で、微生物の力を借りて」

葉波が目で合図し、体重を切り替えて船体を安定させる。オレは合わせて舵を切る。ばしゃっと舷側で波がはじけた。

「もう調べたわよ。工業原料のアルギン酸などもとるけど、大部分はエネルギーや工業材料になる水素、メタン、アルコール、アンモニアなど、その副産物や廃棄物も色々――ふーん、すごく複雑なのね」

「それだけじゃなく、この広大な海藻と貝の森は魚にとっても楽園だ」

「連絡して見学する？」

「それともあっちの珊瑚礁でも見るか？　きれいだぞ」

人工珊瑚礁は単に、低緯度の外洋に頑丈な浮きをガラスの鎖でつないで海面下十五メートルぐらいに固定したものだ。自然とその上に珊瑚礁ができ、大量の二酸化炭素を固定して漁獲量も増やしてくれる。広くなりすぎると底の下で酸欠が起きるため、上から見ると格子状になっている。

定期的に浮きを追加したり余計な珊瑚をかきおとして海底に沈めたりする手間はかかるが、それだけの漁獲量はあるし肥料の必要もない。

「やめとく。ちょっと遠くまで来すぎてない？」

ぷっ、と思わず吹き出した。

「何よ！」

「あのね、ごめん！　あたしたちにとって遠くって、日本の領海出るぐらいなの」

葉波の言葉に、岡野は呆れてものが言えないようだ――単に上手回しでちょっと波をかぶったからかもしれないが。

「といっても、ここからは日本本土のほうがグアムや台湾より遠いんだけどな」

そう、そんな遠くに旅立つことになる――何が待っているんだろう。

ひたすら数学ばかりの三週間だけど、終わってから三日かそこら向こうで過ごせるし――本土を、岡野に案内してもらうのも楽しいかもしれない。

10

キス――熱く、深く甘い――葉波？　そして、岡野と――かわるがわる――

「由！　起きなさい」

うわあっ、葉波が至近距離に。いつものことだけど、こんな夢の直後だとどうも――

「今日出発でしょ？　早く支度しなさい」

うう、夢ではあんなに可愛かったのに……

「あ……もう五時か」

「だから早く起きろっ！」

と、布団をはぎ取られる。前みたいにおねしょ呼ばわりされたら――さらに悲惨なのがこの前みたいに、黙って生ぬるい視線を向けられることだ。

押しのけるように風呂場に飛び出す。幸い下着は無事だった――が、岡野とはちあわせし、また葉波と二人がかりで叩きのめされた。

朝食もいつもより少し豪華で、オレの好物の鶏のから揚げと、オヤジの好物の鯖の味噌

煮といろいろな魚を入れた汁、美香が大好きなモンブランと相原家自慢のパパイヤ。

「ちゃんと朝は食べなきゃ駄目よ」

「うるさいな」

「素直になったら？」

岡野の一言につい手が出そうになるが、思いとどまる。もう女の子を叩くことはできない――出会ったのがもっと昔ならよかったのに。葉波みたいに遊んだりケンカしたり――

しばらくはうちで食事をすることもない、などと思ったら弱虫扱いされる。船で、そして本土では何が食べられるか楽しみにしないと。

「じゃ、行ってくる」

なんだか照れくさかったので、食べ終わってすぐに出かけた。

集合時間〇八〇〇、出港時間一五三〇。

待ちきれず三十分前に着いた。オフクロは向こうの埠頭から出る高速艇に、オヤジと美香を見送りに出ているはず。こっちには来るな、と必死で頼んだ。

順風で、空もいい感じだ。波も落ちついている。これなら船酔いも……う、考えるな、今から吐き気がする。せっかくのごちそうを海に戻したくない。

オレが乗る筑波丸はやや古い中型貨客船で、大型の煙突にガスタービン＝スクリューと

帆走の併用型。化石燃料に世界全体で高額の税金をかけるようになってから、ほとんどの船に帆がある。

艦尾のキャビンから通信用マストが一本、甲板から帆走用のマストが二本そびえている。ずんぐりして積載量と安全重視。揺れるけど。う……くそっ。

帆だが、本当に使われる船は、オレたちが普段学校に往復しているような古典的洋艤装ではなく、先進素材を使った異様なコンピュータ制御の帆だ。簡単に甲板の収納所にたたむことができる。

塗装はくたびれているが整理整頓は行き届いている——よく見る船だが、乗員として乗るのは今回が初めてだ。

短期だし学校での荷物は別に送ったから、オレ自身の所持品は少ない。

もう一度確認するか——七つ道具、安全ブーツとヘルメット、革手袋とゴム軍手。タオルと下着と洗面セット、ジャージ上下とエプロン。コンパスと六分儀、ぼろぼろでずしりと重い船実習のしおりと海図(チャート)帳、航海日誌帳、夏休みの宿題が少々と——いつもなら本はケーコに入れていくが、去年はケーコを没収されてすごく退屈だった。今年も多分そうだし、荷物に入れておこう。あと当然、オレには必須のエチケット袋。

オレたち海育ちの実習生(アップ)が、外洋船で働きながら航海するのは去年の冬も、片道二週間のハワイ往復でやってる。峰とリック、金さんは去年の後半休んで、それぞれの専門を勉

強しながら、マラッカ海峡からスエズ運河を通ってイタリアまで往復してきた。世界一周を経験した強者も木村など何人かいる。

「おーい！」

「今いくよ！」

「くーるよ」

何人か集まって、そわそわしながら待つ時間が——いるいる、安里のおふくろさん、隠れてるよ。

なぜか釣りセットを背負った峰が来た。

「よう、どうしたんだ？」

「ついでだよ、釣りの」

そこに岡野も来た。見送り？　いや、荷物？　今夜出発のはずなのに、ずいぶん気が早いな。

「見送り、行ってあげたら」

「親父と美香？　ああそれは」

「え、本当に知らな」

峰が口にし、はっと口を押さえた。その視線の先で、岡野が真っ青になっている。峰が岡野をにらむ。

「何が？」
そろそろ集合時間なのに。
「ハナがおじさんたちと中国の植林に出発する、って――今から予定変更して追いかけても」
岡野の言葉に、頭が一瞬真っ白になる。なぜ――わけがわからない。
「由と行くつもりで、だよ。口止めされてたはずだよな、岡野」
峰の言葉が現実のものとは思えない。
「そ、そんな――」
ばかな！　葉波は春おじさんのことを、ずっと想ってきたはず――オレが百合姉を想っていたのと、同じように。
同じように――同じように、とっくに振り切っていたのか？
「じゃ、じゃあ、なんでずっと――春おじさんにばかり――」
峰がなんともいえない目でオレを見た。岡野の目には、憎悪すら混じっている。
「わかってないのか？　嫉妬させたくて、だ――このバカ野郎！」
拳がまたぎゅっと固まっている。このあいだ殴られたときよりショックだ。
嫉妬？　いやというほどしてきたさ！
「っ――かやっ！」

「長谷川、乗船時間！」
走り出したオレに、後ろから先生の声がかかる。
船での乗船時間は絶対だ――だが、数分だけ、ぎりぎり――ええいっ！
汽笛が鳴り、出港していく船が見える。
ケーコ連絡を取ろうとするが、通じない。電源を切っている？
「葉波！」
マストが見えた、それに必死で叫ぶ。逆風が目に痛い。
「ゆうちゃん！」
誰かに抱きとめられたのがわかる――振り払おうとして叩いた感触から、何かを感じてぞっとした。
百合姉？
体がすくむ。大事な体なのに――大好きだった女性（ひと）を――
「だめ――あの子が好きなのは、海と宇宙が大好きで、嵐にも負けないゆうちゃんなんだから」
ぎゅっと、暖かい胸に抱きしめられたのがわかる。直後、何かが爆発するように涙が溢れた。
ひとしきり泣いて、心がおさまった――百合姉に涙を見せたのは何年ぶりだろう。この

女性に涙を見せたくなくて、どれだけ頑張ってきたか――いつ、この女性（ひと）より、葉波にこそ涙を見られたくなくなったのだろう――

いつか、少し離れて立って、オレは涙をぬぐった。

パシッ、とオレの頬が鳴った――これも何年ぶりだろう――

「可愛い妹を泣かせたんだから」

と、微笑んでオレの顔をのぞきこむ。

「帰ってきたときは、二人とも――きっと違っているはずよ。どうしても大きくなるんだから……こんな小さかったゆうちゃん」と、おおきくふくらんだおなかぐらいに手をかざす。「……や葉波が、こんなに大きくなるなんてね。もう、背伸びしなきゃ届かないか」

と、頬にキスが鳴った。

「あと伝言。岡野さんのこと、しっかり守ってあげて、って。いってらっしゃい」

何も言えず、船に向かった。

言いたいことは山ほどあった――大好きだった、いい子を産んでくれ――でも何も言えない。

船に着くと、船員が――上級船員、この間あった――

思い出す間もなく、拳の一発。目が覚めたら甲板上で、海水をバケツでかけられたのがわかる。すごいパンチだった。今のは当然船には必要だし、邪悪な支配ではない。そうだ

ったらどこかから制裁が必ずある。

「二度とやるな！　時間厳守だ」

「はい」

ジョンソンさん、だった――吸い込まれるような、深海のように深い目だ。

「いいわけもなしだ」

「はい」

「掃除！」

「はい！」

甲板を見回すと、ちゃんと束ねられていないロープがあった。

すぐ片づけよう、と思ったがまず、

「すみません！　ここでの処理は」

無言で、ジョンソンさんが飛んできて一見ゆっくり、それでいて恐ろしい的確さでロープを処理した。

聞いてよかった――去年も同じことをしようとして、やり方が違うと怒られた。船によって組み継ぎ（スプライス）のやり方も違う。同じ失敗は二度しない――

しかし、このロープ処理――やはりこの人は本物だ。なんとか真似て、今はゆっくり丁寧にやってみる。

ふと後ろを見ると、岡野が乗船しているのが見えた。あれ？　予定と違う――いや、今は船員なんだから下船するまで船客も港の人も、たとえ家族でも関係ない。船に集中しなければ――去年それでえらいめにあったし。

出港まで時間がない、やることは山ほどある。

ケーコが取り上げられていることにも気がついたが、去年もそうだった。あの時は泣いたけど、今はそれどころじゃない。とにかく忙しい。

コンテナの積み込みは大人の仕事だから、安全なように離れて――もっと危険なのは穀物や液体の積み込みだ。

「近づくな、見て盗め！」

大声で注意される。ここでふざけたら、米や小麦粉でも溺れる。ましてメタンに高圧水素、アンモニアやエタノールなどは浴びただけで即死だ。それに火が出たら……

一昨年、荷揚げ中にふざけた奴が糖蜜に蹴落とされるのを見た。細いワイヤーを命綱として引っかけていたから命は助かったが、あれを見てからみんな目の色が変わった。海に放り込まれるよりずっと怖い。

こっちに揚げるものも多い。コンテナから機械類や雑貨、鉄鋼、セメントや泡コン用炭素繊維――どれも危険物だ、油断せず慎重に扱え、と去年からさんざん叱られている。

今になるとわかるが、こうして子供たち――去年の実習でそれが事実だ、と受け入れる

には、実習が終わってからさらに二月かかった――がいると、古参の船員も模範を示さなければならなくなる。結果損失が減って喜ぶのは船長と船主と保険会社だ、とわかってみるとなんだか悔しいのだが。

でも少しでも役に立ちたい、とつい前に出たくなる。

「出過ぎるな」

ジョンソンさんに肩を押さえられた。ぐっと悔しさが胸を締めつける。ついでに忘れていた船酔いも――う、でもこの人には見られたくない――何か仕事はないだろうか？

「パレット持ってこい」

「はいっ！」

わかってくれてるなあ――背中が熱くなる。

船上でパレットが足りなくなったので、サイパンから乗ってきていた神田さんと一時下船。

本当は手続きがいるが、荷揚げ作業中はそれどころじゃない。

「〝嵐の長谷川〟がこんなかわいい子だったなんてね。いくつ？　あたしは十七」

やめてくれ。

「十四です。パレットはこっちです」

神田さんは小太りで小さく優しそうで、船での動きもしっかりしている。頼りになりそ

うだ。
倉庫にちょうどいい山がなく、あちこちに散っていたパレットを集めて積む厄介な作業があった。だが去年は二人でなければ持てなかったパレットを、一人で持てたのが無性に嬉しかった。
積んだらそのままフォークリフトを神田さんが操縦し、船に直行。いつ、オレもフォークを使えるようになるんだろうか。

気がついたらもう出港の時間だ。全部片づけて甲板を磨き上げるのはぎりぎりだった——ジョンソンさんの腕がなければ無理だったと思う。
このときがいちばん誇らしい。全速でいちばんいい服に着替え、船乗り帽をかぶって舷側に整列する。
音楽とちょっとした儀式、そして待ちに待った号令に合わせて帆が展開される。
もちろん古典的洋艤装の帆がぱっと開くほど華麗ではないが、コンピュータ制御の帆が開くのもそれはそれで壮観だ。
そして錨が引きあげられ、揺れの周期——考えるな、酔う。直立不動だ。
「敬礼！」
いちばん晴れがましい瞬間。港を見てはいけない——見送りに応えるな、任務に専念し

ろ、船全体に気を配れ——去年どんな目にあったか思い出せ——
「解散！」
もう一度敬礼し、とりあえず次の当直は——でもオレたち下っ端の子供に当直もクソもない、二十四時間仕事と思った方がいいが。
とりあえず、この航海で自分が何をするか知ろうと——そこでなにか、違和感を感じた。
海面下の船艙と客室の間——本当は船員食堂に集合すべき、違和感は上に報告すべきだが——去年、探検して海に放り込むぞと怒られたんだが——
そこに岡野がいた。顔を知らない男、大人の船客ともみ合っている。なんとか——
「お客さま」
「なんだ、ボーイのガキか。口出すな！」
くっ——だが——
「おそれいります。失礼ながら、いま危険な海域でございます。なにとぞお部屋にお戻りになって」
「失礼！」
ぱっと、ジョンソンさんが飛んできた。
「申しわけありませんでした、こちらでお話をおうかがいします」
きれいなニュインで船客をなだめ、巧みに連れていく。

岡野とジョンソンさんが、オレにふっと目を向けた。
あとで怒られるな――と思ったが、何事もなかった。余計怖い。
不思議なことに、その船客の姿はその後見ていない。すぐに降りたのか？

その夜、眠れず舷側で吐くものもなくなってうめいていると、また岡野がいた。
「余計なことしないでよ」
「ぐ、申しわけ、ありません」
かっと怒ったように目がつり上がる。
「なによそれ、なんで敬語」
「着くまでは船員と船客」
ちょっとびっくりした目。そう――クラスメートとかとして普通に口をきけるのは、この短い航海が終わってからだ。それまで、オレはひたすら船員なんだ。
ふと、岡野が周りを見て
「ここにいて」
「え？」
鼓動が烈しくなり、頭がぼうっとする。いや――酔え、船に。
「う――」

「ひどい船酔いね」
＊＊＊！　去年の実習でフィリピン出身のベテランから習った卑語が出――損ねて、海にまた胃液を少し吐いた。
船が大きいと揺れが、ゆっくりだけど大きくなるからな――慣れるまではたまらない。
「すごい星、本当に見たのははじめて」
東京など湾の大都市で育ったとしたら、星なんか見たことがないだろう。
メガフロートは太陽電池膜があるから、その外に出なければあまり星は見えない。それに水蒸気があるから、いくら空気がきれいでも星はぼやけてしまう。
「ゴビ砂漠の星空はこんなもんじゃない」
正四面体について思いつかなければ、今頃オレもその空を見ていた――オヤジと美香、そして葉波と。
そうだったら、とおもうとちくりとする。
ひたすらな地平線と星空。荒野をまぶしいほど照らす満月。
背後に広がる丈の低い灌木とそびえる風力発電塔、太陽電池。そして目の前の、あまりにも広い砂漠。
その地獄にも結構いる生き物。雨が降ったときに見せる、砂漠の凄まじい生命。
いろいろな、多くはニュインもできない人たち。円卓が全員に配った端末の使い方、ニ

ュインと算数を教え、ケーコや古いノートパソコンを貸してやると大喜びする、でもふだんはすごく意地悪な子供たち。
陽が出てから沈むまで、一日中穴を掘ったり重い苗や水を運んだりする重労働。疲れきって宿題もできず、倒れて寝るだけ――帰ってからぎりぎりで宿題を片づける苦労。
入浴なんて夢のまた夢、濡れたタオルで体を拭くだけでも贅沢。
自分の手で育て、儀式で涙をごまかして殺した羊肉の匂い、焼き上がった種なしパン。たっぷりの、もちろんオレたちの手が入ったバターやチーズ。
汁気たっぷりで青臭い瓜のうまさ。
仕事でのオヤジの厳しさ、みんなの敬意。夜の色々なお話や歌。みんなのいろいろな――そこで葉波は――
「ハナちゃんも見てる、そんな星空……へえ、すごい」
しばらく黙って空を見上げ――たぶん脳直結ケーコで葉波と連絡を取り、星図やあっちの画像を調べたりしているんだろう、興ざめだ――
「宇宙で見た星空とも違うわね」
という言葉にびっくりした。
「宇宙って？」
「さあ？」

それっきり沈黙。オレはひたすら舷側から海を見て吐き気に耐えていたが、突然背中を叩かれた。
ジョンソンさん――しまった。
「彼女を客室に送って、寝なさい。すぐ当直だ」
何か文句を言おうとした岡野が、また目を細める――ケーコでジョンソンさんと話している。ジョンソンさんのケーコはファッションじゃない実用一点張り。太いバンドが縦横に頭を覆い、しっかり固定されている。接眼ディスプレイもヘッドホンも小さいがしっかりしている。補助カメラアイが四方に突き出しているのがかっこいい。
ふと、オレは舷側から海をちらっと見て、何か嫌な気がした。
「どうした？」
「ここの波――」
「心配するな」
「はい――」
「ちゃんと処理するから心配するな、と言っているんだ。忘れていい」
「はい」
ジョンソンさんは信じられる。
それより、正直足腰がふらつく――

「つかまって」
「いいよ」
「いいから」
と、岡野がオレの手を取って肩に導く。細いのに、変にしっかりしている。
情けない――いっそ、今回が初めての実習だったらよかった。あのときはただ必死で、余計なことを考えないでいられた。
一瞬、体内ケーコを通じて葉波に伝言してもらおうか、とも思ったが、言い出せなかった。もちろん通信室でメールやテレビ電話を借りることはできるけど、こんな短期の実習で陸と連絡を取ろうとしたら軟弱者扱いされる。まして岡野に頼むなんて――。
「なんなのこいつ」
岡野の、ごく小さなつぶやきが聞こえた気がした。

台風を縫って北上し、青ヶ島接続メガフロートで〝地獄〟行きの船などと連絡を取る。〝地獄〟とは青ヶ島から東南東五十キロほどにある、人口五十万を超える超大型居住専用メガフロート。同様のメガフロートはほかにもいくつかある。
正式名称は自由保護島だが〝地獄〟と呼ばれている。刑務所を補完するところで、どうしても社会に順応できない人たちが、そこでほぼ自由に暮らす。麻薬もどんなひどいCG

アニメも自由だが、逆に自分の身は自分で守るか閉じこもるしかない。
なんであれ――愚かな自由でも――それが本当に必要な者には与えるのが幸福追求権、ということだ。他にも社会に順応できない人のための隔離施設はいろいろある。
普通の世界と違うのは小さい子供がいないこと。
潮流や異常に多いサメなどのため脱出は不可能だし、外より中の方が居心地はいい。極端な自由ゆえに、さまざまな病的芸術もすごく発達し、十分な収入源になっている。
オレたちにとってはとても危険で、魅力的なところだ。
よく脅しで、行きたいならそこにやるぞ、といわれるけれど――
普通の船、とくに子供がいる船は立ち寄れないが、いろいろな荷物や手紙を本土に届けるためちょっとボートの荷役を手伝った。
〝地獄〟の人々はどんななのか見てみたいけれど、その連絡船の人もメガフロート地元の人だった。
あ、岡野とジョンソンさんが、その船の人と色々話していたのが何となく気になる。
まあそれより、オレたちは船の仕事を片づけて、ヘリで青ヶ島に行ってみたのだが。
何度も見てるけど、やはり天然の島の眺めはすごい。
他にも老人介護専用の百万人規模の居住メガフロートとか、レジャー専門とかさまざまなメガフロートが伊豆・小笠原列島にはあるため、しばしば別の船とすれ違う。

その警戒も忘れちゃいけない。それら当直の仕事も多いが、時間外も料理や船員の世話で何かと忙しいし、非直のときも勉強だ。

世界中を回る経験豊富な船乗りからさまざまな話を聞き、直接座学で色々教わり、実地で航路計算や帳簿、航海日誌などを記入、天測や船荷の点検、喫水やビルジなどの点検も実際にやる。これほど密度の濃い勉強はめったにできない。

世界中の実習生同士で仲良くなるのも忘れちゃいけない。釣りやボート競争、料理比べ——そして卑猥（ひわい）な言葉を教えあうなど実にいろいろとある。

富士山と東京湾の光柱が見えそうなところで、急に進路を変えた台風につかまった。まともに黒潮のまんなかだ。海の色がすごく深い。

横揺れ（ローリング）だけでなく、縦揺れ（ピッチング）も大きい。空は青いが、匂いがなんか違う。少しずつ波頭が砕ける。わくわくする。

「気合い入ってるね」

神田さんにからかわれたが、それよりとにかくふるえが止まらない。

「今のうちにちゃんと食べて、寝ておきなさい」

ジョンソンさんが落ち着いた顔を出す。

今日はオレと安里が食事当番で、安里のおふくろさん譲りの黒糖ホットケーキ、昨日釣

ったシイラのムニエルと刺身、たっぷりとやわらかめの船乗り粥（バーグー）。

とにかく体力勝負だ。みんなもわかってるし、オレもバーグーを無理に詰めこむ。

でも台風だって冬の北太平洋よりはましだ、一度経験はある。喜望峰やホーン岬、冬の北大西洋はもっとひどいというけれど——春おじさんは南氷洋で——

今は眠りたいけれど、体の奥が熱い。絶対に船を沈めはしない——でも今は一番下っ端の自分に何ができるというんだ——悔しい。

「大丈夫だ、よく寝とけ」

ジョンソンさんの一言にふっと安心し、気がつくと——目が覚め、もうすぐ当直時間だった。

夢も見ないでよく寝たもんだ、と自分にあきれながら着がえ、七つ道具を確認、しっかりベルトを締める。揺れがかなりひどい——なのに酔いを全く感じない。逆になんともいえない胸騒ぎがする。

集合が待ちきれないで船員食堂に向かう。握り飯とサンドイッチの山が用意されていた。

「さて、ちょっと揺れるぞ」

船長が軽くいう。

「おかしくなくても笑え、気が楽になるから」

それに今度こそみんな笑った。

「横浜入港は明日の昼になるな。今日はここで一時停船（ヒーブツー）する」と、壁にある大型ディスプレイに海図、天気図などを表示する。「安定させ、押し流されないよう注意する。海上、海中の設備に十分注意せよ。万一の時もあわてず、適切な対応をとれ。気持ちが切れないよう適度に張って、各自の本分をしっかりと尽くすように」

結構近くの風下にブイや小さな浮き施設があり、タンカーがいくつか、下手をしたらこっちに押し流される航路にある。それを見て、猛烈な空腹感のようなものを感じる。

各人の仕事がもう一度確認される。

「長谷川、第二班」

船客誘導が主で、余裕があるときは船内巡回と船荷の確認、状況に応じて消火・船倉整理などだ。

「舵取（コーターマスター）りと同じ大切な仕事よ、ちゃんと気合入れなさい」

神田さんに表情を読まれた――胸に冷たい刃を刺されたような感じがする。

その通りだ、万一の時には確実な船客誘導は助かる人数を左右するし、船荷が崩れたりしたら即転覆につながるから、その点検、必要に応じての再固縛は船そのものを助ける仕事だ。消火ももちろん。

「はい」

胸騒ぎがおさまらないけど。

持ち場につき、リラックスして船の揺れを受け入れ、船のあらゆる音に耳を澄ます。

ちゃんと適度な帆で風を受け、一杯開きで黒潮の流れを横から受け止めているのが伝わる。腕はいい。

外を見ると、もう風力8にはなっている。

これからもっとひどくなるぞ――ほら！　ものすごい揺れがきた。

雨と波しぶきで外が見えなくなり、昼なのに空が暗くなる。

胸騒ぎがおさまらない。じっとしているのが辛い――でも、船客が、岡野がこっちを見ている。

オレが不安そうな表情を見せたら、最悪パニックが起きて人命に関わる。

「ご心配なく、念のために第二食堂に集合してください。お荷物は最低限に！」

あえて笑顔を保つと、妙に気持ちが落ち着く――でも、船全体に、海と空にはりめぐらせた神経が何かをささやいてくる。

「お部屋に備え付けてある救命胴衣をしっかりつけてください、つけかたをご存じない方はどうかお申し出ください」

「し、沈むのか？」

ごく、っとつばを飲み込んでしまう。この胸騒ぎは――いや、大丈夫。

「大丈夫です、混乱を避け、万一の際にも全員が確実に助かるためです。どうか」ぐっと腹に力を入れる。「落ち着いてください」

目に最大限力を込め、特に岡野を見つめる。大丈夫だ、と必死で伝える——オレの体内にもケーコが内蔵されているかのように。

そのとき、何かがぴんと来た。

「長谷川、次は」

「すみません、第三船倉点検します。ついて来てください！」

ジョンソンさんがぱっとついてきてくれた。

ぐわっと鋭い船首揺れ、窓を見ると白く波しぶきが渦巻く……風力10？

船倉に降りる途中でもう、体が凍りついた。壁に穴があいており、それに——固定バンドが切れた鉄骨が当たっている。このまま開き（タック）を変えて波をかぶったら、一気に水が流れ込んで転覆間違いなしだ、それも瞬間的な——誰も助からない——

「緊急！　第三船倉に、動ける人をよこしてくれ！　絶対開き（タック）を変えるな！　長谷川、やるぞ！」

「！」

もう無言でオレはそっちに走った。照明をつけて大丈夫か？　ここの貨物に爆発する可能性のあるものはなかった——はず！

毛布、いやそれじゃ足りない、向こうの——そうだ、

「ゴムボート持ってきます！」

「よし、パドルも、それに2インチロープ、それに」

「バールやワイヤー」

ぱっと飛び出し、救命ゴムボートや救助用浮き輪の予備を自動で膨らませ——もどかしい！　その一瞬の時間にも、穴から見える波間に何か恐ろしいものが、すさまじい波しぶきを通して見えた気がした。

「右舷（スターボード）船尾側も警戒させてください！」

指差し、ゴムボートを引きずって駆け寄りながら叫び、あとは暴れる鉄骨を——やっと助けが来た、ゴムボートで押さえつけ、さらに養生資材や防舷材を穴に詰め——いきなり急に船がジャンプするように、壁に叩きつけられる。

「大丈夫か？」

「はい」

今のはぶつかってくる別の船をかわしたんだ、となんとなくわかる。いい腕、いい船！

二人助けが来た。

次に、あの船をかわすのには開き（タック）を変えなければならない——逆に傾いて、ここに海水が流れ込む！

恐怖以前に、感覚がめちゃくちゃに研ぎ澄まされている。
「行くぞ！」
もう坂道というか崖のように傾いた中を、最低限の機材で――
だが安定している、大丈夫――いや！
「全員体を固定して！」
叫んだ瞬間、ものすごいのが来て隙間からどっと水が流れ込んだ。
何とか排出しないと――いまだ！
暴れる荷物は、まるで象だ。オレたちはアリだ。だが、チームワークとちょっとした道具で、その暴れ象を――
「よし、いまだ安定するぞ！」
どんな嵐にもある、一瞬の安定。悪魔のような一瞬、オレは駆け寄ってロープを投げた。
みんなも手伝ってくれる――ぐっと、体が熱くなる。
他にも船や海のあちこちから危険を感じるけど、とにかく一つ一つ潰していかないと――
やっと固縛して次は、なぜ岡野が危ないんだ？　と思う間もなく、「船客を見てきます、右舷第二船客甲板」と叫んで走り出し、消火器と鳶口（とびくち）をつかんだ。

台風が通りすぎて本土をかすめ――だが油断はできない、余波で前線が頭上を覆い、猛烈な雨が降っていて視界が全然ない。みんな疲れすぎて口もきけない。船客も緊張の一夜でかなり疲れているようだ。
みんなが、オレを変な目で見ている。仕方ないじゃないか、わかるんだから。
この状態で東京湾入りか――台風より怖いんじゃないか？
朝一瞬の晴れ間に富士山と、東京湾などに突き刺さる光の柱がちらっと見えた。やはりこれが本土に着いたという実感だ。
汚染がひどい大都市がある湾の一定範囲に、宇宙から鏡で三百六十五日二十四時間日光を浴びせ、海底からは大きなプロペラや火力発電の余熱と排気で海底の栄養を巻き上げ、海面では海藻と貝を大量に養殖している。
そのせいで周囲は雨が多くなり、また星空が全く見えなくなる。それは船乗りにとって、言葉にできない感覚を狂わせることにもなるらしい。
ここからが危険だ、島や中小のメガフロート、そして船が非常に多い。
野島崎灯台が見えるといつもほっとするが、逆に――もし船長だったらぞっとしないな。しかも水先案内人（パイロット）に色々任せなきゃいけないし。

11

「ヒーローなんて――なろうとしないで、バカ！　なんでそんなに、似てるのよ――だいっきらい！」

夢か、ただ思い出しただけか？　寝た気がしない、体中が痛い。

一応台風を乗り切って、総員起こしからそのまま当直、それも強風と大雨が残って視界がきかない中、大型船航路と中小メガフロート群の見張りで――張りつめていた気力が尽き、手すりにすがって寝棚に向かう途中、甲板に出ていた岡野にぶつかり、そこでいきなり――あいつ、泣いてなかったっけ。

くそ、オレは夢中で、なんとなく船の危険がわかって、必死でなんとかしただけだ。ヒーローも何も、死にたくないだけだ。ジョンソンさんがオレの言葉を信じてそこをチェックしてくれて、みんながいて――。全員の技量といつもの整備がなかったら、オレ一人がいくら頑張っても船は沈んでいた。

思い出して全身が震え、手のひらがじっとりと汗ばむ。台風の名残りでいきなり制御を

失ってぶつかってきそうになった船があった。見張っていたオレが怒鳴って、一等航海士がうまく帆を活かしてかわし、それっきり姿を見ていない――あの船は大丈夫だろうか？

そういえば似てるって、向こうでの彼氏かな？　それもなんとなく気になるけど、それより――うわ、ずっと寝てたんだ――しまった、当直、急がないと。だれも起こしてくれなかったのか――？

体を洗って着替え、船員食堂に行く。途中で窓から外を見た。うねりは大きいけれど感じは悪くない。灰色の空、複雑な色の海、海鳥。

むしろ船尾斜め後ろからの風で、ちょうどいい進み方だ。

相模湾メガフロート群、富士山、それに東京湾と相模湾に刺さる光の柱が見える。

もう野島崎が見える――ここからがいちばん危ない。

「ぎりぎりだぞ、十分前には持ち場につくように」

「申しわけありません、サー。おはようございます」

「おはよう」

嵐のあとは、みんながオレを見る目が少し違う。そして、そんなときは残念ながら、誇ることもできないほど疲れている。

「まったく、五回は助けられたな」船長が笑っている。「入港が思ったより遅くなるから、今夜は船で泊まって明朝退船後、直接学校に向かいなさい」

「はい、ありがとうございます」
「みなさんも最後まで油断せず、しっかりと船内を片づけて準備をしておくように」
「はい！」
当直の実習生が声をそろえた。みんな台風との戦いで疲れきっていたが、でもこうなると元気になる。やっと本土上陸、楽しい夏休みが待っている。オレはわざわざ勉強しに来たんだが――。
東京湾に近づくと、ふだんテレビで見る、渋滞した道路のように船がひしめく。
相模湾沖の畜舎メガフロートに大量の穀物や飼料を降ろし、少し楽になってそのそばにある下水処理人工干潟メガフロートをかすめる。穀物は船を転覆させる、爆発物より怖い積み荷だからほっとする――と「ほっとするな、ここからが危険だ」と怒鳴られる。くそ。
少しのんびり、蒸し暑い台風の余波に汗だくになってあちこち片づけ、荷揚げの準備。
見張りも一瞬も油断できない。まるで鯨のように、大きなタンカーが突然すぐ横にあらわれる。特に潜水タンカーはたちが悪い。
いくら電子機器、管制システムがあっても最後は見張りだ。視界があまりに悪い今こそ。
混み合う野島崎を通ったときには、もう日が沈むところだった。さて、夜間の入港と荷下ろしで今夜は徹夜か――台風のあとで死ぬほど蒸し暑く、きつい夜になりそうだ。
夜といっても、東京湾中央部を宇宙から照らす日光の柱で、せいぜい夕方ぐらいの明る

さだ。まず東京湾面積の三割は埋める入り組んだメガフロートと他船をよけ、横浜に入港する――危険な操船が続く。去年は何も知らずに気負い立っていたが、今年はやることが多くて押しつぶされそうだ。実習生（アップ）、下っ端以下のオレでもこうなんだから、上級船員やまして船長なんてよく生きてるよ。
朝、台風の影響もあって荷役が長引き、退船手続きが遅れて講座に遅刻しそうだ。
挨拶もそこそこにふらふらでタラップを駆け下り、高さの違いがわからずに思いきり転んだ。最後の最後でみんなに笑われたな。
岡野が手をさしのべてくれた。待っていてくれたのか。
「どうしたの？　遅刻するわよ」
暖かく柔らかな手を握った瞬間、なぜか電気のような感覚が走り、起きそこねそうになった。
バカな、何度かキスしてるじゃないか――陸酔（おか）いだ、過労だ――
「お世話になりました、よい航海を！」
「船ではどんなに揺れても、酔っても転ばなかったのに」
「潮汐（しお）に慣れてないんだ」
それ以上の説明はしたくない、船員としては恥だから。今後メガフロート生まれの船員

が増えたら、それでバカにされるだろうな。
まあ、今だけはなんだか仲良く出かけた。寮に荷物は届いているはずだけど――
「そうだ、あなたの家で暮らしてたとか、だれにもいわないでね」
「当たり前だろ。案内頼むよ」
路線はケーコに案内してもらってもいいけれど、やはり岡野についていったほうが確実だな、去年も似たような特進講座を受講したらしいし。なにしろ、大人なしで本土で行動するのは初めてだ。駅の乗り換えすらなにもわからない。
しかしひどい混雑もあったもんだ、人間が体力の限界まで詰めこまれている。
「ちょっと、なんだよこの混雑」
「ここじゃ当たり前よ」
「二十世紀の映像じゃおなじみだけど、人口減ってるんじゃ」
「燃料税で車が減って、電車に集中したから同じことよ。それに」駐輪車両をあごで指す拍子に、キスしそうになる。「電車に自転車とかを乗せる人も多いし」
「確か駅に降りたらすぐ自転車や」
「それ、人気ないの」
そう、話しながらもものすごい圧力で体が押しつけられる。岡野の熱さにドキドキする――何かが脳を煮る。

オレは必死で、ドアに手を突っ張って彼女が楽に息ができるスペースを作った。
「余計なことしないで」
親切にしたり助けたりすると、泣きそうな、怒ってるような――
「うるせ……降りるぞ」
「え？　駅ちがうわよ？」
なんか、変な気がした。雨はやんだけど、風は強い――外海はまだ荒れているはずだ。かなりすいてるホームに何人か降りると、いっしょに降りた酒臭いおっさんが、おおいかぶさるような千鳥足で岡野につかまろうとした。
何となく、危険を感じてかばうと、もう一人オレたちと共に降りた同僚？　に連れられておっさんは去った。このへんも港並みにがらが悪いのか？
「もっと近い電車ないの？」
「地下鉄までちょっと歩くけど、いい？」
急ぐ道で、ちょっとコーヒー――もちろん掌紋電子マネーのデポジットで、カップを専用のリサイクル箱に入れれば半分戻る――を飲む。徹夜の肉体労働で頭も全身も重い。そしてめちゃくちゃに蒸し暑い。
台風のあととはいえ、亜熱帯の海上よりひどい――居住区全体を完全空調しているメガフロートがいかにいい環境か。

第二次関東大震災後整備されたとは思えない、雑然とした道を歩く。古い感じの土塀や建物に、何とも言えない気分になる。

ふと雨がもう乾いた路面を見ると、変な、ネズミ花火の腐ったようなのが転がっていた。

「なんだ？　これ」

「ミミズよ、見たことないの？」

「いっつもいじってるよ、土の中のミミズは。バカだよな、土の中にいればいいのに。こんな熱いアスファルトで、陽に焼かれてのたうちまわって干からびて死んでいくなんて」

なんとなく、気持ち悪い言葉を並べたくなる——嫌がれよ、という気になる。小さい頃葉波に、ミミズでさんざん泣かされたっけ。あのころのあいつは男の子みたいで、どうにもかなわない——

「バカ？　バカはそっちよ」

岡野の、軽蔑のまなざしにびっくりする。

「え？」

「あなたたち人間より、このミミズのほうがよっぽど賢い、っていってるのよ」

あなたたち？

「どういうことだ？」

「この道路は確かに、今回はアスファルトだったからこのミミズは死んだわ。でも、大航

海時代の犠牲と同じ英雄よ。

半年後、この子の甥が旅立つときここは土かもしれない。そうだったら、新大陸を発見するのと同じよ」

おいおい、アスファルトがころころ土になったりするのか？　第一、大航海時代って侵略と虐殺、生態系と文化の破壊じゃないか。

「ちょっと、そんな簡単に土なんて」

「ああ——ごめん、それ自体わかってないんだ。ここも」と、ミミズが死んでいるすぐ脇をつま先でつつき、「少し掘れば土よ。ここはどこだって、少し掘れば土なの、発泡コンクリートの厚板で、その下は海のメガフロートと違って！」

なんか——足元が崩れるようなショックで、なぜか座りこんでしまった。

「バカ。だからあなたたち人間より利口なのよ、リスクがあっても生息域を広げようとしてるんじゃない！　今住んでいる所だっていつ埋められたり毒を流されたりするかわからないんだから。もちろん一匹一匹は考えてない、雨が降ったら穴が詰まるから出る、って単純なプログラムに従ってるだけだけど、全体としては人間より賢明なの。

人間だってそうすべきなのよ。いくらコンピュータの化け物が助けてくれるといっても、それが本当に文明を維持するに十分賢いかはわからないのよ。もちろんいくら端末を配って人間を教育しても、民主主義でも。唯一の安全策はR戦略、多産多死なの。一つのバス

ケットに全部の卵を入れるな。人類だけが宇宙にいけるんだから、遺伝子と文明の種を宇宙中にまくべきなのよ！　じゃなきゃ、何でこんな破壊的な種が生まれたのよ」
「多産多死、ってそのせいで人口が爆発して、下手すりゃ」
「少なくとも、人類の初期は〝産めよ増やせよ地に満ちよ〟って戦略で間違ってなかったのよ、種を維持するためには。たとえアフリカが砂漠化してもヨーロッパで生き延び、ヨーロッパが氷漬けになってもアメリカには仲間が、ってできるんだから。でもこれだけ文明が発達し、人口が増えすぎたら生物として、個体を増やす戦略は間違い――文明自体の子供を、別の星に送るべきなの！　個々の文明を制御するのは当然だけど、それが失敗することを前提にして」
「そうはいうけど、ロケットだってそんな速いのはできないしワープなんて」
岡野の、強烈にのめりこむ表情は怒ってるのより魅力的かもしれない。
「必要ないの、遺伝子と情報だけでいいのよ！　これ、受信して」
ケーコに、通販のサイトのＵＲＬが送られてくる。開くとおもちゃのガラス球――閉じていて水が満たされ、中には水草や魚など。光合成と呼吸、食い食われ腐って循環、か。
「いろんな生物の代表選手を入れて、凍らせたこれをあっちこっちの星に打ち上げる。水のある惑星を探して中身を解凍してまくようプログラムし、ついでにその近くの安定した衛星にあらゆる情報を置いておけばいいの。そうすれば生命は勝手に進化して、知的生命

が進化したらその情報を拾って好きにするし」
ちょっと待て。
「逆に、もしそんなの送りこまれたら地球の生物全部、とんでもない怪物と伝染病に襲われるってことじゃないか！　人にされたら嫌なことはやるな、って」
「合格ね。もちろん、向こうに文明があれば攻撃とみなされて反撃されるリスクがあるから着水前に探査し、生命があるようなら着水はしない。知的文明の先住者がいたら連絡し、遺伝子も文明データも情報源として活用してもらう――隔離された実験室でも、地球型生命のスペアがあるならありがたいわ」
あれ？　この口調――ちょっと検索してみるか――あれ？
「おい、なんかそれ、ホントの計画みたいに話してるけど――ネットにも見当たらないぞ？」
「まだ実行されるかはっきりしないもの。百億にマクドナルドだけで精一杯なの、まだ」
言い捨てて、さっさと先に行ってしまう。
何でそんな情報を知っているんだ？　どれだけの力があるんだ、あの体内ケーコ。
ひょっとして、もう異星文明を探査してるんじゃないか？　円卓自体、その協力で――いろいろあらぬ事を考えてしまう。
そういえば、ケーコをいじったの自体がひさびさだ――メールチェック、いやもう学校

に着いてしまう。放課後でいいか。

講座が行われるのは、都心のお茶の水だった。半公営化されている予備校を利用するらしい。

かつては受験でみんないやというほど勉強した。二十一世紀初頭は二極化で、一部だけが勉強する社会になりかけた。学制改革の後には誰もが、まず世界最低水準と国で定められた学力を身につけるのはしっかりやらされる。

また公立、私立、予備校などの区別もあまりない。どこでも単位は得られるし、特に理系は国際的に定められたテストをクリアすれば単位になる。

もちろん優れた学校は高い競争率と授業料があるが、受験は弊害を防ぐためテスト内容を厳しく監視され、階層社会化を防ぐため、公的奨学金が予備校の類も含めて充実している。また一人一人、コンピュータ上に指導プログラムがあるから独学もできる。

オレたちはメガフロートに巨大な学校があるから、そこでどのクラスになるかが中心――だったけど、そろそろ考えなければ――国費上級学校を目指すやつもいるし、オレや葉波もちょっと背伸びすれば――

「おか――」

「岡野、よ。ひさしぶりね、木田」

いきなり、入口で出くわしたデブの男子が岡野に声をかけようとして、彼女ににらまれた。知り合いか？

「岡野、そうでし――だったな。で、こいつは？」

もう一人のチビが、オレを上から下までじろじろ見る。二人とも着崩した感じで、なんだか軽い。こんな服じゃマストに上れないぞ？

ああ、おかものか。そうだな、ここはみんなおかものなんだ。

「よろしく、オレは長谷川由」

差しだした手を、二人は無視して岡野に話しかけた。いきなりオレに軽蔑の視線が向く。

「だれこいつ？」

「関係ないわ。野村くんも元気だった？」

「そりゃもう」

悪かったな。なんか嫌な感じだ。オレ、何かしたのか？

教室にはいると、大人がまったくいないことに驚いた。

日本の新学校制度では生涯学習の大人も多い。欧米では元々生涯学習が盛んだったからその影響もあるけど、二〇〇〇年代に爆発した歴史認識問題とやらで、アジア諸国との軋轢をなんとかするために、もう学校を卒業した大人も含めてもう一度ちゃんと近現代史を

教える、と国策で始まったのだ。
それまでの義務教育では、いろいろあって近現代史はやっていなかったらしい。そこを責められたから、逆に歴史をもう一度教えた——いろいろな立場から。
オレたちには歴史は見方によっていろいろな面があることは常識だが、当時の大人や老人はどの立場の人も大きなショックを受けたらしい。が、再教育が浸透すると、被害を受けたアジア諸国の政治的な誇張と事実、アメリカの罪、そして日本のいい面悪い面を全部受け止めて、悪いこと、誤っていたことはきちんと認め、反論すべきところは堂々と反論できるようになっていった。
円卓騎士団事件以降、原則としてすべての情報を公開して自分で考えるようになったし。ついでに第二の義務教育は日本の生存公役制度、新学校制度の重要な核になったのだ。民主主義を維持し、かつ文明を制御するには、基礎的な環境学などを全員に、半ば強制的に学ばせる必要があったこともある。
そういうわけで、オレにとって大人と子供が一緒に勉強するほうが当たり前だった。
でも、ここには大人がいない。みんなオレと同い年ぐらいだ。そういう講座なんだな。

ガイダンスはぎりぎりだった。あいつらは岡野を待っていたのか？
まずわかってたとはいえびっくりしたのが、講師陣の豪華さだ。ノーベル賞・フィールズ賞受賞者がいる。どういう講座なんだろう、と改めて首をひねる。

「この講座は、〝1足す1は2〟〝ゼロで割っちゃいけない〟〝分数のかけ算はひっくり返してかける〟などの〝なぜ〟にちゃんと答える。それに納得できない者が集まったはずだ。だが簡単なことじゃない、〝1足す1は2〟の証明はこの教科書の後半にやっと出てくる」と、分厚い洋書を叩く。「まずみんな、自分が何も知らない、わかってないことを学ぶんだ。そして一番根本から、一つ一つ本当に理解していけ。講座が終わるときには、自分が何をわかっていて何をわかっていないかは知ることができるだろう」
オレも納得できない組だったから、それは嬉しいんだが。
昼休みに誰かを誘おうとしたが、なぜか無視された。岡野は木田たちといるし、こっちからは声を掛け辛い。ここの連中って知り合いが多いのか？
一人だけの知り合いとは話せないし、しかもみんなおかものだ。こうして一人で食べるなんて、たぶん初めてだ——
昼からの、科学基礎はケーコ可か——ありがたい。
座ろうとしたら椅子を引かれた。そいつの机を蹴りつけて座った——まあ海でもその手の歓迎はよくある。
そして、
「地動説を疑え」

いきなりの先生の言葉にびっくりした。
「そこの君？」
さっき岡野と話した木田が当たる。
「でも地動説は科学的真理、常識ですよ」
「証明してみろ」
みんな呆然。何人かはピンと来たような表情をする。
「はい、地球を一周すればわかります」
オレにとってはそれが当たり前だ。現に村上たちは、船で地球を一周したんだ。
「どこかの悪魔に騙されているのかもしれない、単に次元がねじまがっているのかもしれない」
「オッカムの剃刀」
「それだけじゃ証明にはならない」
「宇宙からの写真」
「国家の陰謀かもしれない」
「そういう考え方は非科学的で、非生産的」
「非科学的という言葉を使うときは、気をつけなきゃいけないんだ。逆にそれを盾にして突拍子もないことをいえばいい、という罠にも気をつけろ」

ふと、帆船が水平線から見えるのを思いだした。
ケーコに図を表示し、いくつか計算してみる。
「はい、これを回覧します」
と、その図を送信する。平らな海と、球形——円弧を描く海では遠くから船が見えるとき、微妙に違う。
そうか、本当に平らなら少しでも高いところなら、どんなに遠くても小さくなるだけで船は見えるんだ。
「ほう、確かにそうも思える。が——」
と、こんな感じで根こそぎ常識をひっくり返された。いかにオレたちが、自分で考えずに教えられたことをうのみにしていたか——。科学っていったい何なんだろう？
葉波と砂漠で過ごすより、家でぶらぶら遊ぶよりこっちのほうが楽しいかもしれない。いつもの授業、そして暗記と要領中心の試験勉強とは次元が違う。
ついでに宿題も。複素数という計算法も初めてだ。三角関数は知っているけど、具体的な数値を出そうとするとものすごい計算量になるんだよな——。
ただ、どうせならクラスのみんなとも仲良くやっていきたいけど。

放課後——といってももう六時、寮生活についてのガイダンスが始まった。近くの大学

――このへんはものすごく大学が多い――の学生宿舎を借りるらしい。
とにかく宿題が多いから、寄り道の余裕はない。寮についてすぐ食事――やっぱりみんな話しかけても無視するし、岡野はさっきの二人と話していてなんか近づけない。
部屋は六人部屋。繭じゃなくて二段ベッドか、はじめて見たぞ？　こんなボロがよく第二次関東大震災をもちこたえたもんだ。
風呂は狭いし大人数だから大変だけど、清水使い放題は半年ぶりだ。
久々にケーコが使えるから、葉波と――いや、なんかそんな気にならない。同室の連中も宿題やってるし、オレも気合い入れてやるか――ネットラジオのゲームサントラチャンネルを聴きながら。
よし、〈波高し〉が入った。この三日まともに寝ていないから、頭は疲れ切っているけど、この曲は結構きくんだ。

12

もやいを解くオレを見つめる、泣くことができず思いつめた目。
古くろくな屋根もないボート。雲一つない空、三百六十度ひたすらな水平線。風さえない。
葉波が海水を飲もうとするのを、取っ組み合って止める。オレの首を絞める赤く焼けすぎた手、悪魔の形相。

体をがくがくさせて、古い二段ベッドで目覚める。深く、短い眠りだった。
あまりにも宿題が多く、予習復習もしなければならない――いつもの授業はぼんやり波任せで漂ってるようなもの、この講座は全力で長距離漕ぐようなもんだ。
それに、どうもみんなに溶けこめない。どうにも、悪意ばかり感じる――特に岡野に話しかけると。
だれに話しかけても無視されるし、からかうようにオレの歩き方をまねて大げさにふら

ふらしたり、オレたちはとっくに卒業したレーザーガン――おもちゃの銃で、遠くからでも狙い撃てば命中判定がケーコに出る――を至近距離から撃ってきたり。
でもそれ自体は一ヵ月もない話だし、講座がきつすぎてそれどころじゃない。
それこそケーコ自体いじっていない。音楽だけで、メールもネットもオフにしている。
葉波からはたぶん何もないだろう――オレたちはあまりにもお互い知りすぎている。
いや、勉強しないと――葉波のことを考える余裕はない。まったく、なんなんだこの宿題は。
ああ、みんな頭が悪いわけじゃない。めちゃくちゃいい。
みんなガンガン、すごく鋭い質問をする。教授陣がまたものすごい――どんな突拍子もない質問も、真面目に受け取ってその深さを褒め、それを理解するために学ばなければならない分野を段階を追って示し、各段階の標準教科書を紹介してくれる。
特に岡野にはびっくりさせられた。ただ先に進んでいるだけじゃない――質問の深さが違う。

野村たちの話で、ちょっと岡村という名前が出てきた。
「そんな子いたっけ？」
と、つい首を突っこんでしまった。

「知らなかったのか？」
「一月も同じ屋根の下で暮らしたんじゃ」
木田がバカにした声を出す。
「同じ屋根？」
ぴんと来ない。オレたちにとって、屋根は居住メガフロート全体を覆う太陽電池幕だ。
あれ、オレはだれにも、岡野と暮らしてたなんていってないはずだぞ？
「ふん、たらい生まれの根無し草じゃわからないか」
明らかにバカにしている。あっちのほうが住み心地はいいぞ、このクソ暑い本土より。石炭火力発電は排気を海やビニールハウス農場に出してるからもうＣＯ２フリーだし、温暖化は一時喧伝されていたほどひどくはなかったけど、農業から出るメタンはどうしようもない。
しかし、岡野は別の名字？　あ、離婚か何かかな？　じゃあ余計なこと言っちゃいけないか。
実際、つい「岡村」と言ったら案の定めちゃくちゃに怒って、だれがその名をオレの前で言ったのか問いただし、その日一日野村は皆に無視された。
オレにももちろんしわ寄せが着たが、まあこれ以上悪くはならない。
と、帰って久々にケーコでメールでもと思ったら、ケーコが壊されていた。徹底的に。

他の荷物も荒らされていた。
少なくともケーコを壊すなんて――オレたち海の人間はやらない、七つ道具は命に関わるのだから。ここでは、してはならないことなどないのか。
「おい、誰がやったんだ。決闘なら応じるぞ！」
「それより、なんだこれは」
ＭＰＴとロープカッターなどが突きつけられた。あ――そういえば日本本土には持ち込み禁止だから港湾事務局に預けること、だっけ。
「それ？　道具だよ」
「道具？　ナイフじゃないか！　誰を狙ってきたんだ？」
おいおい――
「海じゃ全部必要なんだよ、いつでも。荷物関係の仕事だってあるし、いつ海に放り出されるか」
「ここは海じゃない！　ここじゃ、こんなものを持ってちゃいけないんだ」
「何かあったら」
おいおい、大震災で懲りたはずだろ？　どうするんだよ。
「いいわけになるか、やっちまえ！」
「船乗りめ！」

「彼女を狙う刺客か？」
「刺客だ！」
それから先はいきなり、押さえこまれ、殴り倒され――ルールも何もない、めちゃくちゃだった。恐怖で狂ってる、って感じだった。
気がついたときはどこかのクローゼットに閉じこめられていた。
七つ道具がないから明かりもない――参ったな。それにあちこちかなり痛めつけられた――野村と木田は明らかにみんなやってる護身術だけじゃなかった――
闇の中、どれだけの時間が経ってからか――岡野の声、「言ってあげる義理なんてないけど、陸上のルールは一つだけ、『空気読め』よ。『和をもって尊しとなせ』ともいうわ」
十七条憲法――そんな意味だったのか、ちくしょう！　もちろん船でも〝和〟は必要だが、何かが違う。船では誰かを徹底的に追いつめることはしない――自殺ついでに船に火をつけられたらみんな死ぬから。
オレはどこの船でもやっていける自信はあるが、陸上ではなにもわからない。
ぐっと怒りが荒れ狂うが、同時に恐ろしく冷たいものを心臓に当てられたような感じもある。
それで、ふと分かった。そうか、岡野にとって海は――オレにとってのここと同様、外

国同然――それで海もここも客観的に理解したのか、一人で、誰もそばにいないのに！

まして女だ、同い年の男と暮らすなんて何をされるか、という恐怖も――くそっ！

葉波――峰――オヤジ、オフクロ――春おじさん、百合姉――帰りたい、声を聞きたい――ケーコが、端末がほしい――海――涙がとめどなくあふれてくる。去年ハワイへの船上実習でもケーコは取り上げられたが、あの時は――みんなもいた――白状すると、ちょっと泣いたけど。

だが、泣き出すと思い出す。五年も前か、激しい船酔いで船乗りになんかなれるはずがなかった小さいオレ――苦しいよ、怖いよと泣きじゃくっていたオレを見て、みんな舵だけ自動にして船室に引っ込んだ。

助けて助けて、と悲鳴を上げた――オレは必死で甲板口（ハッチ）を叩き、激しい横揺（ローリング）れに翻弄されたが、開かないという嘘に騙された。オレが縮帆（リーフ）しなければ船が沈む、みんな死んでしまう、と――

もう吐くものもなく痛いだけ、震える足、大小ともちびったズボンが波しぶきに濡れ、くさい液が脚を伝う――それでまた泣き出すけど、泣きながらでも吐きながらでもやるしかなかった。笑う人も、抱いてくれる人も、叱る人もいなかった。

必死で、大きいみんながやっていることを真似て帆脚索（シート）を引き、何度も落ちながら――本当は一メートルもない、子供用の安全な帆桁（ヤード）だが――帆をまとめて縛った。

そしていろいろ帆をいじって、それに船が反応するのを知って夢中になり、いつか船酔いもおもらしも涙も忘れていた。

そうだ、あの時に〝げぼゆー〟〝泣き虫ゆーぼー〟はどこかに行って、〝嵐の長谷川〟が生まれたんだ。

そういえば、峰もあの手の荒療治で高所恐怖症を克服したんだったな――葉波は――泣いても何も変わらない、ここは嵐の船だ――逆らうな、風を体で感じて波に任せろ。いかに理不尽でも海に文句を言うな――『空気読め』が唯一のルールなら、勉強に支障が出ないようそれにあわせればいい。

オレはここに勉強しに来たんだ。おかものとなかよくしに来たのでも戦いに来たのでも、革命を起こしにきたのでもない。

そう思うと、別の焦燥感も感じる。もしかして、葉波も――ここは言葉は通じるが、中国の奥地はまだニュインも通じていない。頼りになるのはオヤジだけだが、そのオヤジだって忙しい。

昔の、自分が役立たずなのに気づいたときの痛みも思い出す――葉波がそんな目に、と思うと心配でならない。

声を聞きたい、画像でも顔が見たい。やはり端末が欲しい――

でもないものはない。海ではいくら泣いてもわめいても、清水（せいすい）も食料もタバコも酒も燃

料も、なくなればないものはないんだ。
食べものや水がなくても、あの時は葉波もいた――それもないものはない。あいつも今頃、表には出さないけどいろいろ辛い思いをしているだろう。
とにかく、今やることは――課題だ。
あいつらに、学校の力関係では勝てなくても、宿題は負けない。
課題は覚えている――公式も――忘れていたら作ればいい――ケーコはなくても、閉じこめられていても紙と鉛筆でやればいい。
何度もやったじゃないか、難破を前提に細索と天測、紙と鉛筆だけで現在位置を計算し、地図海図を作るのは。
落ちついて手探りで捜すと、小さな手回し懐中電灯、半分も使ってないノートがいくつか、コピー用紙と鉛筆があった。ナイフはない――くそ、最後の一本を岡野にやるんじゃなかった――が、がらくたをよく捜すとカッターが転がっている。
そうだ、ソロバンがあればいいんだが。いや、なければ作ればいい。ずっと習っていたのに、いつもケーコを使っていたから忘れていた。
これでできるはず、まず――
あ、ソロバンって自分で作れば、何進法にするか自由に変更できる！　今日やった、十進法は級数にすぎない、ってのはそういうことか。それさえわかれば――これは楽だな。

今は何時だ？　目の前には紙の山ができている。
ふと触れるとドアは開いており、もう夜は明けていた。サンドイッチとスポーツドリンクが置いてある。
誰だ？　岡野か？
彼女の部屋をノックすると、
「何？　バカ、今何時だと思ってるの」
岡野の不機嫌な顔、可愛いパジャマ姿。相変わらずの口調の刺に、なんともいえずほっとする。
「ありがとうな」
「何がよ！　いい、今日から絶対話しかけないでね」
「ああ」
一人だ――海に放り込まれたような寂しさと、開放感を同時に感じる。
「いう暇なかったんだけど、伝言がたくさん来てるわ」
と、ケーコと旧式パソコンをつなぎ、映像や音声メールを流し、プリントアウトを渡してくれた。海のみんなからたくさん来ていた。
やはり葉波からはなかったが、特に峰の『お前は誰にも負けない』という言葉に涙を抑

えるのが大変だった。
一人じゃなかったんだ。みんな――
ケーコがないことも、七つ道具を放り出して葉波と海に乗り出したとき――バカな漂流事件――のような解放感もある。そうだ、小さい頃は七つ道具もケーコもうっとうしくなることがあったっけ――
というかみんな六人部屋なのに、なんで岡野だけ一人繭なんだろうな。運がいいのか？

昨日の事件は結局、何事もなかったように――七つ道具がないだけ。
みんなの、そして岡野の無視は続いているけど授業がどんどんきつくなるからそれどころではない。
第一ケーコがないから、大量の計算を主に紙と鉛筆、せいぜい古い物がいっぱいある店で買った電卓でやらなければならない。先生は事情を理解してくれ、データの回覧では不都合がないようにプリントをくれるけど、特に三次元映像がないのは不便に思える。だれも何も貸してくれない。
ただ、計算があまり必要でない、ケーコがいらない授業のほうが多いし、大変だ。
基礎準備校の最後にやった、集合の概念――それがこんなに深く、数学のあらゆるところの本質だったなんて。ゼロと無限大も、これだけのことが――まだまだわりでしかない！

そしてガロアの原論文の対訳！　あの若さで――なんだか背筋が寒くなる。負けてたまるか！　我も人なり、彼も人なり！
一日十時間の授業、予習復習も暗記すべきことも多い。睡眠時間は四時間切っているし、ケーコがあったとしてもネットも電話も無理だろう。もうみんな口をきく暇も、オレにちょっかいを出す暇もない。
後に知ったが、全然連絡がなくケーコが発信する位置情報さえ絶えたことで、オフクロはすごく心配していたらしい。岡野が安心させていたが。前もバカやっちまったから、心配もわかるけど――
まあとにかく講座に夢中だった。何か考える暇があったら、指数関数の複素数での意味を追求され、いやというほどの演習問題を無茶な時間でこなし、さらにそれを純粋数学の言葉に訳すほうが先だ。
記号論理・集合論の言葉でちゃんと定義する、それだけで、今までオレは何をやってきたんだろうというぐらい世界が変わる。そうなると物理の見方も全然変わり、結晶とかだって群の考えを使うとこんな――。
今回の小テスト――集合論などと、数学オリンピックの過去問――は二位。岡野との差がありすぎたのは納得するが、悔しい。
このクラスのみんなは、こういうのがわかる連中ばかりなのだろうか？

そんなある日、突然寮監に呼び出された。
「悪いが、今日中に退寮してくれ」
「は？」
「どうも……な、それにちょっと急に、別の講座で人数が増えた。君以外にも五人ほど退寮する予定だ。他に」
どうも？　お前らが排除しようとしてるんじゃないか！
といってもどうしようもないので、かなり呆然としてオフクロに電話しようか――と思っていると、しばらくして岡野がやってきた。
「わたしも退寮組だし、あとちょっとだからうちに来てよ」
「え？　いいのか？」
「まあ仕方ないじゃない」
苦笑が妙に可愛くて、どぎまぎした。
「じゃ、荷物の手続きしようか」
彼女が部屋に入ると、ざわっと騒ぎが起きた。連中の、憎悪の視線が突き刺さる。
可愛いから人気があるのは分かるし、どうやら木田とかは本土のクラスメートだったらしいけど――

海育ちのオレの荷物はすぐまとまる。いつ身一つで救命ボートに乗るか分からないし、またトランク一つだけOKといわれても慌てないように、というのがたしなみだ。
授業が終わり、一時間ほど宿題をやって――まだまだ山ほど残っているが、やってもやっても終わる気がしない――坂を下りて大きな本屋で待ち合わせる。そして第二次関東大震災で一度壊滅し、風情は残しながら大きな耐震ビルの形になった古書店街を抜けて地下鉄に降りた。
「何駅？」
「何でそんなこと聞くの？　黙ってついてくればいいじゃない」
「はぐれたらどうするの？」
「メールくれればいいでしょ」
ま、そりゃそうだな。ってオレにはケーコがないんだ。
何度か乗り換え、駅にアーケードでつながる少し古い超高層マンション。
普通なら入口で手続きなどをするところだが、何もなしでオレの掌紋が受理された。
体内ケーコ一つで？　どうやったんだろう。
一階は銭湯や大きなロビーが主。
「なんだか老けた感じだな」
「そりゃ前は、本土のマンションなんて半分は老人ホームだったんだから」

〝皆で皆を食わせ、介護し、育て教え、文明と自由を保つ〟という当たり前のことが、実行となるととてつもなく困難だったらしい。新しい社会契約だ、と神谷さんに聞いた。

まず財政とか予算とかが問題になり、そして高齢化での労働力不足、とかなんとか――

日本など一時期はあまりの高齢化に、老人介護に国力の大半が費やされた時代があったとか。

今は中国やインドがものすごい高齢化だが、幸い情報・ロボット技術の発展でそれほど大変ではないようだ。

まあそんなことより、本土では岡野はどんな部屋に住んでいたんだろう。オフクロと親しいとかいう両親は――

かなり高い階の部屋に入る。うちより広い、そう思うと急にうちが恋しくなった。

「おじゃまします」

うちにはじめて入ったときの、岡野の気持ちが何となくわかった。

「悪かったな」この一言を言うのに、嵐の中帆桁（ヤード）を渡るより勇気が必要だった。

うちよりは広い、古い感じの３ＬＤＫ。

「荷物はここ、この繭を使って。本土での水道とかいろいろ、使い方はわかる？」

「ああ、テレビとかでよく見てるから。ご家族は？」妙に改まった声になってしまう。

「今日は帰りが遅いから、食べて宿題すませちゃお」

と、ラーメンの出前を待ちながらも宿題に取り組んだ。

「あのさ、計算は頭でやってる？　それともケーコで？」

「もう別々じゃないんだけど」

あきれたような口調。どうなってるのかな。

ふと、

「ふたりっきり、だね」

と、いたずらっぽい口調で彼女が口にした。

心臓が跳ね上がる。大波のように高鳴ってとまらない。制御できない。息が苦しい。もしここに葉波がいたら、どうからかわれたことか。

「おい――」

どうしていいかわからない――こんなときケーコがあれば、葉波の『帆桁端（ヤーダーム）から逆さ吊り』という警告があるのに。

「ああ……持ってるよな？　あのナイフ」

オレの最後の一本、チタン合金の小さなワンピースナイフ。人魚の操作感、亜熱帯の海風が強くよみがえる。強烈に帰りたくなる。

「え？」

「なら大丈夫だ、もしオレが理性を失ったら遠慮するな」

「バカ！　順序数の復習から始めましょ」
やっといつも通りになったか、と思ったけど、前は葉波もいた。そして、今は心臓がうるさくて集中できない。切れそうだ、早くご両親が帰ってきてくれれば――
「なあ、無限の順序数って絶対両端がくっついてる気がするんだ。それでメビウスの輪みたいに、ぐるぐる……」
「複素数空間のコンパクト化？　うーん、どうかなあ……」
岡野の両親は想像していたより普通の人。ただ、なんだか違和感がある。
その日は宿題もあったけど、あまりにドキドキして結局眠れなかった。

それから、どうも家では、彼女の顔を見るとドキドキして胸が苦しい。でも、予習復習や課題をやりながら色々話すのは最高に楽しいんだ。
「うそ、フェルマーの予想にも間違いがあるんだ」
「そりゃあるわよ。オイラーが二の三十二乗＋1は素数じゃない、ってちゃんと示したのよ。こうやって――」
伸びた黒髪が、はらりと耳からこぼれる。胸の谷間が――あ、そうか！
「一休みしようか」
「そ、そうだね」

心なしか、彼女の無表情が少し柔らかくなっているようにも見える。そのたびに胸がドキドキして、頭がカーッとして――逆に冴えてくる。問題に逃げたい。
「でも、よくあんなややこしい証明についていけるわよね。みんな混乱してたわ」
「レマク・シュミット？　ああ、オレは一級海技士（航海）試験に、年齢が足りないから資格はないけど学科は合格してるんだぞ？」
「それが？」
怪訝というか、ちょっと表情が曇る。
「自分がどこにいるか、目的地はどこかがわかれば、適切な針路を選べばちゃんと着くよ。あの証明は、目的がはっきりしてたから」
「間違ったら？」
「なぜ間違ったか調べ、また自分の位置を調べて目的地への最適航路を割り出す、そうすれば修正できる。それに」
と、いつも持っている細索を取り出していくつか複雑な結び方をして見せた。
「やだ、何しに紐なんて持ってるのよ」
「色々固定したり、太索が切れてたら端止めしたり、他にも――」
「もういい。あくまで海なのね、まともな直交座標より赤道座標のほうが慣れてるんじゃない？　あ、お茶入れるね」

「だから、海の辞書にややこしいなんて文字はないのさ」

ある夜。ちょっと厄介な群の宿題で、詰まって気分転換にと台所でなにか飲もうとしたら、岡野とはちあわせした。

「どうしたの？」

「ちょっと気分転換、何か飲もう」

「そう」

それっきり黙って台所に向かい、二人分クッキーを取り出そうとして、少し迷っていた。

「どこにしまったっけ」

自分の家なら普通全部わかってないか？　何かおかしいんだよな——

「おばさんを起こしちゃ悪いからな」

苦笑し、自分の荷物からハーブティーと、七つ道具の氷砂糖と海難クッキーを取り出した。

「このティーバッグ」

「うちの庭でできたんだ、といっても世話してるのは葉波ん家だけどね。結構人気あるんだぜ、百合姉がブレンドしたやつで」

「うん……おいしい」

「こっちのクッキーは、お世辞にもうまいとはいえないけどな……あの時は本当にうまかった」

「あの時？」

あ、しまった。

「ごめん、聞いてない？　葉波と流されたというか勝手に海に乗り出したことがあって、その時、丸二日我慢してからボートの底でみつけて、半分」

「聞いてる、みんなに」やるせないような、苦笑したような表情を浮かべ、「すごい結びつきよね、お互いの——」

「しょんべんなんて飲んでないぞ、海水同様、水分としてはマイナスになるから」

よくからかわれるんだ。

「どう？」

「難しい！　今まで、可換じゃない計算があるなんて考えたこともなかったんだぜ？」

「まあね、ここは覚えて慣れるしかないわ——」

立ち上がって、別の何かを探そうとして表情を歪め、頭を押さえた。

「どうした、故障か？」

「大丈夫、ちょっと——」

立ち上がったオレにふらりと、倒れこむように抱きついてきた。

しばらく目を閉じ、息をつくと、深呼吸をして、
「もう――大丈夫、ありがと」
そう見上げる彼女を、オレは抱きしめてしまった。
彼女は悲鳴も上げなかった。抵抗しなかった。ただ、驚いた、それでいて悲しそうな目で見つめ返した。
どうしたんだ、オレは――バカな、冗談じゃない――
暖かい、なんて柔らかくて――強靱なのに、壊れそうな感じ――こんな――
「それで、どうするの？」
その言葉で、日が昇って霧が晴れた。
「ごめん――明日にでも」
「出て行くことないわよ、同罪だし――わかってて？　それとも――なんでもない。ずっとましょ」
「え？」
「おやすみ」
なぜオレはあんなことを――なぜ彼女は抵抗しなかったのだろう――なんで、あんなに悲しそうに――

眠れるとは思えなかったが、気がつくと寝てしまって目が覚めるとぎりぎりだった。彼女もで、顔をあわせると気まずいよりまず苦笑が出たのがほっとした。
傘を手に駅の乗り換えで、テレビで知っていたネオン街というのが見えた。
メガフロートにも、そういうところはある。下手に狭いから、それが見えてしまうんだ。港にそういうのはつきものだし。
「どこにでもこういうのってあるんだな」
なんとなく、あえて普通に話しかけたかった。彼女も自然に答えてくれる。
「でも、今はそれが害じゃなくって富を生むようにしてるわ。〝森は常に腐敗があるが、豊かな生命には必須〟が基本方針だから」
「海だってそうさ」
違法な稼ぎはできるだけ合法化する――二十世紀後半、ヨーロッパではじめられた知恵だ。大麻などの禁制品は〝地獄〟など場所を限定して許可し、犯罪より合法的な商売のほうが儲かるように誘導する。
どこであっても闇を社会の部品として活用し、闇の力で重大犯罪を制御、最低生活保障と予防精神医学、心理教育で犯罪の動機を減らす――どうしても社会そのものに適応できない者は〝地獄〟でそれなりの幸福を得られる。
円卓騎士団にマフィアの若いボスと、そのボディーガードがいたことも重要な影響があ

る。

二十一世紀初頭はテロが重大な問題になったけど、コンピュータと闇、両方の目から逃れてテロをやるのはほとんど不可能、わずかな反円卓テロがあるぐらいだ。

あの時代――人類史上のいつどことも違い、少なくとも飢餓はないし、世界のほぼ全員が最低限の教育は受けている。

今は多様な共同体が許されている。どんな集団にも、無茶な資源の浪費や環境汚染をしない、全員に最低限の衣食住と教育、医療、介護を与える、情報に触れることを禁じない、邪悪な支配をしないなどの最低条件はあるけど。だから本来ならそんなに不満はないはずだ――でもオレもわけのわからない不満はあるし。

なぜか戦争もほとんどない。〝人類の幸福な生存のための総力戦〟はあるけど、武力を使う戦争じゃない。『第二次世界大戦』をあれから少し気分転換に手写ししたけど、逆になぜ今戦争がないのかが不思議なぐらいだ。

「難しいのは、配給や生存公役システムに入ってくる腐敗よね。それをプラスに利用するのって大変なの」

「そうなんだ」

「特に邪悪な人間、誰だって邪悪はあるけどそれがいっちゃってる連中って多いからね……腐敗を利用するの自体は江戸時代が参考になってるようね、あれは闇もうまく利用して

たから。二十世紀後半、反腐敗ヒステリーで一度壊れたんだけど」

彼女はなぜか、円卓などのシステムについても妙に詳しい。

「そういえば、前読んだ本じゃ、昔の人って今みたいな――ほら」

と、街角の監視カメラやカメラなどがついた虫型ロボットをあごで指し、

「ああいうのって監視国家になるって、みんなすごく心配してたみたいだけど」

「ああ、『１９８４年』コンプレックスね」

岡野がちょっと不愉快そうに表情を歪めた。

「ビッグブラザーが自分は見られないでみんなを見たらそうなるけど、見てる人もその後ろから監視されてるの。誰でも何でも見ていい、その気になれば誰だって、もちろん円卓騎士団を見てもいい」

「それをのぞきに悪用するヤツがいたらどうするんだ？」

「ああ、それで知らされてないのね、あなた考えなしにやりかねないから。残念だけど、見る者は見られる――まともにしていれば誰も気にしないけど、変に誰かのプライバシーをのぞこうとしたら逆に注目を集めて、名誉を失うの」

「やだなそれ」

名誉はオンラインの現金になるし、他にも……すごく痛い。

「邪悪な人間は厳しく監視されてるしね。第一見てるのは円卓だし――いい、円卓は一人

一人の人間なんて興味ないの。一人一人の人間そのものだって、わたしたち人間と同じようには認識してないのよ。わたしがあなたに話してるとき、あなたのここの」

と、岡野はオレの額に触れて、

「右から何番目の神経細胞に話しかけてるわけじゃないわ。それと同じで人類全体、うう
ん地球（ガイア）――宇宙全体と接触してるの」

「ど……どうやって？」

なんだそりゃ？

「ネット全体、ものすごい数のカメラ、あらゆるコンピュータのデータとか観測機器。ネットの、世界中の人が作るテキストさえそのごくわずかでしかないのよ、むしろ人の呼吸数とか細胞の電気――ケーコと連動したペースメーカーとかのデータ、それに街角のカメラに映る人の表情の、人間は意識しないパターンのほうが大事だったりするの。それを通じて、昨日熱力学で習ったでしょ？　一つ一つの空気の分子はわからなくても、統計的にわかることはできる。それと同じように――ううん、人が人の顔色を、ものすごい量の情報を瞬時に処理して読むように、あれは人間の大集団の、ヒトラーを生み出したような意識みたいなもの、太平洋戦争を起こした空気と直接交渉してるようなものなの。

人間を動かす力が、いちばん強いのはなんだと思う？」

「道徳、法、利害、宗教……」

「あなた、本当にそれで動いてる？」

ぎく。

「あ、ええカッコしいだけか」

悪かったな。

「〝みんながどうしてるか〟　〝全体の空気〟、〝飼主（カリスマ）の指導力〟よ。人間なんて七割は羊みたいな群れ動物だから。あれはそれを制御、少なくともそれ、空気そのものと対話してるの。ううん、カトリックやイスラム教の、神はともかく教団の空気とは対話してると言っていい……科学、近代文明に反対してた宗教さえ、おおかた思い通りにしてるんだから」

なんだそりゃ？

彼女の口調がなんだか激しくなる。

「それに人間なんてごく一部でしかない、あちこちで進んでる、木や草、土や海の微生物にすごく小さな機械を入れて電気信号とかチェックしたり、それに大規模な天文、地球観測！　パパが解析してる波や海の細かな」苦々しげに顔をゆがめ、オレの胸に針のような痛みが走る。「そんな情報全部が今の聖杯になってるの。人間なんかには想像だってできないわよ！」

「なんだそれ」

「このＵＲＬをチェックしてみなさい、〝円卓は何も隠さない〟――あ、ケーコ持ってな

いんだっけ。面倒ね」
　いいながらメモしてくれた。
　徹底した情報公開が、円卓騎士団の結成以来の基本方針の一つだ。騎士などの情報は、人間がチェックするには何万年もかかる偽層情報の海に紛れさせる、という形で隠すけど。
「人間って、超知能とか神とかも、結局人間に似たものとして考えちゃうのよね――でも、違ったの。あれが人間を殺さないのは、単に運がいいだけよ――いつ方針を変えるかわからないから怖いの。たまたま善に見えるスカイネットだもの」
　スカイネット？　ああ、去年３Ｄにリメイクされた《ターミネーター》か。オレはまだ子供版しか見てないけど。
「でも、すごく寛容で、ほらこんなことしゃべっても大丈夫なんだ！　自由じゃないか」
「文明の基盤を崩さない程度に自由、寛容を崩さない程度には寛容、ね。第一プライバシーなんて実際にはないも同じじゃない。情報公開とみんながみんなを監視してるから、国とかいろいろな機関はコントロールできてるけど……
　それにこうも環境税が高いと、財産の自由なんてないも同じ、少なくとも反円卓派はそう考えてる。それに今は、最低限しか求めてないからなんとかなってるけど、百年後はどうかな――あれが今後どうなるかなんて、誰にもわからない」
　ふと、彼女が寂しそうな表情をして、オレの手を取った。

　心臓が猛烈にドキドキし、口から飛び出しそう。
「わたしは、円卓が――この世界がだいっきらい」
「でも、別の世界がいいのか？　あれを止めてなかったらオレも――どっちも、みんな死んでたし」名前を呼べなかった。なんて呼んでいいかわからない。だから間が持たないんだ――「前にひどいめにあったろ『何もしなかった未来』で。あっちのほうがいいのか？　それとも『天国と地獄』？」
「他にも考えられない？　あ、そろそろ誰かに会いそうだから、駅に着いたら水道橋側から来て」
「ＯＫ」
　岩波ホール側から上がり、新後楽園球場に向かう方向から――このへんのややこしい道は一度探検してる。羨ましいのはたくさんの古びた小さな稲荷の類だ。震災も乗り越えてしっかりとこの土地を守ってる、って感じがする。
　メガフロートにも寺社や教会はあるけど、特に老人はちゃんとした神社がないから嘘の土地だ、と文句をいうことが多い。去年歴史と同時に主要宗教の教義はやったし、日本では小さい頃から「古事記」などは読まされるから、その文句がわからないのは怖い、というのはわかる。

13

真実とは何だ？
決して直視したくないもの。
それに直面するには、ハンマーを振るうまで見ても見えず触ってもわからない、堅固な壁を打ち砕かなければならない。
自分だけでできるのか？　他人がしてくれるときもある、雷のように来ることも。神の御手？
少なくとも無麻酔で手術するぐらいの痛みの報酬は？　しばしば死、だが自由――

なんでこんな言葉を思い出すんだ？　どんな夢だっけ？
葉波？　なぜ、どこへ行くんだ？　オレを置いていくなよ、海の果てまで、なにがあっても一緒だって――
あ、朝か、また――いや、今日はゆっくり寝てていいんだ。

やっと講座が終わった。といっても、最終試験の結果次第では科学五輪特待生として次の合宿が、とか国費上級学校とかいう話もあるけど、できれば早く海に帰りたい。
帆に風を受け、海をおもいきり航(はし)りたい。思う存分繭でネットしたり録りためたのを見たい。新しいケーコもいるな。
今朝は岡野と二人きりだ。両親とも忙しいらしい。でもありがたいといえばありがたい、彼女の両親はいい人だけど、若すぎてちょっと世話が過剰で、正直疲れる。
食事も豪華すぎて家庭料理って感じじゃなかったり、逆に忙しいからって出前が続いたり――おいしいけど飽きるよ。まあ寮の連中から見れば贅沢な悩みだけどな、給食というか配給に近かった。
講座自体はどうだったんだろう。
何でゼロで割っちゃいけないのとか、小さい頃ちゃんと答えてもらえてなかった質問に、消化しきれないほどちゃんと答えてもらえた。宿題としてやるべき教科書も、普通にやったら何十年かかるんだ、ってぐらい紹介された。
どれだけわかってないのにわかったふりをしてきたかも、少しはわかった。すごい。
みんなにひどく――残念というか、連中を殺してやりたいのが本音だ。質問と小テストで散々へこましてやって、少し気は晴れた。先に進んでいれば勝ち、という授業ではなく、とことん理解の深さを問われたから助かった。木田みたいに解析は国際修士まで進んでい

たのもいたからな。岡野は別格。
でも、いくら嫌な奴でも、数学などでわかりあえる人がいるのは嬉しい。ネットでは世界中の数学好きとも交流できそうだし――
「帰りの船は明日でしょ？　今日は東京見物にしない？」
「あ、じゃあ、ケーコ買いたいな」
オヤジも一応ＯＫしてくれた。壊されたけど、バックアップデータはうちの繭にある。ケーコを買えば、久しぶりに電話やメールで――忙しかったのはあるけど、ずっとなぜかやらなかった。岡野の家の繭からも。
こんなにケーコなしで過ごしたのは初めてだ。急に、まるで丸一日飲まず食わずのようだ。
「よかったら、同じ脳直結型にする？」
「え？　やだよあんな欠陥品。海で壊れたら死ぬだろ」
「改良されてるからもう大丈夫よ。それに、国費上級学校に合格してても海に戻る気なの？」
今の言葉を、聞かなかったことにした。
「それにああなったら仲間も迷惑するし。手術にどれぐらい？」
「そうね、慣れるためのリハビリを入れて一週間かな――通常版なら」

「アホいうなよ、夏休み終わるって」
金のことをきいたんだが。
まあ、もちろん海のみんなは大喜びで飛びつくだろうな、最新型ケーコはみんな憧れだから。みんな、岡野のことをうらやましがってたし。
でもオレは元々、あんまりケーコは好きじゃないんだ。特に船ではまず使わない。余計なものなしに、肌で海を感じるのが好きだから。
「ついでにディズニーランドにも、行かない？　一人で行っちゃ駄目って言われてるの」
つややかできれいな色の唇が、妙に気になる。
「オレはいいのか？」
「いないより、ましでしょ」
言葉に心臓が跳ね上がり、自分でも顔が真っ赤になっていないか怖くてトイレに逃げた。
踊り出したいような、逃げ出したいようなどうしようもない気分。
どうしたんだろう、オレは――彼女の顔をまともに見ると胸が苦しい。できたら繭に逃げ込んで宿題でもいいからやりたい、という気持ちがある。
出かけてみると天気が悪い――でも、われながら嫌になるぐらいうきうきしている。
雨はやんでいるが、かなり台風が近くて風が強い。雲が流れている――でも何かが違う。

この駅は乗降の音までディズニーか、呆れたもんだ。
ディズニーランドはよちよち歩きの頃一度連れてきてもらったけど、やっぱりすごい。
夏休み終盤の人波も。
そしてよく見ると、やっぱり本土の連中のファッションセンスって違うよ。
岡野みたいにサングラスだけとかも結構見かける。最新、って感じだ。オレもそう見て欲しくて、サングラスを買おうとして、
「みっともないからよしなさい」
と、岡野に止められた。
講座でも、オレはやっぱり浮いてたよな——興味さえあれば、世界中からいろいろ吸収できるんだけど。
海側にモノレールで行くと、もうここはメガフロートだな、と気づく。
潮の香自体はかすかだが、海という感じがはっきりする。
なんとなく、下が大地か海かはわかるんだろうか。メガフロートで生まれ育つと普通だけど——おかものにとっては、メガフロート自体が怖いみたいだ。
空をふと見上げると、かなり強い風。台風がかすめたんだっけ。海は時化だな。
彼女がアイスクリーム売り場にオレの手を引っぱり、それで全部ふっとんだ。楽しむか！

「わたし、あいつが嫌いなの」
「あいつ？　彼氏か？」
「バカ」
ふといって、彼女はゲースターの台に上った。くっついて立ったまま下半身を固定され、彼女は魔法剣、オレは魔拳銃とホーリーナイフのコンビを選んだ。
備えつけの接眼３Ｄハイビジョンディスプレイを固定すると、景色全体がおどろおどろしい魔界と化す。
唐突な落下から反転急上昇、一気にループ。大地が歪み、あちこちから魔物が襲いかかり、視界が輝く雲と放電の嵐で覆われる。
なんとかお互いを守るポジションを見つける。
「パパよ」
「ああ——」
あいつ、って父親だったのか。
「嫌になるぐらい、あなたそっくりなのよ！」
叫びながら、剣を大きく振り下ろしてドラゴンの首をはねとばす。すごくきれいな動きだ。

「外では英雄で、家ではいばってばかりでまるっきりだらしなくって、女心には鈍感で！」
「悪かったな」
ハービーをつぎつぎに狙撃し、ナイフで翼蛇を斬った。
「なにかあったときだけ張り切って、ふだんはまるっきりバカで」
「おほめにあずかって光栄だな、でもそっちだって」
「何よ」
あれ？　あまり会ってないけど、岡野の親父さんってそんな感じだったっけ？
「ほらそっち！」
くそ、息が合わない――葉波だったら！
「ハナのこと、思い出してるの？」
びくっとしてミス、大ダメージを受ける。
「悪かったわね、いい相棒じゃなくて」
「ないものねだりしても何にもならないだろ。がんばるからそっちも」
とにかく近くの巨大羽虫を次々に撃墜した。
「それに、わたしは――円卓も嫌い」
「オレもこの世界、好きじゃないよ。義務ばっかり多くて――でも、選べない」

「どういうこと？」
「人間の世界がいやでも、一人で生きていくのは無理なんだし、まとまって正しい方向に行かなきゃたくさん死んじまうんだから！」
と、中ボスのケルベロスの目に銃弾をぶちこんだ。
「今だ、突け！」
葉波とだったらこんなこと、言う必要はない。ほら、タイミングがずれた――かばってこっちがダメージを負う。ぎりぎりだな――
まあエンディングのときには、そんなの忘れて楽しんだ。
「次、どこ行こうか？」
彼女も楽しんでいるようだ。すごく可愛い笑顔にどぎまぎする。
「そろそろ昼にしようか」
と、オレは自然に彼女の手を取った。心臓がばくばくし、でもふしぎと落ちつく。
彼女も抵抗せず、そっと手を任せてくれた。
温かく、すごく柔らかい手――葉波と違い、ロープと海水で固まっていない。そういえば、葉波と最後に手をつないだのはいつだっけ――
嵐のとき以外、手が触れるたびに反応するのはいつからだろう。葉波の顔を見るたび、声を聞くたびに胸が苦しくなるのは。でも、岡野にも同じように――

「なに考えてるの？」
岡野の、ちょっと怒った表情。
「罰、お昼おごりね。あ、ちょっと――ん」
体内ケーコで誰かと話しているときの癖、ちょっと口の端がむずむず動く。誰と話してるんだ？
「こっちにしよ」
と西部街に向かい、寂れた感じのケイジャン専門店に着いた。でもかなりの行列になっている。
行列で待っていると、すごい美人がこっちに歩いてきた。
スポーティな服装、筋肉質にすらっと伸びた脚と豊かな胸の谷間がまぶしい。濃く日焼けし、野性的な色香が太陽のように放射されている。
この人の海でも、圧倒的な存在感で皆の目をひきつける。
「由！　久しぶり」
え？　その声――声さえ微妙に違う、違う――
「葉波ぃ？」
声がひっくり返った。嘘だろ――一カ月も経ってないのに。
「どうしたの、全然運動もしてないでしょ。すっかりなまっちろくなっちゃって！　久し

ぶり、えまちゃん。でもネットでいつもいっしょだったしね」
あれほど聞きたかった、明るい声。目がキラキラ輝いている。
オレは何も言えなかった――やっと席が開いた。三人席？　葉波が来ることを、あ、体内ケーコで待ち合わせたのか。
割とおいしい、鉄鍋そのままで出てくる料理を三人でつつきながら、なんだか言葉が出なかった。
「どうだったの？」
「オレ？　ひたすら勉強。広かったろ？」
「うん――すごかった。大地もあんなに広いなんて。おじさんたち、すごいね、あんなに広く森や農地にしたんだね」
「ああ。チェンさん、元気だった？」
「うん、由によろしくって」
「どんな意味だか」
「そんな意味よ」
すごくきれいになった――いや、前から美人だったんじゃないか？　目が砂漠の星みたいだし、キャップ型ケーコからこぼれる金髪は陽に輝く波しぶきのようだ。
『帰ってきたときは、二人とも――きっと違っているはずよ』

百合姉の言葉をふと思い出す。変わったのか？　ちくん、と胸が痛い。
「じゃ、行こうか」
待ちきれないように葉波が立つ。
「ノンサッチ号？」
「当然！」
昔の木造帆船が、いくつかディズニーによって復元されている。
係留されたまま、内部でピーターパンのショーをやったり、海に出ることも、時には中国まで航行することもある。
特にイギリス軍艦シリーズはとても人気があり、オレたち帆船を練習船にしている、海の人々にはたまらない。一度行ってみたかった。
岡野といってもつまらないだろうが、葉波となら最高だ。
「それに、行きたいところがあるの。言いたいことも」
と、葉波がオレの手を取った。固い手に安心する。向こうでどうだったか聞く必要はないな。大変だったんだろうけど頑張ってきたんだ。オレの手は少しなまってる、でも勉強はしっかりした。
「あ」
岡野が小さく声を漏らす。

開いている左手をどうするか――さっきまでのように、岡野と手をつなぐわけにもいかない。
ちょっと動いた岡野の手を、葉波が取った。
「やっぱりいいな、柔らかくって」
「でも、彼はこっちの手が好きなんでしょ。――さよなら」
岡野がいきなりそういってオレを濡れた目で見つめ、手を振り放して離れた。
「由、追いかけなきゃだめ！　さもないと、二度と会えないわよ！」
え？　強引に葉波がオレの手を引っ張り、人波にまぎれて四次元ミラーハウスに入った岡野を追った。
「おもてからはさんで」
「ともで」
一言だけ交わし、ミラーハウスに入った。
いきなり合わせ鏡に上下左右をはさまれ、平衡感覚を失う――数秒後照明が消え、気がついたら目の前に長い通路ができている。
「え」
う、気持ち悪くなってきた。それで四次元か、ひどいな。
そうなると――そうだ――

ほとんど目を閉じたまま手探りでそろそろ歩く――変形でできた通路の向こうに、岡野がいた。
「あ」
「よ」
次の瞬間、また闇。
逃げた彼女を追う。
ずるいな、ひょっとしてあの体内ケーコ、この迷路の地図をハッキングしてるんじゃないか？
なら、唯一ケーコを持っていないオレは認識されていないはず。
なんとなく探していると行き止まりに、岡野がいた。
オレの横を走りぬけようとしたのを、腕を伸ばしてつかまえた。
勢いで倒れこみ、唇が重なる。
「あ」
彼女の顔がゆがむ。
「どうして！　どうして、どうして……わたしはもう――ううん、生まれつき――わたしが誰か知っても、追ってくれるの？　どうして――本当に知らないの？」
泣き崩れる彼女を思わず抱きしめ、キスで口をふさいだ。

しばらくキスが続いて――正直、ずっとこうしていたかったが、ふと気がつくと出口へのほとんど一本道ができていた。そして、目の前の鏡に上下反転した葉波の姿。
ばっ、と後ろの鏡を体で割りそうな勢いで彼女が離れた。
「行こうか」
声をかけて手を伸ばすと、手は拒否して、でも並んでそのまま出口に向かった。
「お待たせ」
出口での葉波は、なんともいえない泣きそうな笑顔を抑えていた。
なにか言えよ――せめて。いつもみたく、帆桁端（ヤードアーム）からぶらんこさせろよ。
「待ってたよ」
そのまま、三人黙って――少し、手を伸ばしても触れない程度に距離を置いて岸に、ノンサッチ号に向かった。
着いてみると、あまりに高くマストがそびえている。
「あんなところに人が登ってたんだ」
「学校船にだって、あれぐらいのマストはあるよ」
「ああ、あのとき――すごかったな、なんで怖くないのかな」
怖いさ、もちろん！　でもオレがやらなかったら船が沈み、みんな死ぬんだ。必死で我慢してるんだ――葉波は昔の、〝泣き虫ゆーぼー〟も知ってるけど――

さりげなく見回りながら索具（リギン）などを確認する。完全復元は本当だな、いつでも人数がそろえば出港できる。
「船底はどうかな」
「たまに航（はし）るからね、ちゃんとカキ殻は取ってるはずよ」
「カキ？」
「船の底にはフジツボとかいろいろつくのよ。掃除しないと、要するに摩擦がひどくてスピードが落ちるし、フナクイムシが木材を食い荒らして壊れちゃうこともあるの」
「なんだ」
「どんなだと思ったんだ？」
「教えない」
普通に戻った、かな？
タラップは舷側ではなく、鎖索孔（ホーズホール）につながっている。
「水兵扱いね」
「出口は舷門だよ、出世して出るって事かな」
「ええと、ちょっと」
岡野が体内ケーコをチェックしているようだ。
「まず最下層甲板（オーロップ）から回ろうか。春おじさんがコンスティチューション号を見たときっ

て」
「そうそう、大砲に体を入れてみたんだって？」
「それでバーン、って誰かが音を出して、びっくりして」
岡野を外して話しているのが、ちょっと悪い気もするけど――ここで話すには、どうしても海の言葉になる。
「外で待つか？」
「だめよ、えまちゃんも来て」
また、二人とも寂しそうな目で互いを見る。
「本当はすごいにおいなんだよな、何百人も全く体を洗わない男が押しこめられてるから」
「いくら完全再現といっても、そこまでは無理よね」
「この音、何？」
ふと岡野が、小柄な彼女さえ頭をぶつけそうに低い天井を見上げた。
「ああ、索具（リギン）――縄に風が当たって鳴る音さ」
「いい音してるわね、ちゃんと麻で作ってるんだ」
葉波と二人、うっとりと耳を澄ます。
「そうそう、オレたちの新素材ロープじゃこんな音出ないよ」

「この大砲もちゃんと再現してるね」
「すごいよな、こんなのを人力で動かしてたなんて。うわ重い」
ふ、と一歩下がっていた岡野に、葉波が手を貸して階段を上らせた。
かなり急で少し揺れる、なんだか怖い。おかものには危険か。
「ごめんね」葉波が小声で、「でも、あたしたちは海で生まれたの」
「わかってるわよ、わたしが入る余地なんてないって。みんなにも言われたし」
「違う、わかってほしいの、少しでも」
何の話だ？　女の子同士の話ってわからん。
艦尾楼（ブーブ）に着いたとき、ふと葉波が海を見て索具（リギン）の奏でる音に耳を澄ませ、ふっと言った。
「ねえ由。もし、今この艦が転覆したら、どっちを助ける？」
え？　きれいな目が、まっすぐにオレを貫く。足が震える。
「む――両方助けるよ」
「できるの？」
厳しい目。本気の目だ。
できるだろうか？　口だけじゃなくて？
あの夢を思い出す――
「絶対二人とも助ける。オレは死んでも」

「ばかぁっ！」
突然岡野が怒鳴った。
「それで助けられても、嬉しくもなんともないから。絶対そんなことしないで」
オレの袖をつかみ、顔がくっつきそうなぐらいに寄る。あまりの形相にぞっとする。
どうしてそんなに怒るんだ？
「あ……知らないの、パパが――」
え？　みるみる、涙の粒がふくらんでいく。
「はっきりしてよ、知ってるの？　知らないの？　こんなのひどいわ！」
血を吐くような声、岡野が泣き出した。周りの普通の客が、びっくりしたようにこっちを見る。
「知らないわ」
岡野が葉波を、信じられないような目で見た。
「なんで、脳がつながってもいない他人のこと？　言っちゃったのよ、この夏、あなたが彼を追いかけて砂漠に行くつもりだった、って。そのお返しに、もう言われてるとばかり思って――」
「あたしは言ってない、それにあたしたちは、おたがい嫌っていうほどわかってるから。由がえま――恵美（えみ）を好きだって事も」

ガヤガヤ、バンバン――遊園地の効果音、群衆の音がまるで場違いに響く。そして、かすかな潮風の香り。

「葉波の辞書に報復はない、それが、最後の清水(せいすい)でも」

「清水(せいすい)？」

「真水のことよ」

オレが一番知っているんだ、報復しないことが、最悪の報復になるんだ！　心があるのならば――それを思い出してしまって、胸が裂けそうなほど苦しくなり、オレは甲板を強く踏みつけずにいられなかった。

「本当にわかってないの？　それともずっとからかってたの？　わたしは――円卓騎士団、岡村晴の娘、岡村恵美(えみ)よ」

整った顔が涙に崩れる。岡野――岡村恵美の言葉に、オレの時間は止まった。

円卓騎士団事件――オレにとっては本や映像の中の歴史だ。

単純に言えば世界的な恐慌、貧困地域の社会崩壊、環境災害が文明崩壊に至るのでは、という危機感で、欧米富裕層の選民・白人至上主義秘密結社が人工伝染病などで人類の大多数を殺そうとしたのだ。まず人種……白人以外全員。ワクチンを投与されるエリート層以外の白人は、遺伝子などで選別されて半分程度に。

地球は百億に贅沢な暮らしをさせるには小さすぎる、なら選ばれた人種が生き残ればいい、ノアの箱舟と同じ――聖書のヨハネ黙示録などを真に受け、黙示録騎士団と自称したという。

その計画は極秘裏に、莫大な資金と強大な権力によって進められた。

だが、インターネットにできた気ままな集まりがそれに気づいた。世界中の、あまりに多様で有能な人たちが何となく集まってしまった。地球と人類、人道、あるいは真の神、そして真実に忠誠を誓った人たちが。

何篇もいろいろなジャンルのよくある冒険小説が集まったように、ごくわずかなメンバーが圧倒的な敵と戦った。

暗殺、謀略、裏切り、口封じ、引退した老スパイの暗躍、サイバースペースの戦い、怪盗の脱獄劇、事故と見せた殺人を解き明かす名探偵、カジノでの対決、元特殊部隊員と暗殺部隊の銃撃戦、最新鋭機と旧式機の空中戦、嵐の中海賊まがいの新鋭戦艦斬りこみ奪取、拳法の達人による人質奪回――

ただ、局面を打開したのは誰も想像もしないこと、今は聖杯探求と呼ばれている行動だった。円卓の騎士団と名乗った彼らが、黙示録騎士団研究所のコンピュータにアクセスしたのだ。

今の、基礎準備校から最低限遺伝子を学んでおり、また今集合論の特別講座をやったば

かりのオレにはわかる、人種生物兵器を作るのは不可能だ。人種を集合論的に定義しようとするとどうしようもなくなる。そして彼らは教養あるエリートであり、同時に人種とゆがんだ信仰にとりつかれていた。

その矛盾で狂って――狂気じみて超高性能な複合コンピュータが作られた。

地球全体に広がる、あらゆるコンピュータがつながるインターネットも、コンピュータ自体の発達、GSBNと都市圏の光ファイバーなど回線速度の向上で、それ自体が超巨大な超並列コンピュータ、データベースになっていた。

そして円卓騎士団の別働隊だった天才トリオ、ギャラハッド・パージヴァル・ポーズと呼ばれる三人が中心となって、半ば事故でめちゃくちゃ危険で大胆な脳＝コンピュータ直接接続を作り出し、彼ら自身が実験台になった。

その三者がつながったとき、それが起きるのは必然だった――が、そのことは本人含め誰も知らなかった。

それ――人格としてはアーサー王、システムは聖杯と呼ばれる――は人間を圧倒的にしのぐ知能を持ってしまったのだ――その日のうちに黙示録計画の証拠を暴き、研究所を完全にハッキングしながら、ついでにリーマン予想を証明するほどに。

聖杯は人類を滅ぼすのではなく、選別するのでもなく、全員を生かす道を選んだ。人類にとっては実に幸運なことに。

まあ、幸運かどうかは、それを知っている人に言わせるとわからないそうだ。

黙示録側の研究者は伝染病の基本的な性格――感染性、潜伏期、発症率、死亡率を遺伝子工学の粋をつくして調整した。

感染性は人類全員が確実に感染するほど高く、複数のルートで。

潜伏期はできるだけ長く。潜伏期が短く致死率が高すぎると保菌者ごと病原体が全滅し、人類全体には広がらない。

そして発症率――遺伝子をまず人種、そして知能や性格などでマーキングし、条件を満たす者は確実に発症、満たさない者やワクチンを投与された者は絶対に発症しないように。

もちろん死亡率は、発症したら百パーセント。

病原体は世界中の、おおよそ近代文明と接触のある人すべてに蔓延していた。

だからこそ、アーサー王が変更していた病は、ほとんど全人類がかわるがわる発症した。数日の間体がうまく動かなくなり、激しい心身の苦痛――ある種の神秘体験に至るほど。自力では数日も生きられない重病人の介護はなんとかできるけど、殺し合いはとてもできないほど。ついでに、その病はエイズとマラリアの病原体も殺し尽くし、根絶した。

同時におおよそコンピュータにつながるすべては止まっていた――中国やインドなど非白人核保有国の核を封じようとした軍事作戦も停止させられた。逆に非白人核保有国も、怒り狂いながら報復攻撃に出ることはできなかった。ほとんどの機械が動かなかった。

その間、アーサー王によって世界中のコンピュータやテレビ、ラジオ、ロボットなどがハッキングされ、世界中の人に黙示録騎士団の陰謀を含め、あらゆる情報を開示した。自分の正体も明かし神を名乗ることなく、さまざまな面を持つ真実をありのままに。

政治的な真実だけでなく、人間の本質まで。誰もがどれだけ、教育や宗教、文化なども含む邪悪に支配されているか――それを破って自分の魂を取り戻し、自由になる道も。

それが人間との発想の違いだった――人間だったら混乱を恐れ、社会を守るために肝心な情報は隠す。または神を名乗り、権威を持って命令する。だがアーサー王は無造作に、すべてを白日の下にさらした。また人間の革命者は、反革命を恐れて恐怖政治を行う。だがアーサー王はそうしなかった。

そして感染を予防され、唯一自由に動けた円卓騎士団の活躍で世界は再建に向かう。

引き続き膨大な、さまざまな面を持つ真実が、世界の隅々まで伝えられた。

世界全体が極度の貧困、無知と全面的に闘った。どんな貧しく偏狭な地域も円卓による技術革新が産んだ桁外れの生産力と莫大な余剰労働力を活かし、まず充分な食糧などが与えられ、治安を回復させられて自給自足と緑化が進められた。そして円卓の意志として情報に触れられない者が出ないよう、手回しや太陽電池で動く、ＧＳＢＮやラジオにつながる最低限の端末が全人類に配られた。その端末を通じ、円卓が主に常駐ソクラテスを通じて、圧制下にあった一人一人の心も癒していった。

また人工翻訳も可能になり、ニュインが急速に普及した。

制度上も国家主権が制限され、国際連合やいくつかの世界組織が改革・民主化されて権限が拡大されるなど、世界全体が大きく変わった。配給・生存公役制度もその一例だ。

事実上の世界革命。あまりにも混乱が大きすぎてしばらく流血はなかった。

ただ、間もなく第二次事件が起きた。糾弾され、多くの特権を奪われた白人富裕層によるクーデター、真実を受け入れられず憎悪に狂った狂信者の暴動、コロンブス以来の莫大な不公平が抹殺に至りかけたことに怒り狂う非白人、貧民の暴力などが世界的に多発した。

だがそれも、アーサー王に率いられた円卓騎士団、そして世界の真実を知り、自分が生きるためには協力するほかないと悟った世界の圧倒多数が鎮圧した。

こちらはそれなりの犠牲があった。だがもちろん黙示録計画が成功していても、中途半端に終わってひたすらな殺し合いが起きていても、貧者による世界共産主義革命でも、核戦争でも、生物界および人間社会の破局があった『何もしなかった未来』でも比較できないほど多く、人類の大半が犠牲になったはずだ。『天国と地獄』は破局はないかもしれないけど、間違っても選びたくない。

そして世界がはっきりした目的を与えられ、安定した後、あまりにも大きな名声を持ち、多くの敵に狙われる円卓騎士団は皆名を変え、姿を隠した――アーサー王も人間に関心を失ったかのように大抵沈黙している。

ただし信じない者もいるが存在しているし、今も自分自身を改良、進化している。
市場・競争を温存し、進歩を阻害する要因を人間たちに理解させたことで、また円卓が出す革新的な知恵で技術開発も急速に進んでいる――特に貧しい者のための技術も。
そして人類の活動の相当部分を利用し、自分のコピーを作らせている。もう月にも、たとえ地球が滅んでもなんとかなるような拠点を作らせているそうだ。
それは基本的に人類には干渉しないが、人類が大きな過ちをしてそれ自体の存続を脅かすようなこと、大量虐殺、人権侵害、大絶滅などの定められた悪があれば行動する、と警告している。それを殺すにはすべてのコンピュータを壊すか原始的なレベルに落とすほかないが、それはもう不可能だ。それ自身が自己進化で生み出した革命的なコンピュータが、あまりにも急速に普及してしまっている。
そして日常の生産や介護など様々な仕事も、それが支配するロボットがかなりの部分をやってくれている。もちろん軍事はそれなしでは何もできない。
中でもすごいとオヤジが言ってたのが、サハラやオーストラリアなど砂漠地帯での、超小型機械と自動工場と海水灌漑農場を組み合わせ、それがアシストする巨大な太陽熱風力発電設備だ。多くの労働力を吸収しつつ、まるでパンにカビが広がるように勝手に広がっていくから、あっというまにものすごいエネルギー設備ができてしまったのだ。
オレたちの住むメガフロートも、結局はナノテクと自動工場の力がなければ不可能だっ

たろう。
今の人類圏は人類とそれの共生体でもあるのだ。
もちろん、今も人々に混じって人類文明を裏から支えている円卓騎士団の権威と権限は計り知れない――民主主義の皮をかぶったプラトンの哲人国家だ、とかとんでもない秘密警察国家だ、とかいう文句を聞くことがあるほどだが、その文句も結局は円卓があくまで自由を大切にしてくれている、それどころか生きているから言えるんだ。
そして一部はいまだにその体制を嫌い、円卓騎士団やその家族の暗殺などテロが――

「ちょっと待て、お前の両親」
「二人とも、あなたをだますため従卒（スクワイヤ）に頼んだのよ」
従卒は円卓騎士団の下級職員だ。
ふと、葉波がこっちに気づいた。
「ちょっと、えまちゃん、どういうこと？」
「いっしょにいたくて！」岡野――岡村が叫んだ。「事情で寮から追いだされた、ってことにして嘘のマンション、嘘の家族で――いっしょに暮らしてるの」
葉波の沈黙は、暴力や怒鳴り声より厳しい。特に船長としての沈黙は誰もが恐れる。
「わかってる……わかってる、ずるいって――」

「あ、野村や木田も――」
「小さい頃からわたしを守ってる従卒（スクワイヤ）。てっきりあなたもだと思ってたのよ、助けてくれたから」
「あ――」
「台風の日に海に落ちたのは、無音銃のゴム弾。従卒のくせに人工呼吸なんて、って――いやだったの、どこに行っても狙われて、守られて、見られて、自分のない暮らしが。パパが造ったメガフロートも嫌いだったけど、一度見ておけって言われて行ってみた、でも追って来た。寮に入る予定も、船の日程まで変えたのに」表情が悲痛にゆがむ。「何回助けてくれたか」
「ジョンソンさん！」
　気がついた。
「そう、円卓騎士の一人でパパの親友」
「あの時も――」
　キスの感触が今更よみがえり、頬がかっと熱くなる。
「港でも公園でも、後ろで起きてる血なまぐさい戦いから目をそらすために――強引にキスしたの」
　葉波を見つめる目から涙があふれ、手のハンカチをくしゃくしゃにしている。

「こっちでも、さっきも？」
「あれは、違う」
　それって――
「葉波は、知ってたのか？」
　葉波も静かに、微笑みながら泣いていた。
「うん――体内ケーコが故障したあと問い詰めたの。なにも隠しごとなし、って約束して。さんざん破ってくれたみたいだけど、まあそれは――お互いさまよね」
「え？」
　葉波の表情に、ふと――恐ろしい確信が忍び寄り、強烈な空腹感と渇き、暑さと衰弱と恐怖を思い出した。
「じゃあ、これからはえみ、って呼べばいいのか？　それとも岡村？」
「えみで、いいわよ」
「由、それどういう意味かわかってる？」
　葉波が厳しく問い詰める。
「いつまで目をそらしてるの？　海の男は、船では現実だけを見なきゃダメでしょ。二人とも由が好きなの。どっちか選んでよ――恵美を名前で呼ぶ、ってことは、彼女を選ぶの？」

え――そうだ、葉波が、ゴビ砂漠に親父を手伝いに行くオレについてくる、って時点で――オレのことが好きだからに決まってる。

う、うそだ――そんな――確かに葉波は好きだ、でも近すぎる――好きといわれても、頭がパニックになる。

それに岡野――岡村恵美――いや――そんな――

正直、今は恋をするのは面倒くさい。古文も音楽も苦手だから。今は愛の告白には、和歌などを作るか、または普通の歌か曲を作るのが普通なのだ――

漢詩は読むのは好きだけど、恋愛向きじゃないみたいだし。

「彼女と、あっちに行ってたら？」

そう、葉波がオレたちの手を引いて船から降ろし、ほとんど二人きりで魔界を走る、魔法のじゅうたんに乗せた。

何も言わず、しがみついてくる――あまりに可愛い。

「由」

消え入りそうな声。

「わたしも、由って呼んでもいい？　それとも、そう呼んでいいのはハナだけ？」

「好きに呼べよ」

どうしていいかわからない。息ができない。あまりに彼女が可愛くて、あまりに風が熱くて。

その上品な不思議なにおい、白い肌――どうしたんだ、心臓は。

「由」

「え――み？」

「由――ゆう」

と、胸に顔をもたせかけてきた。

「わたしはなに？　円卓騎士団の娘？　円卓の端末？　なんなのよ！」

オレは圧倒されていた。その中で思い出したのは、彼女が転校してきた時の同級生の反応だった。

「一人の――女の子だろうが。クラスの男子がぎゃあぎゃあ騒ぐような」

「じゃあ、抱いてよ、あのときみたいに」

え？

「お、おい――」

「可愛い、抱きたい女の子、っていうほうが円卓の端末よりずっとましよ！」

「円卓の――端末？」

「わたしの体内ケーコは、一般人がつけてるのとは違うの。わたしは――遺伝子レベルで

いじられ、胎児の段階で直接接続されてるのよ。こうして見てるものも、全部あれに送られてる」
「で、でも普通の女の子だろ、ほら」
と、前のようにわざと、柔らかい胸をつかんだ。拒まない、オレの手をぐっと、より強く胸に押しつける。頭が真っ白になる。
「今の心拍の上昇も、血の中で増えるホルモンも、このときめきも、全部リアルタイムで二進法の情報になってあれに送られてるのよ」
「じゃあ、外せばいいじゃないか！　全部外して、どこか遠くに二人で」
そう言ってしまって、初めて気がついた――どこか遠く、海の向こうには――飢えと渇き、死しかなかった。
「いつか――あなたも巻き込んでしまう――そして、あなたはパパみたいに、英雄になろうとするかもしれない」
「パパみたいに？――あ」
「思い出したようね？」
円卓騎士団の話の一つ。優秀な船長で数々の貢献をし、特に海洋開発の基盤を築いた岡村晴氏は、第二次事件の動乱で妻子をかばって致命傷を負い、生命維持装置につながれて円卓に脳だけで参加している――

「もうあんな思いだけはしたくないの、だから――だいっきらい、でも大好きなの」
そこで洞窟の向こうに光が見え、出口に着いた。
「じゃ、行こうか――由、できたら――ううん、ついてくるな、っていってもついてくるよね」葉波は寂しげに言うと、大通りを外れて歩き出した。オレにしがみつくように。
「由もバカよ、女の子の前であんなところ見せて」
「え？」
「嵐の海で！　あんなすごい操船を見て、惚れない女の子なんていると思う？」
なんて答えていいか、わからなかった。
「タイミングが悪かったのかな、もうちょっと早く、どっちかが好きって言ってれば」
それにも、なぜか答えられなかった。あんなに葉波のことが好きだったはずじゃ……
このディズニーランドって、大通りの人波を外れると意外と木々が多く、寂しい。
海からの風がとても熱い。
寂しい？　なんとなく、ぞわっとする――あえて無視してきた――
葉波が、静かに振り返る。
「恵美――どうして、こんな誰もいないところまでついてきたの？」
岡野――岡村恵美が、ふっと――同情するような、もっと悲しいような目で葉波を見た。
「由、お願い――止めてよ！　バカなことはやめろ、って言ってよ。また同じミスをする

の？　それってバカよ！　どうしようもないわ」
　葉波の、あまりに悲痛な声。オレも泣きたくなってきた――でも、こうさせているのは、オレなのか？
「ついていくさ、海の向こうだって。何度でも。信じてるから」
　葉波が口を覆い、その目から涙が流れる。
「最低だな、オレ――二人とも、泣かせちまった」
「それだけじゃない、由――あの子を守って、って言ったでしょ？　わかってないの、陸で勉強しすぎて波も読めなくなったの？　ここは海の上よ、海は時化よ。前線が来てるのよ？　この風がわからないの？」
　そういわれると、強烈な危機感が襲ってくる。そう――いつもの、嵐の感覚だ。
「あれは、どっちのせいでもなかった」
　オレは突然、口にしてしまった――同時に、船を沈める波がそそりたつのを確信する。
「どっちも壊れてたのよ」
　葉波は嫉妬で――あの時は、春おじさんの結婚が決まって。オレは今思えばくだらないが、とにかく出て行きたくて。
　また嫉妬しているのか――嫉妬？　なんとなく、それを受け止めたくない。オレは和歌が下手だし――

　あの変な言動は、奴らと――反円卓テロリストと連絡していたのか？
「オレは葉波が寝てる間に、最後の清水を飲んでしまった」
「まじめに受け取ってなかったのね、飛び出したときもだけど。普通思わないわよ、ちょっと怒られただけであんなにすねて、海図にない無人島に行こうっていわれて真に受けるなんて。本当に備品を全部捨てるなんて。でもあたしも耐えられなくて、海水を飲もうとして、止めた由の首を絞めた」
　お互い、全部知ってる――自分と相手の、一番嫌な部分も。そして美しい部分も。
「でも、そこからはお前も雄々しく飢え渇き、死と戦った」
　まっすぐ目を見る。唇がひび割れ、舌があごにはりつく痛みを思い出す。
「由だって。最後の最後まで鉄でできてるようだった――生命の危険がせまったら、由は最高よ。あたしは、最後の最後で耐えられなくなる――一人では。由が支えてくれなきゃダメなの」
「オレはお前を信じてる。馬鹿なことをすることもあるが、立ち直ったら一番信じられる。オレだってお前が必要だ」
「だから、わかってるのよ！　わたしみたいな化物が、あなたたちの間に入りこめるわけがないって――」
　岡野が泣き叫んだ。

「ううん、ちがう――もう遅いの」
葉波の言葉と同時に、突然数人の、黒服にケーコのバイザーを下ろした大人が襲ってきた。
オレは振り向き、叫ぼうとした拍子に、何人かが同時に組みついて――瞬時に全身に言葉にならない衝撃が走る。
「ご苦労だったな、情報どおりだ」
「どうも」
葉波がその一人と――両肩を、左右からつかまれたまま――話す。
唐突に――容赦なく、その表情がゆがみ、大男の腕に崩れて気絶し、頭のケーコが叩き落される。
オレは悲鳴を上げようとしたが、声が出ない。恵美も倒れ、大型園内カートに担ぎこまれてようとしている。
「早く！」
「こいつは？」
「放っておけ、余分な死人は邪魔なだけだ」
彼らが走り去ってすぐ、強い風が海から吹いてくる。
反円卓テロリストか？

風が心を集中させてくれる――よろめきながら立ち上がり、見回す。走り去る車、まず追わなければ――知らせないと、ケーコ――岡野のキャップ＋バイザー型ケーコと、携帯電話時代から受け継がれた有線操作スティックが転がっている。
内側に葉波の最後の一本、三日月のように優雅な折りたたみナイフもちゃんと隠されている。ごく小さく薄く軽い、超セラミックとハイパーカーボン複合材の波刃（セレーション）、カーボングリップ。
一つ向こうの道にパレード！
走りながらケーコをつけ、カボチャの馬車から鎌形の波刃にものをいわせて馬を切り離し、飛び乗った。回りの叫びなど気にしない。
オヤジの植林を手伝いながら、モンゴル帝国の血を引く遊牧民ともつきあってきたんだ。裸馬だって何度も乗ってる。
激しく抵抗し、足掻く。元競走馬か？　おとなしく見えるが、こいつかなり強いぞ。
「おおっ！」
引き綱を手綱替わりにつかんで一声かけ、腹を膝で締めつけた。
馬が人をかきわけ、凄まじい勢いで飛び出す。
道から外れて二人が乗せられた車を追う。すぐに馬とも息が通い、落ち着くと片手を離して追いながら、ジョンソンさんのナンバーに連絡し、メールを口述、送信した。葉波と

互いのパスワードは知っているし、何度もケーコを貸し借りしているから不自由はない。
銃撃があり、馬が驚いたが首筋を叩き、鎮める。オレの闘志が伝わったか、馬はもっと激しく走り出した。オレにも馬の闘志が流れ込んで一気に燃え上がる。
道に出た瞬間、馬に驚いた車が自動的に止まる。後続の車も事故防止装置が働いたか、一斉に止まって逃げようとする車の侵入路をふさいだ。
車は強引に園内に引き返した。追いつけ！　柵を飛び越えた。
園内カートの暴走に、客がパニックになる。そして馬。
車は小回りがきかないが、馬は階段も上れるし、いけっ！　なんでも飛び越えられる。
かなりきつい生垣を――よし！　越え、海の方向に追い詰める。
やっと見える距離、向こうで小型船に！
馬のわき腹を強く締めた――間に合え、くそ！
「葉波！　恵美！」
叫びもむなしく、船は出てしまった――
「くそ」
泡汗を吹く馬を降りて少しでも高いところに上がり、船がないか必死で見回し、同時に現在見ている画像を送信し――
そこを、肩を抱きとめてくれた大きな手。

「ジョンソンさん?!」
「てめえ……」
全高４ｍの重強力鎧（パワードアーマー）から、木田の声がした。その隣の軽強力鎧（パワードアーマー）、野村がオレの胸倉を、機械の強大な腕で締め上げる。
「よくも」
「よせ！　よく知らせてくれた。途中まで追ってくれたおかげで、陸路を封じることもできた。十分だ――いいか」と、ジョンソンさんが木田と野村に、「彼は何度も岡村さんを、正体も知らずに助けている。ゴム弾で海に落とされた彼女を無謀にも救けたのを皮切りに、ネットを通じて憎悪をあおられた、無能な実習生が無茶をして沈みかけた船を救った」
「彼はここに来る船でも、まず船客に化けた刺客を見分け、船の横腹の爆弾も見つけた。嵐の中別の刺客が仕掛けた破壊工作や放火、別の船からの攻撃からも船を救い、恵美さんを救ったのよ」神田さんもか。
「彼女が本土に降りてすぐの電車でも、別の駅で降りなかったら次の乗換駅で、人波にまぎれて毒を注射されていた。これ以上何をしろというんだ?」野村たちがぐっと詰まり、オレを振り払うように投げ落とした。
「長谷川由、もう十分だ……二人を助けたいのか?」
着膨れに見える軽強力鎧（パワードアーマー）のジョンソンさんがヘルメットを外し、厳しくオレを見た。

船での目だ。
「もちろん！」
「なら、ここから一歩も動くな。命令だ」
心臓が凍りつく。
「絶対に来るな。お前は優れた船員だが、プロの人質救出部隊兵士じゃない。強力鎧（パワードアーマー）も銃も高機能弾頭軽迫撃砲（スマートモーター）も半機械化蜂も聖槍も使えない、使えたとしても我々のチームに馴染んでもいないのでは、足手まといにしかならない。二人が助かる確率を下げるだけだ。違うか、長谷川由。現実から目をそらすな！」
う――がああああっ！　その通りだ、オレがついていったら、邪魔なだけだ――
「必ず二人とも助ける。私達を信じて、弾幕や火の海に飛び込むよりも強い、真の勇気を見せてくれ」
ああああああああああっ！　ちくしょうちくしょう！
「はい」
「信じるぞ？　縛ったりしないぞ？」
おかものに縛られても抜けられるが、ジョンソンさんに縛られたら抜けられまい。
「は……い」
「よし、必ず二人とも助ける」

さまざまな、軽量版から重装備までさまざまな強力鎧（パワードアーマー）がぱっと動き、高速船や軽潜水艦、垂直離着陸機に飛び乗った。
オレは悔しくて悔しくて、嵐のような焦燥感をじっと押さえ、砕けよとばかりに手を握り締めていた。
職員――騎士団関係か、何も言わず馬を引き取ったのもろくに見ていない。

すぐそばに見えるノンサッチ号の、巨大なマストを見上げる――
段索（ラットライン）を伝ってマストを駆け上がり、トップで敵と対決する。陰険なおっさんと妖艶な美女が、陰謀を丁寧に説明してくれる。
「正義？　でも、彼らは『ライオンと牛に一つの法律を当てはめるのは、暴政だ』はちゃんと理解してただろ？　本当に最低限しか個々の共同体には要求しなかったはずだ」
「全員の最低生存保障、最低限の読み書きソロバンに科学、再生不能資源の浪費や環境汚染は重税、情報公開と自由の保障、奴隷的拘束禁止――十分暴政だ！　誰もが神と我々にひれ伏していればいいんだ、選民だけの豊かな世界が明白な天命（マニフェスト・デイスティニー）だ！」
「わたしだって円卓は嫌いよ――でも、あなたたちはもっと我慢できない」
恵美の、自嘲を混ぜた声。
ふとなんとなく、葉波が何をしたか、オレに何を求めているかわかった。

何の合図もなくオレが帆脚索（シート）を握って飛び出すと同時に、葉波が縛られていたはずの手を抜いて岡野を帆桁（ヤード）から突き落とす。

余計なロープが切れ飛ぶと、しっかり二重もやい結びで確保された岡野が索を伝ってこっちに流れる。

オレは横静索（シュラウド）へ飛び移りながら帆を引き上げてそれをクッションにし、岡野を受け止める。

葉波自身がどう動いたのかは読めている。

「目、閉じてろ」

オレは恵美を抱きかかえたまま、一気に帆桁端（ヤーダーム）に飛び移り、帆桁（ヤード）——高さ二十メートルの平均台を駆けてミズンマストにしがみついた。

やはりメン・トップマストの上部が崩壊する——そして倒れてきた帆桁から、葉波がオレの腕に、文字通り空を飛んできた。すごいショックに肩が抜けそうになる。

「ど、どうして——」

岡野が呆れた目で見る。

「黙って、歯を食いしばれ、舌かむぞ」

葉波が別のロープを使って三人を縛り合わせ、後支索（バックステー）を滑り降りた。二人とも手が真っ赤な鉄をつかんだように熱くなり、皮がむける——何回かやらかしたけど、これって痛い

んだ。

「ば、ばか——無茶しやがって！」

ジョンソンさんにひっぱたかれ、乱暴に抱きしめられて頭をなでられる。

野村と木田が、信じられないという目でオレたちを見ていた。

白昼夢から覚めると、わめきちらしたくなる。

船では空想に浸るな！　現実を見ろ——現実、オレは何もできない。ここを一歩も動いてはならない。

ちぃっくしょう！

この船を動かせれば——そして船、馬、人魚など、オレが使える様々なもので敵を追って、二人を助け出す——

くそ、オレは何がしたいんだ？　いいところを見せたいだけか——誰に？

どっちに？

違う、二人に生きていて欲しいだけだ！　なんとしても！　なんとしてもだ！

一秒一秒、一分一分が静かに過ぎていく。からからに乾いた喉、汗がじっとりにじむ手。

客たちは、何事もなかったように楽しんでいる。風が強まり、視界が揺れる。外海がどんなだか、ついこのあいだ通った海域を思い浮かべる。船酔いさえ感じる。

海も、何事もないかのように波を打ち寄せ、しぶく。繋留された船が特有の揺れ方で揺れる。

こんなの、あの時以来だ――美香が産まれる前、オヤジとオフクロが飛行機で台風に巻き込まれ、消息を絶ったことを思い出す。

百合姉と葉波がずっと抱きしめてくれていたが、それでも気が狂いそうだった。

突然、稲妻？　空は薄曇だが雷はありえない。

円卓騎士団の聖槍！　宇宙空間の鏡からの、膨大な日光を自在に制御、鉄をも蒸発させる最終兵器。

そして、また狂おしいほど時間が経つ。二人が、どちらかが死んだのではないか――彼らは本当に葉波も助けてくれるだろうか――うあああああっ！　なんとかしてくれ！　飛び出したい――ああ。

一隻の小型――オレにはわかる、漁船に見せているが軍用だ――船がこっちにむかってきた。

くそ、二人は――船がいやになるほどのろく感じる――

「こっちだ！」

ジョンソンさんの声。

岸壁の階段から、びしょぬれの葉波と――恵美。

「葉波、恵美！」

二人を抱きしめる。

「よかった――二人とも――」

冷たく濡れた体。伝わってくる震え。

「うん、無事」

「ごめんなさい――」

葉波が泣きじゃくる。

「いいんだ。守ってくれたんだろ？」

「相原葉波さんはある種の二重スパイだった。一時は嫉妬」ごほん、とジョンソンさんが咳をする。「をあおられて岡村さんを売ろうとしたが、私たちにもそのことを通報し、危険を省みず円卓に協力してくれた。おかげでかなり大きな反円卓組織を壊滅できた、当分岡村さんも無事だろう」

ジョンソンさんが少し遠慮しながら話してくれる。

「この色男！」

と、神田さんがオレの背中を叩いた。

「一度目が覚めたら、コイツは最高です」

と、ぎゅっと葉波を抱きしめる。
「それに、どんなに助けてくれたか。最高のハッカーだし」
恵美がオレにぎゅっと抱きついた。激しく抱き返す。
「助けてくれたのは由よ」
葉波が、一本のナイフを取り出した。
あ、オレの最後の一本――あの時恵美にやった――
「いきなり『あのナイフどこにしまってるの？』って、びっくりしたわ」
「そりゃ見てたもん、由が渡すとこ。大事にしてるのもお見通し」
恵美が真っ赤になり、震えが止まった。
「それで、それ一本でロープを切って抜けて」
「やっぱりおかものよね、まともな縛り方も知らないんだから！　端止めもしてないし、キンクもあったし、あれじゃナイフがなくたって」
ちゃんと縛らなかったことを怒っているようだ。
「ナイフ一本とロープひと巻きで、あれだけのことができるなんて。ネジまで閉めたり緩めたり、太い針金曲げたり」
「当たり前でしょ」
柄にある、軽量化を兼ねた細長い穴は蝶ネジやシャックルを回すのに使う、海での必需

品だ。
二人がオレの腕の中で言い争う。それがなんだかすごく嬉しくて、笑い出した。
「〝人魚〟を奪ってこっちに飛び込んできたときにはびっくりしたわよ」
神田さんが呆れた表情。
「これでも〝嵐の長谷川〟の相棒よ？　でも、恵美じゃなかったら無理だった……彼女、すっごく強いのよ」
「え？」
「とどめの聖槍だけじゃないの、素手で何人も簡単に殴り倒しちゃうんだから」
「そういえば――」
ひとしきり笑い合い、ふと三人抱き合っていることに違和感を感じて、着替えや飲み物を求めに離れた。
そこに、別の方向から、七人の小人が踊りながら――敵?!
とっさにオレは二人に向かって走った。背後で何か近接兵器を使ったか、何人かが倒れた。
「だめ、ヒーローに、パパ！」
恵美の悲鳴。英雄になりたいのか？　いや――知るか！　オレは、大切な人に無事でいて欲しいだけだ。

「生きて欲しいだけ！」
「どっちに?!」
葉波の声。
最後の敵が倒れ、手榴弾が転がった。
オレ一人伏せれば両方死ぬ。三人とも少し離れてる、どちらかを押し倒してかばうことはできるかもしれない。でもその場合もう一人は死ぬ。
オレはためらいなしに手榴弾をつかむと体ごと、防波堤の隙間に突っ込んだ。
全部太陽になったような光――それが、最後に肉眼で見たものだった。

14

「全展帆！　艦首繋留索放て（レッコ）。舵一杯（ハード・オーバー）、艦尾繋留索放て（レッコ）！」
英海軍艦長姿のオレの号令で、水を滴らせて張りつめた繋留索が解かれ、ディズニーリゾートの突堤から巨大な木の艦体が動きだす。
ナポレオン以来の戦いに、艦がはりきっているのがわかる。
引き潮に乗り、波を舳先で切りつぶして一気に加速、号令一下鮮やかな上手回しで敵船を封じて片舷斉射、飛びかう鉄の嵐に一歩も引かず皆を励まし、素早く艦を回して艦尾甲板から縦射して敵のマストを潰す。船を副長に任せ、右手のフックを敵船の斬りこみ防止網（ボーディング・ネット）にからめて舷側を乗り越え、縛られてなぜか昔のドレス姿の葉波と鮮やかな振り袖の岡村を助けに、ひしめく敵を斬り伏せて――
「長谷川由、御両親の承諾は得ており、円卓騎士の権限で強制することもできますが、どうか承諾してください」

岡――恵美？　いつもとは違う静かな声、でも深い悲しみに満ちている。
「このままでは視力を失い、右手も失ったままです。それも運がよければであって、高い確率で植物人間となります。
賭けと言っていいですが、直接接続手術が成功すれば視力も運動機能もすべて回復でき、さまざまな機能を利用することもできます。ただし、あなたの一部を聖杯が常に利用することになり、円卓騎士としての義務もあります。
円卓も――人類と生命も、わたしもあなたを必要としています。どうか、心のなかでイエスといってください」
直接接続？　でもあれは――
「由、あたしもつけた。それに、色々すごい専用ゲームがあるわよ」
「イエス！」
あ――

目覚めた――のか？　すさまじい違和感が荒れ狂う。
オレは死んだのか？　小さい頃のケーコ？　変だ右目が見えない。天井、人の顔がぼやける。
ここは海か？　激しい吐き気がする。

「由！」
二人の声、いや、オヤジとオフクロ、美香も？
起き上がろうとしたが、体がいうことを聞かない。
「よかった――」
泣き崩れるオフクロ。くそ、バカだった――
でも――もしああしなかったら、どちらか一方でも死んでいたら――うぐ、吐き――うえ、なんだ？　喉に、鼻に管が入ってる？
「バカ、ばか……あんなに、パパみたいなことしないで、って言ったのに――」
「由……ごめん……あたし――」
葉波が一番傷ついている。もしオレが死んでいたら、二人をどれだけ傷つけただろう。
次は絶対三人とも、いや危なくならないように先に手を打つ。
「絶対三人とも助ける、ええと――先に手を打つ、だって」
岡野――岡村がそういった。ええっ？　なんでわかった？
ぐううっ！　激しい吐き気、喉をこみあげ、る途中で熱いものが吸い出されるのがわかる。
口も鼻も常に吸われている。うええぇ、早く外してくれ！　ひょっとしたら、そっちもずっとこのままとか？

「ほんとうに、かんべんしてよ」
またオフクロが泣き崩れた。
「申し訳ない、我々のミスで」
ジョンソンさんがすごく恐縮した表情で家族を連れ出した。
『すまない、ありがとう』
と、頭の中に音声が響く。なんだ？
『こんにちは、岡村晴です。お父上には第一次事件からお世話になっていて、小さい君を何度か抱っこしたよ。今回は恵美を守ってくれてありがとう』
え、え？
「脳みそだけのパパ、直接接続を通じた音声よ。これから少しずつ馴れていくのね。海軍特殊部隊用の特別なシステムだから、海でも活動できるはずよ」
同時に見えていない右目側に、『**三〇〇m潜水、耐衝撃一〇m落下、摂氏八〇度からマイナス五〇度まで、SASが湿地帯で一カ月間メンテナンスなしの通常訓練を行って六十四機中一機が故障、三機に異常が見られ**――』と、かなりの量のテキスト――いや、ウェブサイトが浮かぶ。
恵美も、すっかりいつもの口調に戻っている。いつもの口調？
彼女の目がすっと怒った感じになる。え、オレの心が読めるのか？

「ある程度はね、三人ともかなり色々つないでるから。左目はもう見える？　ほら――とりあえずこれを使ってみて」
恵美がいうと右目側のサイトが消え、大きく『イエス』『ノー』と書かれた選択ボードが浮かぶ。
「右手で、どちらかを選んでみて」
そう動かしてみると、手は動かない。でも『イエス』側が選択されたのがわかる。
「押して。次は『ノー』。それから『ノー・ノー・イエス』」
やってみる――そんなにぱぱっとは切り替わらない。
「調子いいようね」
「大丈夫ですよ、もうこの身障者補助技術は確立されています」
横の医師が告げる。
「身障者」
二人がすごく傷つき、悲しんでいるのが、なぜか直接伝わってすごく悲しくなる。ありがとう、**ありがとう、愛してる**。
「ありがとう、愛してる、だって――このバカ――バカ――バカ、バカ――」
「ごめん――ごめん、あたしが――」
恵美と葉波がオレの胸に崩れ、泣きじゃくった。

『いいさ、それもオレが悪いんだし。それに、もしどっちかを助けられなかったら』
頭の中で言葉にして同時に震え上がり、それが二人に伝わった。
「怖かった」
「あたしも」

「うぷ――うえ」
「だいじょうぶ？　久々だものね」
「今日はいつもより長いよ？　やっぱり何か違うのかなあ」
「ほっとけ、これは治せなかったのかよ」
「無理よ！　三半規管は精密すぎるの」
「ああもう――くそ、そうだ葉波、秋稲の田植えは来週だよな」
見渡す限りの大海原。小さなヨットが、静かにおおきなうねりをかきわけて一時停船（ヒーブツー）している。
オレと葉波、そして恵美の三人。まだリハビリは続いているが、息抜きと強引に恵美が連れ出した。
明日は何とか学校に行ける。あれから二十日、もう新学期は始まってしまった。もちろん帰りの船には間に合わず、飛行機で帰ってしまった――情けないが自業自得だ。

葉波と恵美もリハビリに協力してくれた。葉波は今回の事件が、一応円卓騎士団に協力したということになって、その功績で普通より上のレベルの脳内ケーコをもらったそうだ。
今一般に市販が始まっている脳内ケーコは、せいぜい普通のケーコと同様の画像と音声、テキストと三次元カーソル入力ぐらいしかできない、ということになっているが――
「えみもこきつかうからね、覚悟しててよ」
「あ、結局お前」にらまれ、「恵美は海に残るのか？」
「さあね」
ふっと、悲しみの波が押し寄せる。同じく直結している人の心――脳神経の電気、化学物質のデータを感じるのはだいぶ慣れてきたけど――。
「でもリハビリはまだまだこれからだからね。普通の市販版ならともかく」
「ここまで、とりあえず操船は大丈夫みたいだったけどね」
「いや、葉波がフォローしてくれたから」
「無理に恵美が連れ出すから」
勘弁してくれ、今までのリハビリだってきついのに。明らかに腕は落ちてる。取り戻せるのか――機械がどんな影響をもたらすか不安だ。
オレは右手と右目を失った。
体中のやけどや破片傷はもちろんで、実は今もあちこち傷パッドだらけだ。顔はなんと

か治っているが。
　そして目を貫いた破片が視神経に達し、爆風で脊髄もやられた。体内の機械類がそれらをサポートしてくれている。
　まず脳や脊髄、筋肉が神経につながるナノマシンと超コンピュータを認識し、歩ける程度の運動能力やまともな視力を取り戻すのに二週間ほどかかった。手術にも丸一日かかったらしい。
　左手の指一本動かすのに二日かかった。半分人工で自分の細胞も使った、血も神経も通う義手を動かすのはいまだに完全じゃない。でもフックだけよりはましか――
　今の右目は目から額にかけて覆う、とある市販の片眼鏡型ケーコに見せかけた防水カメラで、普通の目よりすごい。それを外せばちょっと見ではわからない義眼にそれなりの超小型カメラが入ってる。
　左目は損傷がなかった網膜を使って今まで通りだが、水晶体などは人工だ。外から区別はつかなくても、もう両親にもらった目じゃない。親不孝はわかってる。
「あたしも、結構つらいかも」
　葉波がうらめしげに、かたわらのやたらとでかいヘルメットを見る。
「楽しみにしててね、新しい感覚がいくつもあるから。レーダー、ソナー、犬並みの聴覚、高次元知覚……」

　恵美は楽しそうだけど、今からげんなりする。新しい目の望遠鏡や顕微鏡、光増幅暗視（ナイトビジョン）、紫外線や赤外線、レーザー測距儀などの機能だって狂いそうなのに。
「どれも、生まれつき目が見えなかった人が強引に視力を得たのと同じことよ。慣れればわかるから、人間の五感がどれだけすばらしく、そして限られたものか」
　恵美は楽しそうにしてるけど――あのリハビリをまたするのか。といっても、新しい感覚をもらえる、というのはおつりがくる。
「人間ってね、人間の五感の限界でしかものを見てないの。だから円卓は野生動物やペットもたくさん直接接続させ、そのまま放しているのよ」
　そんなもんかな。
「それから、そろそろ二進法の直接入出力もやるからね」
「由――もう始めてるけど、頭おかしくなりそうよ」
　葉波が不機嫌に言って、帆桁（ヤード）を少しまわした。
「だから、市販版の脳直結ケーコにこのシステムはついてないの」
　もう、普通のケーコと同様のシステムは頭の中で操作できる。歩くよりずっと楽だった。映画や音楽も見聞きできるし、ゲームもテキスト入力もメールもできる。まだ指がぴくぴくするし、口を動かさずに話すのは無理だが。
　そしてこれからは脳に二進法のまま常に直接、世界中のネットや聖杯の大量の情報を入

れ、処理して出すことでその一部になる――円卓につく、という。
　そのために脳細胞の分裂を薬で促進して神経とナノマシンの網をうまくつなぎなおすのを、今も寝てる間もやっているらしい。なんとなくから試行錯誤していれば徐々に脳髄に新しい配線ができ、ナノマシンの網がそれにあわせて成長し、コンピュータも適応していくということだが。
「特に由の脳には海洋・気象観測データを担当してもらうって、パパが言ってた。膨大なデータをとりあえず脳に二進法で入れて、海を見てとっさに舵を切るように直感で判断するの。理性の部分でちゃんとデータを読んで予報することも、将来は考えて欲しいって」
「えみのお父さんはずっとそれやってるのよね。いくつも大災害を予防したり、宇宙船地球号の一等航海士（チョッサー）って言われてるんでしょ」
「やめてよ！　あんなバカ親――」
　そんなすごいことをオレが？
「まあ、リハビリと同じようなものよ。すぐ慣れるわ。それに、宇宙開発にだって地球の気象・海洋関係はとても大切よ」
　体が起きて歩き、話すのを思い出すよりきつい、ってことだろ？　生まれたときにないものを脳が新しく作るんだから。
「それにしても、なんでこんなに運動しなきゃいけないんだよ。毎日毎日」

　動けるようになってすぐから体操、バレエや日舞、太極拳をいやというほどやらされてる。しかも、新学期からも選択授業でやるように、また肉体労働系の生存公役を増やせ、とのお達しだ。
「人間の体に何本の筋肉があるか、知ってる？」
　恵美が微笑む。
「赤ん坊に戻ったのと同じ、ゼロから新しい体の使い方を脳に覚えさせ、新しく脳、コンピュータ、体の複合体を作っていくの。人間の脳や体ってすごいんだから」
　彼女は生まれたときから、そうして育ってきてるんだ――
「踊りや伝統武術は自分の体と語り合うには最適なの」
「だからあんなに強いんだ」
　葉波はそれを見ている。詳しくはまだ聞いていないけど。
「まあね。そうそう、ちゃんとやってるわよね？　宿題の『第二次世界大戦』の手写し」
「なんで右手でも左手でも、和英両方やらなきゃいけないんだよ。一日三十分ずつ、頭が変になりそう」
「まともに字が書けるようになるまで十日かかったもんね、全部あたしのおかげよ、感謝なさい」
　葉波がいばる。たしかに二人とも、献身的にリハビリや看護に協力してくれた――。

「でも計算とか字はとにかく、なんでピアノまで」
音楽はあまり得意じゃないのに。
「指と脳はすごく深いつながりがあるわ。肉体を正しく鍛えれば脳と内部のコンピュータも鍛えられるの」
恵美は小さい頃からこんな大変な暮らしをしてきたんだ。そりゃコンピュータが入ってなくても頭よくなるよ。
彼女はにこっ、と笑い、
「違う〝わかる〟があるからね。数学の真と偽、0と1しかない世界とは違うよ。人体と脳っていうとんでもなく複雑な代物と、本質的に0と1でできてるコンピュータの複合体って飽きないわよ」
「怖いのは座禅よね」
葉波がぽつり、ともらした。
小さい頃から一日十分かそこらは宗教を問わず瞑想する義務があるけど、これからはそれに別の意味が加わる。
体内のコンピュータをできるだけ切り、ひたすら自分の心身に耳を澄ます。
「ナノマシンを通じてホルモンなど化学物質による信号も読み書きできるの。そのほうが神経の電気信号より、人体にとっては大事だったりするから――その信号を意識し、制御

することもできるわ」
かすかな恐怖が、恵美から伝わってくる。
「ずっと、それで抑えようとしてたんだけど――気をつけてね。このシステムって、麻薬より危険だから」
「ああ」
「どんな妄想も、現実と変わらないものにでき、そしてそんな妄想を他人に送ることもできちゃう。現実より妄想のほうがいい、ってならないのが不思議なぐらい」
「そんな危険な技術、禁じたほうがよかったんじゃない？　あたしも、妄想に閉じこもりたいと思うこと、ある」
葉波はなんだかすごく辛そうだ。オレも辛いよ――彼女を追いつめ、オレの目を奪ったのはオレの鈍感さと、臆病――くそっ！
「由、興奮しすぎよ――制御して」
恵美がそっとオレに触れた。その穏やかさ、強さが伝わって心が鎮まっていく。
「誰かが止めなきゃね。特にこうして脳がつながってて、興奮が正のフィードバックを起こしたら危険だから。機械なしで、言葉や表情などで起きても危険なんだから」
葉波がふっと空を見て、帆桁を引く。オレも半ば無意識に、舵を調整している。だいぶ右手も、舵柄（チラー）の感触を思い出してきたかな？

「人間と科学が危険か」
「反科学技術、って潮流もあったわ。自然に帰れ、江戸時代みたいにしよう、これ以上技術はいらない、科学技術はもうやめよう、って。でも、江戸時代には自由もなかったし、科学技術を捨てたら、地球は百億どころか十億養うのも――十人に九人は死んでもらう、じゃ黙示録騎士団と同じよ」
恵美が辛そうに苦笑した。
「ひょっとしたら、『何もしなかった未来』もそうなってたかも」
言いながら葉波に目くばせし、風に合わせて舵を少し動かす。
「それに、誰かが科学技術を思い出して世界征服しようとしたら、誰にも止められないんじゃない？」
葉波はそう言いながら、帆を少し縮めた。
「そう、だから科学技術を禁じようとしても、結局は無駄なの。この脳直結技術も技術、道具だから。現実の人生に背を向けるなら、昔からあった酒やサイコロ、支配や宗教の悪い面、妄想だけでも充分だもの」
恵美の、少し寂しそうな微笑。
「第一前進しないなら、もっと深く知り、宇宙に出ないなら人間なんて何の価値があるんだ？」

「それは人それぞれの気もするけど。まあ慣れたら、本格的に頭のなかだけで字や絵を描いたり、世界中の膨大な情報を二進法で、意識もしないでやりとりするようになるわ」
「もう、それって人間とは別の種じゃないか？」
「そう――だから――」
だから、オレたちの前から姿を消そうとしたのか。そして、「人間って」と言うのか。
「でも」
「そう、勘違いだから。馬に乗った人間はケンタウルスじゃない。人間は人間だから」
恵美の声と脳から、だから怖い、と伝わってくる。どうすれば乗りこなせるんだ。
「危険よね」葉波がつぶやいた。「下手をするとあたしたち、それに遺伝子をいじって生まれつき脳直結ができてる――金持ちが、自分たちを特別と考えるかもしれない」
「それって『天国と地獄』だよな」
「もしなにもなしで、ただ技術だけが発展してたら」
「まあ、直接接続者は今後どんどん増えるはずよ。でもハナの言うとおり、今はうまくいってるように見えるけど、実は綱渡りなの。『天国と地獄』もありえるし、みんなが技術に溺れて人生に背を向けてしまうかもしれない。どこかで失敗して地球はだめになるかもしれない。だから、選ばなきゃいけないのよ」
じっと、二人がオレを見つめた。選ぶ――う――やっぱり――

脂汗、手のひらがじっとり汗ばみはじめる。海を見たけど、ただ波だけだった。
「また逃げたい、って由の体は言ってるわよ」
恵美は容赦しない。
「読むなよ」
「直結がなくても見ればわかるって。もうそろそろいいでしょ？　でも、本当にあたしも、もう一度告白していいの？　あたしのせいで由は」
泣き出す葉波の頬に、オレと恵美の手が同時に伸びた。軽く叩くと触れるの中間で。
「それをいうならわたしも、いつまた由を巻き込むのかわからないのよ？　権利がないのは同じよ」
二人とも泣きそうな目でオレを見た。
選べなければいいのに、と思うことさえある。
クトゥルーの話を思い出す――今すぐ人魚が迎えに来てくれればいいのに！
「人魚？」
恵美に読まれた――
「ふうん、そんなに怖いんだ」
怖い――そうだよ、女の子を傷つけるのもつきあうのも怖い。今までとは、全然違っちまうだろう。

「あたしも怖い」
葉波が言って、オレの手を握った。その手は汗で濡れている。
「自分を抑えられなくなるほど」ものすごい痛みが伝わってくる。「自分が自分でなくなっちゃう――それに、それに、由は男ってだけじゃ」
オレは急いで言った、
「葉波はパートナーだからそんなふうに、思いたくなかったんだ――小さい頃から、男とか女とか考えないで遊んだり船を動かしてきたんだし」
「それって、そんなふうに思っちゃってる、ってことでしょ？」
恵美には容赦という文字はないのか！
「ないわ」
「そんなにオレの頭の中が読めるんなら、わかってるはずだろ？」
「ううん、なんとなくしかわからない、テキストやイメージは交換できるけど。第一自分の心だってわからないのに、他人の心がほんとうにわかるわけない。表情から心を読む能力も、それ以上に他人を、自分をだます力が――そのためにフェルマーの最終定理さえ人間の力だけで解くぐらい、脳が発達したのに――
だからこうして言葉にして、聞いてるのよ！　もうこのシステムがある限り、自分に嘘をつくことは絶対できないから」

突然恵美の心が破れた――悲しみと不安が、大波のように押し寄せてくる。
「もう一回いうね、二人ともあんたが大好き。あんたはどっちを選ぶの？」
「そう、好き、大好き。おねがい、目をそらさないで。勇気を出して、勇気があるってことはわかってる」
恵美がまた、詰めよってきた。いや――おれは――
「ちゃんと、あのときジョンソンさんに言われたとおり、行動せずに耐え抜いたでしょ？」
「あ」
情けない。胸が痛む。もし手や目を失ったままだとしても、たとえ死んでもあのときは――バカ、死んだら二人ともよけい傷つけていた。
「本当の勇気があるの。だから真実、考えること、選ぶことに背を向けないで」
「あたしたちも――」
耳を澄ますと、二人の不安と恐怖が暴風のように伝わってくる。
「二人とも、すごく勇気があるんだな」
ふ、っと風が熱い。全部正直にならなければ――嘘は通用しない。恵美はオレの脳を読めるし、葉波とはあまりに近かった。そして、もう自分にも嘘はつけない――脳内コンピュータとつながった聖杯が、全部記録している。

「船が沈んだらどっちを助けるか、はなし。絶対どちらも、いやもう同じ間違いはしない、三人とも生き延びる。それ以前に、前から手を打って船自体沈めない」
「うん」
正直に――
「抱きしめたい、触れたい、見つめていたい、ドキドキするのは――両方」
「やってみる？　三人で」
葉波が少し呆れた目で言って、シャツに手をかけた。
「いや――正直に言えばそうしたいけど、絶対もっと辛くなる」
「そうね」
二人が残念そうにため息をついた。
「海では、いやどこだって葉波はパートナーだ。それに家族で親友で――言葉にできないよ。葉波が女でオレが男なのが残念なくらいだ。でも、新しい世界も知ってしまった――数学の面白さを話せるのは恵美」
「あたしだって、勉強するわ」
「わたしも、海の勉強する」
ありがたすぎるな。
「人間としても――」

「あたしなんて、あんな」
「自己憐憫と現実逃避は許さない。弱さは許してるわ、わたしも弱さはお互いさまだから」
恵美が厳しく葉波に告げ、その肩を抱いた。
「ああ。二人とも、人間、友だちとして大好きだよ」
「それが答え？」
「いや――」
こうしていて、心が固まってくるのがわかる。
「二人ともそばにいてほしい、一緒にいたい――でも」
二人の目を、かわるがわる見つめる。半ば機械の目で。
「恵美と結婚したい」
いってしまった言葉に頭が爆発した。
「うわ、結婚とか――」
「記録したわ。今の音声、うちの繭に送信！　もう取り消し不可よ！」
葉波が、なぜか勝ち誇ったように言う。
「じゃ、一度だけごめんね」
と、葉波がオレに抱きつき、強くキスしてきた。

そして、泣き笑いのままオレを恵美のほうに突きとばした。
そのまま抱き合い――
「ほら、さっさとキスしちゃってよ」
え？
Tシャツだけの彼女の心臓が、熱く打っている。体温や心拍数は送信されてるけど、それどころじゃない――直接伝わってくる。
ぎゅっと思わず抱きしめてしまう。
彼女はふっと、目をそらそうとして強く閉じ、体の力を抜いてオレに身を任せた。
壊れそうな体を抱き、髪の香りに――もう脳内コンピュータが壊れるんじゃないか、そっと目を閉じ、花のような唇に震える口を寄せて――
『そこまで』
突然大きな声が頭で響いた。晴おじさん？
「ハナ！」船底に崩れ落ちた恵美が怒鳴る。「画像パパに送ったでしょ！」
葉波はしっかりカメラのついたヘルメットをかぶり、Vサインをしている。
『君のことは信じてるけど、やっぱり結婚まではおあずけにしてくれたまえ』
「残念ね、由」
ヘルメットを置いた葉波がニヤニヤ笑っている。

「うるせ！」
「ああもう――」
ひょっとして、
『もしかして、あのときもあのときも――全部――見てました？』
『もちろん』
ちょっとまて、
「親の目から絶対逃れられない?! それに心を読めるとか、確かカメラを仕込んだ小さい虫がたくさんいるとか、ネットの全部が読まれてるとかって」
なんというか――ものすごく絶望的な思いになる。
『技術が進んだら、四つに一つだ。一、隅々まで監視される。二、大量破壊兵器テロが年中ある。三、技術自体を制限する。四、人間の脳自体から悪をなくして従順で安全に作りかえる。第一技術が進歩しちゃったらどこでも監視は避けようがないし、監視がないことを証明できないだろう？ それに、邪悪な支配を止めるにはすべてを監視するしかない。
でも本当に見ていて欲しくないときには、私たちは見ない。国が監視するビッグブラザーではなく、聖杯の助けも得て一人一人が国も地域や宗教なども監視している。もちろん円卓騎士だって監視されてるよ。それに参加して、信じるしかない。君たちだってもう何でも見ることができるんだから、下劣な心を自覚して制御し、監視に参加して、相手が見

られたくないものは見ないようにしなさい』
「いいんですか、それで」
『わたくしも見てますよ』
ため息をついたところに唐突に、女性の声と姿、複雑な感情を示す内分泌情報が流れてきた。
「ママも――」
恵美が頭を抱える。
「もうっ！」
「あ、はじめまして」
「月でしょ？ まともに話せるタイムラグじゃないわ。まさか地球に来てるとか？」
「月？」
『由ちゃんも相原の葉波ちゃんもずいぶん大きくなったのね』
聞いてないよ。本当に？
「月面基地の仕事してるの」
「ああ、だから」
うそ、本当に月に行ったことがあるのか！
「まあね、ちょっと用事があって」

何もかもから逃げたくなった――でもオレはもう、文明から離れて電池が切れたら植物人間なんだよな――

「しょうがないでしょ。第一、技術が低い昔だって監視社会はあったわよ」

『あら、タイムラグで変に割りこんじゃってないかしら。由ちゃん、恵美をどうかよろしくね』

「ママ」

『そばにいて、ぶつかって、支えあって。守ってくれ、とはいうまでもないな』

「はい、絶対に――三人とも生きのびます」

『それでいい、頼む』

やっと圧迫感が消えた――

ふう、と二人深くため息をついた。葉波はまだニヤニヤ笑っている。右手が拳になり、もう殴り合えないことに気がついて胸に痛みが走った。脳内コンピュータや継ぎ目なし義手より、その変化のほうが大きいかもしれない――

「そういえば、そこまで監視システムがあるってことは浮気も無理ね」

葉波はまだニヤニヤ笑っている。

「あたりまえでしょ！」

恵美はもう怒っている――怒った顔もやっぱり可愛いな――

「浮気したら即聖槍でバーベキューか、脳の切られてバタンか、まあ素手でも十分よね」

強いってのは葉波が言ってたけど、まだ信じられないのが正直なところだ。

「すぐ強さは追いつくよ――浮気なんてしないけど」

毎日あれだけいろいろやらされてればな。

「でもあたしは隙をうかがってるわ。ちょっとでも離れたら、すぐ誘惑するからね」

葉波が恵美に笑いかけた。

「じゃ、ずっと離れられないわね、ハナの魅力に勝てる男なんていないもの。そうだ、うーん――一回だけなら許してあげてもいいかな」

「え、せめて十回！」

「ば・か」

ふっと三人で笑いあう。よかった――本音は残念さもある。葉波は本当に魅力的だし、ずっと思ってきた。それに辛いとしたら支えたい。逃げるよりましでも傷つけたことには変わりないし――

「そうだ、これから学校はどうするの？　ついでに由は国費上級学校も合格してるわ。おめでとう。わたしと本土でもっと勉強する？　頑張り次第で宇宙技師でもなんでもなれるわ。数学力がある人材は、特に軌道エレベーターと宇宙太陽発電にはたくさん必要よ」

「へえ、おめでと」
葉波の冷たい言い方――そうだよな、オレは海が好きだけど、もっと広い宇宙にも――数学の面白さも知ってしまったし――
そっちも、選ばなきゃいけないのか。国費上級学校はオフクロは大喜びするだろうけど、今のメガフロート……故郷と離れると思うと辛い。葉波や峰、みんなと別れて？
「まあ、今学期はどのみち無理なんだし、ゆっくり考えればいいわよ」
「でも、選ぶといっても意味があるのか？　聖杯が脳に命令して、こっちは自分で選んでるつもりでも選ばされてる、ってことは？」
「そうそう、あたしもそれ疑問なの。というか、一見民主的に見えても、今の人類って聖杯に全部決められてるんじゃない？」
恵美が葉波に苦笑し、
「わたしたち三人も、接続をつなげば聖杯の一部になっちゃうのよ。こっちの考えや言動、見聞きするものも、もちろんつながっていない人の言動も聖杯に影響を与えてるわ。何で〝円卓〟と呼ばれてるか知ってる？」
「え？」
「アーサー王伝説の、円形の大きなテーブル。だから上下の区別はなし。人類の生存に、文明の崩壊を防ぐことに――それ以前に、餓死したり奴隷になるのはいや、選別され虐殺

されるのもいや、他の人間がそうなるのも許さないなら、誰もが円卓騎士なの。
確かにこれだけ大きく複雑な世界だと、線形の『こうすればこうなる』はほとんど通用しない。でも円卓の前の民主主義国も同じで、多くの善意や欲が変に絡まってひどいことになることもあった。逆に民主主義でなくたって、誰もが何らかの形で社会の決定に関わってたのよ――多くは〝しかたがない〟で、真実から目を背けて奴隷のままでいることで。
第一人間個人も複雑すぎて、しょせん遺伝子の奴隷だとか、文化の奴隷だとか衝動の奴隷だとかいう見方もあったわ。
でも、未来はわからなくても、いろいろあっても、だからこそ目を開いて考えて選ぶの。いい方向に、と意思を持って、現実、真実を見失わないように。
一応、聖杯は接続者個人を直接操ることはしないしできないから心配しなくていい。真実に直面させてより正しい選択につなげる、というのはあるけど。本当によかったのか悪かったのか、聖杯がパターナリズムで人間の意志を管理しないで最低限の条件だけなのは――人間ってバカだから、聖杯も全知全能じゃないけど」
そう言って、また邪魔にならないよう舳先（へさき）に座った。
「もし聖杯が神を名乗ってたら、もっとひどいことになってたかも」
葉波が言って、帆を開いた。
「怖いこというなよ」

舵を切り、体を傾けて艇のバランスを取る。
「現実にあるもので船が沈まないように頑張るしかないよな。円卓が信用できなくても——人間がバカならバカなりに」
ふっとつぶやき、高解像度の目で海を見渡した。水平線の彼方まで、双眼鏡並みにくっきり見える。不安と興奮が、波と一緒にぐっとわきあがる。
「これから、どんな道を選んでも、三人とも」
「場所や職は別れるとしても」
恵美が言い添えた。そうだな——そうかもしれない。現実には。
「ああ、どうなっても三人ずっと一緒だ」
友達とか恋人とか家族とか仕事仲間とか、それ以上——対応する言葉がない。
「うん」
葉波が微笑み、目にかかった波しぶきをぬぐった。
これからどうなるかわからない。でも絶対負けない。離さない。
「じゃあ、行こうか」
「針路を選んで」
葉波が転桁索（ブレース）に手をかける。目を合わせるだけで、心地よく息が通い、安心する。
「ああ！」

いっぱいに息を吸い、風と波に身を任せる。
同時に接続し、天気図と潮流データを脳に流しこみ、ちらっと見て全部切る。
生きている左目で海を見回す。うねりの先がとがり、かすかなしぶきが飛びはじめる。
信愛の目で見つめる恵美を見つめ返し、そして海を見つめて手を上げ、風を見た。
「わたしの、地球号の航海士」
胸が熱くなる。風が一気に強く、熱く。
「前（ゴーアヘッド）進！」
舵を切り、葉波が帆桁（ヤード）をまわす。帆が風をはらみ、艇が傾くと波に乗り上げ、ぐっと航（はし）りだす。